

2019年度
シラバス

大学院音楽研究科

修士課程

博士後期課程

2019年度学事予定表

“音楽芸術の研鑽”と“人間形成”

武蔵野音楽大学学長

福井 直敬

わが国において未だ音楽教育の基盤が弱体であった昭和4年（1929）、西洋音楽の美に感動し、その普及と向上に強い意欲をもって取り組んだ創立者福井直秋と、彼を支えた多くの協力者たちの「和」により、本学の前身、武蔵野音楽学校は創設されました。以来、本学はこの「(和)のこころ」を建学の精神とし、また一貫して「音楽芸術の研鑽」と併せて「人間形成」を教育の方針として、約90年に及ぶ個性豊かな発展の歴史を刻んでまいりました。

本学では、昭和39年に大学院音楽研究科博士前期課程（修士課程）を設置し、これまで50有余年にわたって、優れた音楽家や研究者を輩出してきました。この間、平成22年度から修士課程の器楽専攻と声楽専攻の中に実技教育により特化した「ヴィルトゥオーゾコース」を設置しました。

また平成29年度には、江古田新キャンパスを竣工させ、これを機に、江古田キャンパスと入間キャンパスに分かれていた、大学院の教育・研究機能を江古田新キャンパスに一元化し、教育・研究活動の効率化を図りました。

さらに、平成30年度より、修士課程の器楽専攻に「ピアノコラボレイティブアーツコース」を開設し、歌曲、オペラ、器楽の伴奏など、アンサンブル奏者として共演者とともに音楽を創り出し活躍するピアニスト、コラボレイティブやコレペティートル等の養成を図ります。

一方、博士後期課程は平成16年に設置し、修士から博士までの学位を取得出来る一貫した教育研究体制を整えました。

本大学院では、充実した教員組織と施設、設備のもとで、理論と応用、演奏と創作芸術を研究指導し、音楽芸術を深く究め、国際的にも通用する優れた演奏家、研究者、教育者を社会に送り出します。

また、本学では建学の精神に則り、高潔な人格と感性の陶冶^{とうや}に努めておりますが、生活規範として、学生諸君に“礼儀”（Propriety）、“清潔”（Purity）“時間厳守”（Punctuality）の「3 P主義」を励行するように指導し、社会の要請に柔軟に対応できる、有能な人材の育成に努力を傾注しております。

武蔵野音楽大学大学院音楽研究科

《学位授与の方針、教育課程編成・実施の方針》

| | |
|--|---|
| <p style="text-align: center;">学位授与の方針 (ディプロマ・ポリシー)</p> | <p>武蔵野音楽大学大学院音楽研究科の目的に基づき、以下のよう に、高度な知識および技術を身につけたと認められる者に学位を 授与する。</p> <p>【博士前期課程（修士課程）】</p> <p>本学大学院学則第4条第1項に基づき、2年以上在学し、30 単位以上を修得した上で、専攻実技の修了試験、修士論文の審査 に合格した者に修士（音楽）または修士（音楽学）の学位を授与 する。</p> <p>なお、ヴィルトゥオーゾコースは、修士論文を課すことなく、 学位審査演奏に合格した者に修士（音楽）の学位を授与する。</p> <p>【博士後期課程】</p> <p>本学大学院学則第4条第2項に基づき、3年以上在学し、10 単位以上を修得した上で、演奏あるいは作品の修了試験、博士論 文の審査に合格した者に博士（音楽）または博士（音楽学）の学 位を授与する。</p> |
| <p style="text-align: center;">教育課程編成・実施の方針 (カリキュラム・ポリシー)</p> | <p>武蔵野音楽大学大学院音楽研究科は、専門的かつ広い視野に立 ち、音楽芸術の分野について高度な学識と技術を体系的に教授研 究する目的で、以下のようにカリキュラムを編成する。</p> <p>【博士前期課程（修士課程）】</p> <ol style="list-style-type: none">1 次の専攻ごとの必修科目は学年制とする。<ol style="list-style-type: none">① 器楽専攻、声楽専攻、作曲専攻の専攻研究および作品研究② 音楽学専攻、音楽教育専攻の専攻研究および総合演習2 修士論文については、次の専攻ごとの必修科目で、論文作成 の指導を行い提出させる。なお、ヴィルトゥオーゾコース は、演奏家養成に対応した科目を開講し、修士論文の提出は 課さない。<ol style="list-style-type: none">① 器楽専攻、声楽専攻、作曲専攻の文献学研究および修士 論文演習② 音楽学専攻、音楽教育専攻の文献学研究および専攻研究3 器楽専攻、声楽専攻では公開の演奏試験を、作曲専攻では公 開の作品演奏試験を課す。ヴィルトゥオーゾコースは、毎年 次リサイクル形式の演奏試験を課す。4 高等学校教諭一種免許状（音楽）および中学校教諭一種免許 状（音楽）を取得している者は、所定の単位を修得すること で、高等学校教諭専修免許状（音楽）および中学校教諭専修 免許状（音楽）を取得することができる。 <p>【博士後期課程】</p> <ol style="list-style-type: none">1 博士論文については、研究領域ごとの必修科目である研究領 域研究指導および研究領域論文演習で、論文作成の指導を行 い提出させる。2 前項の論文に加え、器楽および声楽の研究領域では公開の演 奏試験を、作曲の研究領域では公開の作品演奏試験を課す。 |

シラバスの利用について

2019年度、本学が開講する授業科目のシラバス（授業計画）です。履修に際しての参考とし、このシラバスを大いに活用してください。

シラバスには、授業の目標や内容、自学自習の指示等、修学上の指針となる内容を示してあります。

本学では、**授業の履修登録をしていない授業科目についての履修は認められません。**また、**一旦登録した授業科目は取り消すことができません**ので、履修する授業科目を慎重に決めてください。

シラバスの記載項目は次のとおりです。

- 1) 授業科目名、開講年次、組、一週間の授業時限数、単位数、担当教員名
- 2) 授業の到達目標及びテーマ、授業の概要、予習・復習等の内容・時間、学生に対する評価（到達目標に基づいての評価）、テキスト、参考書・参考資料等、授業内容

授業実施曜日、時限、組等は、「2019年度 授業時間割表」を参照してください。

単位修得について

- 1) 所属する専攻・専修コース別に定められている教育課程に基づき、シラバスを参考にして履修する授業科目を確定し、所定の期日までに履修登録をしなければなりません。

履修登録をした授業科目は、実施された授業回数の3分の2以上に出席し、所定の試験に合格した場合、単位修得が認められます。

したがって、**所定の試験に合格した場合であっても、授業回数の3分の2以上の出席に満たなかった場合、単位修得は認められません。**

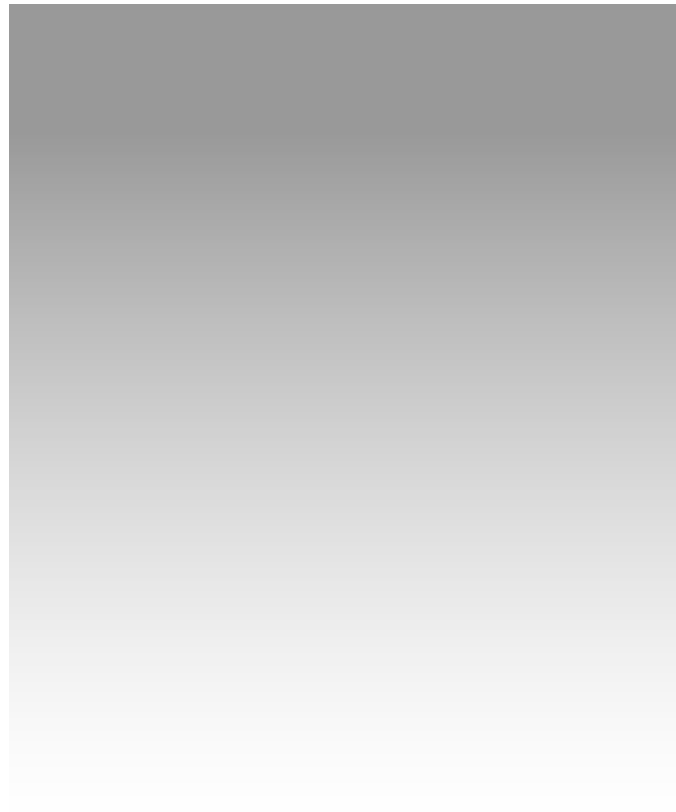
- 2) 成績評価基準

| クラス授業科目点数区分 | 実技科目点数区分 | 評価の表示方法 | 合否 |
|-------------|----------|---------|-----|
| 90～100点 | 80～100点 | S | 合格 |
| 75～89点 | 60～80点未満 | A | |
| 60～74点 | 45～60点未満 | B | |
| 50～59点 | 30～45点未満 | C | |
| 0～49点 | 0～30点未満 | D | 不合格 |

2019 年度

シラバス

大学院音楽研究科



修士課程

博士後期課程

武蔵野音楽大学

目次

修士課程

| 大学院修士課程 学事予定表 | | | 10 |
|----------------|------------------------------------|-------|----|
| 専攻研究（音楽学）Ⅰ | 稲田隆之 | 1年次 | 12 |
| 専攻研究（音楽学）Ⅱ | 薦田治子 | 2年次 | 12 |
| 専攻研究（音楽教育）Ⅰ | 加藤 徹也・森田 恭子・大場 ゆかり・ 山崎 正彦 | 1年次 | 13 |
| 専攻研究（音楽教育）Ⅱ | 加藤 徹也・秋田 賀文・森田 恭子・ 大場 ゆかり | 2年次 | 13 |
| 作品研究（有鍵）Ⅰ | 野原泰子 | 1年次 | 14 |
| 作品研究（有鍵）Ⅱ | 大澤徹訓 | 2年次 | 14 |
| 作品研究（管打弦）Ⅰ | 佐藤誠一 | 1年次 | 15 |
| 作品研究（管打弦）Ⅱ | 佐藤誠一 | 2年次 | 15 |
| 作品研究（作曲）Ⅰ | 成宮北斗 | 1年次 | 16 |
| 作品研究（作曲）Ⅱ | 成宮北斗 | 2年次 | 16 |
| 作品研究（ドイツ系）Ⅰ | 小畑朱実 | 1年次 | 17 |
| 作品研究（ドイツ系）Ⅱ | 小林晴美 | 2年次 | 17 |
| 作品研究（イタリア系）Ⅰ | 立野至美 | 1年次 | 18 |
| 作品研究（イタリア系）Ⅱ | 堀内康雄 | 2年次 | 18 |
| 総合演習（音楽学）Ⅰ | 薦田治子 | 1年次 | 19 |
| 総合演習（音楽学）Ⅱ | 薦田治子 | 2年次 | 19 |
| 総合演習（音楽教育）Ⅰ | 加藤 徹也・秋田 賀文・森田 恭子・ 大場 ゆかり・山崎 正彦 | 1年次 | 20 |
| 総合演習（音楽教育）Ⅱ | 加藤 徹也・秋田 賀文・森田 恭子・ 大場 ゆかり・山崎 正彦 | 2年次 | 20 |
| 文献学研究 | 稲田隆之 | 1年次 | 21 |
| 伴奏法研究Ⅰ | 三ツ石潤司 | 1年次 | 21 |
| 伴奏法研究Ⅱ | 三ツ石潤司 | 2年次 | 22 |
| 作品分析演習（有鍵）Ⅰ | 野崎勇喜夫 | 1年次 | 22 |
| 作品分析演習（有鍵）Ⅱ | 野崎勇喜夫 | 2年次 | 23 |
| 作品分析演習（管打弦作）Ⅰ | 立原勇 | 1年次 | 23 |
| 作品分析演習（管打弦作）Ⅱ | 立原勇 | 2年次 | 24 |
| 有鍵楽器音楽史（ピアノ）Ⅰ | 野原泰子 | 1年次 | 24 |
| 有鍵楽器音楽史（ピアノ）Ⅱ | 野原泰子 | 2年次 | 25 |
| 有鍵楽器音楽史（オルガン）Ⅱ | 石丸由佳 | 2年次 | 25 |
| 重唱研究（歌曲重唱） | 堀内康雄 | 1・2年次 | 26 |
| 重唱研究（歌劇重唱） | 岸本力 | 1・2年次 | 26 |
| 発音法研究（ドイツ語） | ヨズア・バルチュ | 1・2年次 | 27 |

| | | | |
|---------------|--------------|-------|----|
| 発音法研究（イタリア語） | ミッシヨ・フランチェスカ | 1・2年次 | 27 |
| 発音法研究（フランス語） | 塩野衛子 | 1・2年次 | 28 |
| 歌曲史 | 稲田隆之 | 1・2年次 | 28 |
| 歌劇史 | 黒田彰 | 1・2年次 | 29 |
| 作曲技法演習Ⅰ | 池田一秀 | 1年次 | 29 |
| 作曲技法演習Ⅱ | 池田一秀 | 2年次 | 30 |
| 音楽学研究西洋（講義）Ⅰ | 越懸澤麻衣 | 1年次 | 30 |
| 音楽学研究西洋（講義）Ⅱ | 越懸澤麻衣 | 2年次 | 31 |
| 音楽学研究西洋（演習）Ⅰ | 福田弥 | 1年次 | 31 |
| 音楽学研究西洋（演習）Ⅱ | 福田弥 | 2年次 | 32 |
| 音楽学研究日本（演習）Ⅰ | 薦田治子 | 1年次 | 32 |
| 音楽学研究日本（演習）Ⅱ | 薦田治子 | 2年次 | 33 |
| 音楽教育研究（講義）Ⅰ | 加藤徹也 | 1年次 | 33 |
| 音楽教育研究（講義）Ⅱ | 加藤徹也 | 2年次 | 34 |
| 音楽教育文献研究（講義）Ⅰ | 森田恭子 | 1年次 | 34 |
| 音楽教育文献研究（講義）Ⅱ | 森田恭子 | 2年次 | 35 |
| 演奏研究（西洋古楽実習）Ⅰ | 石川かおり | 1年次 | 35 |
| 演奏研究（西洋古楽実習）Ⅱ | 石川かおり | 2年次 | 36 |
| 演奏研究（雅楽実習）Ⅰ | 東儀博昭 黒川真理恵 | 1年次 | 36 |
| 演奏研究（雅楽実習）Ⅱ | 東儀博昭 黒川真理恵 | 2年次 | 37 |
| 演奏研究（箏実習）Ⅰ | 杉浦聡 | 1年次 | 37 |
| 演奏研究（箏実習）Ⅱ | 杉浦聡 | 2年次 | 38 |
| 特別講義（音楽学） | 永井玉藻 | 1年次 | 38 |
| 特別講義 | 森田恭子 | 1・2年次 | 39 |
| 指揮法 | 時任康文 | 1・2年次 | 39 |
| 音楽理論演習Ⅰ | 佐山紀彦 | 1年次 | 40 |
| 音楽理論演習Ⅱ | 佐山紀彦 | 2年次 | 40 |
| 音楽史特殊研究Ⅰ | 永井玉藻 | 1年次 | 41 |
| 音楽史特殊研究Ⅱ | 永井玉藻 | 2年次 | 41 |
| 楽書講読（英語）Ⅰ | 長岡英 | 1年次 | 42 |
| 楽書講読（英語）Ⅱ | 長岡英 | 2年次 | 42 |
| 楽書講読（英語）Ⅰ | 石川亮子 | 1年次 | 43 |
| 楽書講読（英語）Ⅱ | 石川亮子 | 2年次 | 43 |

| | | | |
|--------------|-------|-------|----|
| 楽書講読（ドイツ語）Ⅰ | 越懸澤麻衣 | 1年次 | 44 |
| 楽書講読（ドイツ語）Ⅱ | 越懸澤麻衣 | 2年次 | 44 |
| 楽書講読（イタリア語）Ⅰ | 鳥木弥生 | 1年次 | 45 |
| 楽書講読（イタリア語）Ⅱ | 鳥木弥生 | 2年次 | 45 |
| 通奏低音研究 | 石丸由佳 | 1・2年次 | 46 |

大学院音楽研究科博士後期課程

| | | | |
|-----------------|-------|--|----|
| 大学院博士後期課程 学事予定表 | | | 48 |
| 作品研究 | 野崎勇喜夫 | | 49 |
| 音楽学総合研究 | 稲田隆之 | | 49 |
| 音楽教育総合研究 | 森田恭子 | | 50 |
| 指揮法実技研究 | 北原幸男 | | 50 |
| ソルフェージュ特殊講義 | 高田幸子 | | 51 |
| 音楽理論特殊講義 | 野崎勇喜夫 | | 51 |
| 西洋音楽史特殊講義 | 福田弥 | | 52 |
| 日本・東洋音楽史特殊講義 | 薦田治子 | | 52 |
| 音楽美学特殊講義 | 野原泰子 | | 53 |
| 文献演習Ⅰ | 堺和男 | | 53 |
| 文献演習Ⅱ | 越懸澤麻衣 | | 54 |
| 文献演習Ⅲ | 菊池英美 | | 54 |

1

大学院音楽研究科
修士課程

2019年度 大学院修士課程 学事予定表

| 月日(曜日) | | 学事 | 時間・場所・他 |
|------------------|------------------------------|------------------------------|----------------------------|
| 3月 | 30日(土) | 管理課・図書館課・学務課ガイダンス | 15時00分～15時50分[ベートーヴェンホール] |
| | | 2年次 学位申請に関するガイダンス(学務課) | 16時00分～16時50分[ベートーヴェンホール] |
| 4月 | 1日(月) | 入学式 | 10時30分～ [ベートーヴェンホール] |
| | | 研究指導教員による専攻別ガイダンス | 12時30分～13時30分 |
| | | ピアノ・オルガン | [S 4 0 7] |
| | | 管楽器 | [S 3 1 0] |
| | | 打楽器 | [S 3 1 1] |
| | | 弦楽器 | [S 3 1 2] |
| | | P C A | [S 3 0 9] |
| | | 声楽 | [S 3 1 4] |
| | | 作曲 | [S 3 0 8] |
| | | 音楽学 | [S 4 0 9] |
| | | 音楽教育 | [S 4 1 0] |
| | | | 留学生オリエンテーション |
| | | JASSO予約採用・採用候補者説明会 | 15時30分～16時30分[ベートーヴェンホール] |
| | 2日(火) | 健康診断 | (学生部掲示板で確認)[ウィンドアンサンブルホール] |
| | | JASSO在学採用・新規応募説明会 | 11時30分～12時30分[ベートーヴェンホール] |
| 3日(水) | レッスンの時間割編成(ピアノ以外) | 9時30分～11時00分[学務課掲示板で確認] | |
| | レッスンの時間割編成(ピアノ) | 12時30分～14時00分[学務課掲示板で確認] | |
| | 作曲専攻ガイダンス | 15時00分～16時00分[S 3 0 8] | |
| 5日(金) | 履修届提出 | 10時00分～11時30分[ウィンドアンサンブルホール] | |
| 8日(月) | 前期授業開始日 | | |
| 27(土) 5月6日(月) | 天皇即位のため休校 | | |
| 6月 | 26日(水) | 大学院進学説明会 | |
| 7月 | 12日(金) | ウィンドアンサンブル演奏会 | 18時30分～[東京オペラシティ] |
| | 14日(日) 16日(火) | ウィンドアンサンブル演奏旅行 | 15日[小松市:こまつ芸術劇場] |
| | 15日(月・祝) | 海の日(月曜日のクラス授業・レッスン実施日) | |
| | 22日(月) | 前期授業・レッスン終了日 | |
| | 23日(火) 31日(水) | 1年次声楽 専攻研究実技前期試験期間 | (日曜日を除く) |
| 8月 | 1日(木) 9月19日(木) | 夏期休暇期間 | |
| 9月 | 13日(金) 15日(日) | 管弦楽団演奏旅行 | 14日[岡山シンフォニーホール] |
| | 20日(金) | 管弦楽団演奏会 | 19時00分～[東京芸術劇場] |
| | | 後期授業開始日 | |
| 23日(月・祝) | 秋分の日 振替休日(月曜日のクラス授業・レッスン実施日) | | |
| 10月 | 1日(火) 11日(金) | 修士論文題目提出期間 | (日曜日を除く) |
| | 上旬 | 大学院学位審査ガイダンス(1年次) | |
| | | 大学院学位審査ガイダンス(2年次) | |
| | 14日(月・祝) | 体育の日(月曜日のクラス授業・レッスン実施日) | |
| | 22日(火) | 即位礼正殿の儀のため休校 | |
| | 25日(金) | ミューズフェスティバル前日祭 | |
| | 26日(土) 27日(日) | ミューズフェスティバル本祭 | クラス授業科目・実技科目取り止め |
| 28日(月) | ミューズフェスティバル後片付け | | |
| 11月 | 4日(月・振) | 振替休日(月曜日のクラス授業・レッスン実施日) | |

注1. 予定は追加・変更される場合があるので、掲示で確認してください。

2. []内は場所を示しています。

3. 時間・場所等が空欄の学事は、掲示で確認してください。

| 月日(曜日) | | 学事 | 時間・場所・他 |
|--------|-------------------|--------------------------------------|---------------------|
| 12月 | 1日(日) | 音楽大学オーケストラフェスティバル | 15時00分～[ミューザ川崎] |
| | 4日(水) | 管弦楽団合唱団演奏会 | 19時00分～[東京芸術劇場] |
| | 12日(木) | ウィンドアンサンブル演奏会 | 18時30分～[東京芸術劇場] |
| | 12日(木) 21日(土) | 2年次 専攻研究実技試験期間 | (日曜日を除く) |
| | 21日(土) | 2年次作曲 修了作品提出日 | |
| | 21日(土) | 月曜日のクラス授業・レッスン実施日 | |
| | 22日(日) 1月5日(日) | 冬期休暇期間 | |
| 1月 | 6日(月) | クラス授業・レッスン開始日 | |
| | 20日(月) | 後期クラス授業科目・レッスン終了日 | |
| | 27日(月) 2月5日(水) | 1年次 専攻研究実技年度末試験期間 1・2年次 副専攻実技試験期間 | (日曜日を除く) |
| 2月 | 5日(水) | 修士論文提出日 | |
| | 26日(水) 3月2日(月) | 修士論文口述試験期間 | (日曜日を除く) |
| 3月 | 10日(火) | 修了者氏名発表 | |
| | 22日(日) | 学位記授与式予行 | 10時00分～[ペーターヴェンホール] |
| | 23日(月) | 学位記授与式 | 10時30分～[ペーターヴェンホール] |
| | 30日(月) | 新2年次 ガイダンス | |
| | 31日(火) | 新1年次 オリエンテーション、新2年次ガイダンス | |

注1. 予定は追加・変更される場合があるので、掲示で確認してください。

2. []内は場所を示しています。

3. 時間・場所等が空欄の学事は、掲示で確認してください。

| | | | | |
|------------|------|-----------------|-------|-------|
| 専攻研究(音楽学)Ⅰ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 1年次 | | 1時限/週 | 4単位/年 |
| | 担当教員 | いなだ 隆之 稲田 隆之 | | |

授業の到達目標及びテーマ

音楽学の修士論文作成を最終的な目標とする。その過程において、自分の研究テーマの探究だけでなく、音楽学者として必要な知識や能力を身につけることを目指す。

授業の概要

修士論文作成に向けて、当該のテーマに関する先行研究、一次資料と二次資料について詳細に検討し、文献をじっくり講読する。また、研究方法を明確にするためのさまざまな方法論を学ぶ。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

文献検索と文献講読を事前事後に1時間程度ずつ行っておくこと。またそれらのレジュメ作成や文献表作成などをしておくこと。

学生に対する成績評価の方法・基準

授業前の準備、および授業への取り組みで総合的に評価する。

テキスト

プリントを随時配布する。

参考書・参考資料等

『音楽学を学ぶ人のために』(世界思想社、2004) など

授業内容

(前期)

| | |
|----|--------------------|
| 1 | 修士論文のテーマ設定と研究計画 |
| 2 | 修士論文のテーマ設定と研究計画 |
| 3 | 先行研究、関連文献の調査 |
| 4 | 先行研究、関連文献の調査 |
| 5 | 先行研究、関連文献の調査 |
| 6 | 先行研究、関連文献の講読 |
| 7 | 先行研究、関連文献の講読 |
| 8 | 先行研究、関連文献の講読 |
| 9 | 先行研究、関連文献の講読 |
| 10 | 先行研究、関連文献から研究方法の検討 |
| 11 | 先行研究、関連文献から研究方法の検討 |
| 12 | 一次資料の検討と整理 |
| 13 | 一次資料の検討と整理 |
| 14 | 一次資料の検討と整理 |

(後期)

| | |
|----|-----------------|
| 1 | 先行研究、関連文献の補足的収集 |
| 2 | 先行研究、関連文献の補足的収集 |
| 3 | 二次資料の要約と批判 |
| 4 | 二次資料の要約と批判 |
| 5 | 二次資料の要約と批判 |
| 6 | 二次資料の要約と批判 |
| 7 | 二次資料の要約と批判 |
| 8 | 修士論文のテーマ確定と全体構成 |
| 9 | 修士論文のテーマ確定と全体構成 |
| 10 | 修士論文のテーマ確定と全体構成 |
| 11 | 研究方法の検討 |
| 12 | 研究方法の検討 |
| 13 | 研究方法の検討 |
| 14 | 執筆内容の検討 |

| | | | | |
|------------|------|-----------------|-------|-------|
| 専攻研究(音楽学)Ⅱ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 2年次 | | 1時限/週 | 4単位/年 |
| | 担当教員 | こもだ 治子 薦田 治子 | | |

授業の到達目標及びテーマ

音楽学の修士論文作成を最終的な目標とする。併せて、その過程において、研究者として必要な知識や能力を身に付けることを目標とする。

授業の概要

研究のテーマの設定、先行研究の調査、研究対象の選択、研究方法についての基礎知識の習得、プレゼンテーションの方法の習得、論理的な記述方法の訓練など、研究の基礎となる力を身に付ける。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

与えられた課題だけでなく、研究内容に関連する事柄に興味を持ち、常に情報の収集を行う。予習・復習あわせて2時間。

学生に対する成績評価の方法・基準

平常の研究への取り組み方、進め方、成果によって評価する。

テキスト

特に指定しない。

参考書・参考資料等

各自の研究内容に沿って適宜指示する。

授業内容

(前期)

| | |
|----|-------------------------|
| 1 | 修士論文のテーマの検討と研究計画の確定 (1) |
| 2 | 修士論文のテーマの検討と研究計画の確定 (2) |
| 3 | 先行研究・関連文献の再調査 |
| 4 | 先行研究・関連文献の講読 (1) |
| 5 | 先行研究・関連文献の講読 (2) |
| 6 | 先行研究・関連文献の分析と検討 |
| 7 | 調査の実施 (1) |
| 8 | 調査の実施 (2) |
| 9 | 調査結果の分析 (1) |
| 10 | 調査結果の分析 (2) |
| 11 | 調査結果の分析 (3) |
| 12 | 中間発表の準備 |
| 13 | 研究方法の検討 (1) |
| 14 | 研究方法の検討 (2) |

(後期)

| | |
|----|------------------------|
| 1 | 研究経過報告書の作成 |
| 2 | 論文構成の検討 (1) |
| 3 | 論文構成の検討 (2) |
| 4 | 論文の作成 (1) 目次 |
| 5 | 論文の作成 (2) 各章の執筆 |
| 6 | 論文の作成 (3) 各章の執筆 |
| 7 | 論文の作成 (4) 各章の執筆 |
| 8 | 論文の作成 (5) 各章の執筆 |
| 9 | 論文の作成 (6) 各章の執筆 |
| 10 | 論文の作成 (7) 各章の執筆 |
| 11 | 論文の作成 (8) 各章の執筆 |
| 12 | 論文の作成 (9) 各章の執筆 |
| 13 | 論文の作成 (10) 序論、結論、要旨 |
| 14 | 論文の作成 (11) 参考文献、注記等の確認 |

| 専攻研究（音楽教育）Ⅰ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
|-------------|---------------------|--------------------|----------------------------|--------|
| | 1年次 | | 1 時限/週 | 4 単位/年 |
| 担当教員 | かとう 加藤 てつや 徹也・森田 | もりた きょうこ おおば 恭子・大場 | ゆかり やまざき まさひこ ゆかり・山崎 正彦 | |

授業の到達目標及びテーマ

修士論文の作成に関する事柄を学修し、主体的に研究活動を進める。研究を行う際に必要となる基礎的な事柄を理解するとともに、論理的な考察に基づいて、主体的、継続的に研究を進める力を身につけることを到達とする。

授業の概要

研究テーマを設定し、関連する先行研究や関連文献を講読し、事例の検証を行う。テーマの内容に即した調査方法を検討し、実施計画を立てる。適宜研究経過を発表する。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

充実した研究活動を遂行するため、自己の課題を主体的、継続的に探究すること。そのため、毎回十分な時間をかけて予習・復習を行う必要がある。

学生に対する成績評価の方法・基準

毎回の授業に向けて取り組んだ成果（40%）、研究経過及び研究発表の内容（30%）、研究活動に取り組む意欲と姿勢（30%）により、総合的に評価する。

テキスト

特に指定しない。

参考書・参考資料等

各自の研究内容に即して適宜紹介する。

授業内容

〔前期〕

| | |
|----|--------------------|
| 1 | オリエンテーション |
| 2 | 研究テーマの検討①（問題の所在） |
| 3 | 研究テーマの検討②（研究の目的） |
| 4 | 研究テーマの検討③（研究の方法） |
| 5 | 研究テーマの検討④（テーマの具体化） |
| 6 | 先行研究・関連文献の講読① |
| 7 | 先行研究・関連文献の講読② |
| 8 | 先行研究・関連文献の講読③ |
| 9 | 先行研究・関連文献の講読④ |
| 10 | 先行研究・関連文献の講読⑤ |
| 11 | 先行研究・関連文献の講読⑥ |
| 12 | 先行研究・関連文献の講読⑦ |
| 13 | 先行研究・文献講読のまとめ |
| 14 | 夏期発表会の準備 |

〔後期〕

| | |
|----|--------------------|
| 1 | 研究テーマの再検討 |
| 2 | 論文構成の検討①（全体の構成） |
| 3 | 論文構成の検討②（各章の内容） |
| 4 | 論文構成の検討③（調査の内容と方法） |
| 5 | 先行研究・関連文献の講読⑧ |
| 6 | 先行研究・関連文献の講読⑨ |
| 7 | 先行研究・関連文献の講読⑩ |
| 8 | 先行研究・関連文献の講読⑪ |
| 9 | 先行研究・関連文献の講読⑫ |
| 10 | 先行研究・文献講読のまとめ |
| 11 | 研究調査の検討①（調査内容） |
| 12 | 研究調査の検討②（調査方法） |
| 13 | 論文構成の再検討 |
| 14 | 研究発表の準備① |
| 15 | 研究発表の準備② |

| 専攻研究（音楽教育）Ⅱ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
|-------------|---------------------|-----------------------------------|--------|--------|
| | 2年次 | | 1 時限/週 | 4 単位/年 |
| 担当教員 | かとう 加藤 てつや 徹也・秋田 | あきた しげふみ もりた きょうこ おおば 賀文・森田 恭子・大場 | ゆかり | |

授業の到達目標及びテーマ

「専攻研究Ⅰ」の学修を踏まえ、研究調査と修士論文の作成を進める。研究を行う際に必要となる事柄についての理解を深めるとともに、検証や論考に基づいて主体的・継続的に研究を進め、的確に表現する力を身につけることを到達目標とする。

授業の概要

テーマに基づいて主体的に研究活動を進める。テーマの内容に即した研究調査を実施して、データに基づく分析を行う。検証や論証に基づいて、文章表現の充実・向上を図りながら修士論文を作成する。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

充実した研究活動を遂行するため、自己の課題を主体的、継続的に深く探究すること。そのため、毎回十分な時間をかけて予習・復習を行う必要がある。

学生に対する成績評価の方法・基準

毎回の授業に向けて取り組んだ成果（40%）、研究経過の発表の内容（30%）、研究活動に取り組む意欲と姿勢（30%）により、総合的に評価する。

テキスト

特に指定しない。

参考書・参考資料等

各自の研究内容に即して適宜紹介する。

授業内容

〔前期〕

| | |
|----|----------------|
| 1 | 研究テーマと研究計画の再検討 |
| 2 | 研究調査再検討 |
| 3 | 研究調査の準備① |
| 4 | 研究調査の準備② |
| 5 | 研究調査の準備③ |
| 6 | 研究調査の実施と結果の集約① |
| 7 | 研究調査の実施と結果の集約② |
| 8 | 研究調査の実施と結果の集約③ |
| 9 | 調査結果の分析① |
| 10 | 調査結果の分析② |
| 11 | 調査結果の分析③ |
| 12 | 研究調査のまとめ |
| 13 | 論文構成の再検討 |
| 14 | 夏期発表会の準備 |

〔後期〕

| | |
|----|----------------|
| 1 | 論文作成の準備 |
| 2 | 論文の作成と記述内容の検討① |
| 3 | 論文の作成と記述内容の検討② |
| 4 | 論文の作成と記述内容の検討③ |
| 5 | 論文の作成と記述内容の検討④ |
| 6 | 論文の作成と記述内容の検討⑤ |
| 7 | 論文の作成と記述内容の検討⑥ |
| 8 | 論文の作成と記述内容の検討⑦ |
| 9 | 論文の作成と記述内容の検討⑧ |
| 10 | 論文の作成と記述内容の検討⑨ |
| 11 | 論文の作成と記述内容の検討⑩ |
| 12 | 論文の作成と記述内容の検討⑪ |
| 13 | 参考文献等の確認 |
| 14 | 記述内容の確認 |
| 15 | 全体の総括 |

| 作品研究(有鍵)Ⅰ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
|-----------|------------------|---|-------|-------|
| | 1年次 | | 1時限/週 | 2単位/年 |
| 担当教員 | のほら やすこ 野原 泰子 | | | |

授業の到達目標及びテーマ

様々な様式の楽曲を取り上げ、作品の背景、音楽的な特徴などを考察し、各作品を深く理解すると共に、楽曲を多角的に考察する方法を身に付ける。また各自が研究テーマを決め、関連する先行研究の中から1つ選び、その内容を発表することで、論文執筆に有用な知識を獲得することを目指す。

授業の概要

前期は楽曲の考察が中心となる(取り上げる曲は、受講生の関心に応じて調整する)。毎回、異なる様式の作品を取り上げ、創作の背景や楽曲の特徴などを掘り下げて考察する。後期は学生による発表が中心となる。各自の研究テーマに関わる先行研究の発表を通して、自らの研究の基盤を築く。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

前期：各自の研究テーマを決め、先行研究を調査する。
後期：先行研究を1つ選び、発表に向けて準備する。(週90分程度)

学生に対する成績評価の方法・基準

発表(1人30分程度)の内容を重視し(80%)、受講態度(20%)を加味して評価する。

テキスト

テキストは使用せず、毎回プリントを配布する。

参考書・参考資料等

各回の配布プリントで、授業内容に関連する文献を示す。

授業内容

| 〔前期〕 | |
|------|--------------------|
| 1 | オリエンテーション |
| 2 | 作品研究：バッハ |
| 3 | 作品研究：モーツァルト |
| 4 | 作品研究：ベートーヴェン |
| 5 | 作品研究：ショパン |
| 6 | 作品研究：シューマン |
| 7 | 作品研究：リスト |
| 8 | 作品研究：ブラームス |
| 9 | 作品研究：ドビュッシー |
| 10 | 作品研究：シェーンベルク |
| 11 | 作品研究：バルトーク |
| 12 | 発表内容に関する相談 |
| 13 | 発表のオリエンテーション：本の紹介 |
| 14 | 発表のオリエンテーション：論文の紹介 |

| 〔後期〕 | |
|------|----------------|
| 1 | 発表：バロック |
| 2 | 発表：古典派① |
| 3 | 発表：古典派② |
| 4 | 発表：ロマン派① |
| 5 | 発表：ロマン派② |
| 6 | 発表：ロマン派③ |
| 7 | 発表：20世紀① |
| 8 | 発表：20世紀② |
| 9 | 発表：その他(演奏法など) |
| 10 | 発表に関連する講義：バロック |
| 11 | 発表に関連する講義：古典派 |
| 12 | 発表に関連する講義：ロマン派 |
| 13 | 発表に関連する講義：20世紀 |
| 14 | 発表に関連する講義：その他 |
| 15 | 総括 |

| 作品研究(有鍵)Ⅱ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
|-----------|--------------------|---|-------|-------|
| | 2年次 | | 1時限/週 | 2単位/年 |
| 担当教員 | おおさわ あきのり 大澤 徹訓 | | | |

授業の到達目標及びテーマ

標題を伴ったピアノ小品等、ロマン派以降近現代のピアノ独奏曲の諸作、なかでもテンポの緩徐な作品を重点的に、その諸特徴を分析していく。さらに自身の音楽的素養を深めることで、ここで得られたものを他の作品演奏に応用出来るようにするのが、この時間の到達目標である。

授業の概要

上記のピアノ作品がどのように創り上げられているか、またその作品を表現するにはどのようなテクニックを用いたら良いかを解き明かしていく。また作曲家・作品ごとにディスカッションを行い、自らの演奏にフィードバックしていく。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

古典派音楽に関する諸知識をなるべく多く事前に蓄えておくこと。特に交響曲、弦楽四重奏曲などの室内楽曲をスコアを読みながら聴いておくこと。

学生に対する成績評価の方法・基準

授業時に少人数によるプレゼンテーションとそれに関する質疑応答の内容(80%)、また演奏表現(20%)を総合して評価を行う。

テキスト

授業で取り上げる作曲家の楽譜。版は特に問わない。

参考書・参考資料等

伊福部昭著 完本『管弦楽法』音楽之友社

授業内容

| 〔前期〕 | |
|------|--------------------------|
| 1 | 導入。音楽が表現出来るもの |
| 2 | 標題音楽の歴史的経緯 |
| 3 | 性格的小品について |
| 4 | ロマン派作品における和声機能と楽節・旋律構造 |
| 5 | 非和声音の基礎知識 |
| 6 | 和声機能と非和声音の関連 |
| 7 | その他の様々な作曲技法(対位法技法など)との関連 |
| 8 | J.S. バッハの平均律。緩徐な作品を中心に。 |
| 9 | 古典派ソナタの緩徐楽章、ハイドンの作品 |
| 10 | 古典派ソナタの緩徐楽章、モーツァルトの作品 |
| 11 | 古典派ソナタの緩徐楽章、ベートーヴェンの作品 |
| 12 | ベートーヴェンのバガテル、作品33と作品126 |
| 13 | ショパンのピアノ小品、前奏曲集より |
| 14 | ショパンのピアノ小品ワルツ、ノクターン等 |

| 〔後期〕 | |
|------|---------------------------|
| 1 | リストの晩年のピアノ小品 |
| 2 | ブラームスのピアノ小品、作品76、作品116より |
| 3 | ブラームスのピアノ小品、作品117、作品118より |
| 4 | ブラームスのピアノ小品、作品119より |
| 5 | マクダウエルピアノ小品 |
| 6 | ドビュッシーのピアノ小品、ベルガマスク組曲その他 |
| 7 | ドビュッシーのピアノ小品、前奏曲集第1巻より |
| 8 | ドビュッシーのピアノ小品、前奏曲集第2巻より |
| 9 | ラヴェルのピアノ小品、古風なメヌエットその他 |
| 10 | ラヴェルのピアノ小品、ソナチネその他 |
| 11 | ラヴェルのピアノ小品、クーブランの墓その他 |
| 12 | モンボウのピアノ小品 |
| 13 | デュティユーのピアノ小品 |
| 14 | 20世紀のピアノ小品 |
| 15 | 総括 |

| 作品研究（管打弦）Ⅰ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
|------------|-------------------|---|-------|-------|
| | 1年次 | | 1時限/週 | 2単位/年 |
| 担当教員 | さとう せいいち 佐藤 誠一 | | | |

授業の到達目標及びテーマ

音楽作品の分析に必要な知識は、音楽理論のみならず楽器法、演奏法、文学や美術、科学など幅広い分野に渡って必要とされることも少なくない。この授業では、様々な作品を多角的に検証・分析することにより、柔軟な発想で音楽作品に取り組み、総合的な視点を養うことを目標とする。

授業の概要

前期は和声理論の点検やPCソフトウェアの活用を例に、修士論文のテーマ設定や論理展開の演習に有効な作品を取り上げる。後期はグループによる学習、発表も適時行い、共同作業を通して1つの作品に長期的に取り組み、より深いレベルでの作品研究を行う。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

研究対象作品と関連があると思われる、同時代の資料や芸術作品にも積極的に触れ、そこで得た情報、考えを記録し、整理しておくこと。

学生に対する成績評価の方法・基準

授業内課題提出（50%）及び授業への取り組みと理解度（30%）、平常点（20%）を加えて評価する。

テキスト

必要に応じて授業内で指示、また適時プリントを配布。

参考書・参考資料等

ロバート・コーガン：ソニック・デザイン - 音と音楽の特質 - (朔北社)

授業内容

| 〔前期〕 | |
|------|----------------------------|
| 1 | オリエンテーション～分析の手法について |
| 2 | PCソフトウェアの活用について～譜例作成と音響解析 |
| 3 | 分析のための和声理論①倍音と各種音階、旋法 |
| 4 | 分析のための和声理論②ドミナントと和声機能 |
| 5 | 分析のための和声理論③反復進行と転調法 |
| 6 | シャコンヌ①形式の歴史の変遷 |
| 7 | シャコンヌ②バッハ：無伴奏バルティータ第2番の分析 |
| 8 | 《怒りの日》①グレゴリア聖歌と様々な引用作品 |
| 9 | 《怒りの日》②イザイ：無伴奏ヴァイオリンソナタ第2番 |
| 10 | ベートーヴェン：交響曲第3番①動機展開と楽曲構成 |
| 11 | ベートーヴェン：交響曲第3番②第1楽章の分析 |
| 12 | ベートーヴェン：交響曲第3番③第2～4楽章の分析 |
| 13 | ベートーヴェン：交響曲第3番④楽器法 |
| 14 | 研究発表と前期のまとめ |

| 〔後期〕 | |
|------|-----------------------------|
| 1 | ドビュッシー：《シランクス》～音組織、詩と楽曲構成 |
| 2 | ドビュッシー：《牧神の午後への前奏曲》①主題と楽曲構成 |
| 3 | ドビュッシー：《牧神の午後への前奏曲》②和音 |
| 4 | ドビュッシー：《牧神の午後への前奏曲》③楽器法 |
| 5 | ストラヴィンスキー：《春の祭典》①作品と時代背景 |
| 6 | ストラヴィンスキー：《春の祭典》②民謡の引用と主題 |
| 7 | ストラヴィンスキー：《春の祭典》③音組織と楽曲構造 |
| 8 | ストラヴィンスキー：《春の祭典》④リズム |
| 9 | ストラヴィンスキー：《春の祭典》⑤楽器法 |
| 10 | ストラヴィンスキー：《春の祭典》⑥作品の影響 |
| 11 | メシアン：《鳥のカタログ》①自然と音楽 |
| 12 | メシアン：《鳥のカタログ》②「美」について |
| 13 | 研究発表① |
| 14 | 研究発表② |
| 15 | 総括 |

| 作品研究（管打弦）Ⅱ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
|------------|-------------------|---|-------|-------|
| | 2年次 | | 1時限/週 | 2単位/年 |
| 担当教員 | さとう せいいち 佐藤 誠一 | | | |

授業の到達目標及びテーマ

音楽作品の分析に必要な知識は、音楽理論のみならず楽器法、演奏法、文学や美術、科学など幅広い分野に渡って必要とされることも少なくない。この授業では、様々な作品を多角的に検証・分析することにより、柔軟な発想で音楽作品に取り組み、総合的な視点を養うことを目標とする。

授業の概要

前期は和声理論の点検やPCソフトウェアの活用を例に、修士論文のテーマ設定や論理展開の演習に有効な作品を取り上げる。後期はグループによる学習、発表も適時行い、共同作業を通して1つの作品に長期的に取り組み、より深いレベルでの作品研究を行う。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

研究対象作品と関連があると思われる、同時代の資料や芸術作品にも積極的に触れ、そこで得た情報、考えを記録し、整理しておくこと。

学生に対する成績評価の方法・基準

授業内課題提出（50%）及び授業への取り組みと理解度（30%）、平常点（20%）を加えて評価する。

テキスト

必要に応じて授業内で指示、また適時プリントを配布。

参考書・参考資料等

ロバート・コーガン：ソニック・デザイン - 音と音楽の特質 - (朔北社)

授業内容

| 〔前期〕 | |
|------|----------------------------|
| 1 | オリエンテーション～分析の手法について |
| 2 | PCソフトウェアの活用について～譜例作成と音響解析 |
| 3 | 分析のための和声理論①倍音と各種音階、旋法 |
| 4 | 分析のための和声理論②ドミナントと和声機能 |
| 5 | 分析のための和声理論③反復進行と転調法 |
| 6 | シャコンヌ①形式の歴史の変遷 |
| 7 | シャコンヌ②バッハ：無伴奏バルティータ第2番の分析 |
| 8 | 《怒りの日》①グレゴリア聖歌と様々な引用作品 |
| 9 | 《怒りの日》②イザイ：無伴奏ヴァイオリンソナタ第2番 |
| 10 | ベートーヴェン：交響曲第3番①動機展開と楽曲構成 |
| 11 | ベートーヴェン：交響曲第3番②第1楽章の分析 |
| 12 | ベートーヴェン：交響曲第3番③第2～4楽章の分析 |
| 13 | ベートーヴェン：交響曲第3番④楽器法 |
| 14 | 研究発表と前期のまとめ |

| 〔後期〕 | |
|------|-----------------------------|
| 1 | ドビュッシー：《シランクス》～音組織、詩と楽曲構成 |
| 2 | ドビュッシー：《牧神の午後への前奏曲》①主題と楽曲構成 |
| 3 | ドビュッシー：《牧神の午後への前奏曲》②和音 |
| 4 | ドビュッシー：《牧神の午後への前奏曲》③楽器法 |
| 5 | ストラヴィンスキー：《春の祭典》①作品と時代背景 |
| 6 | ストラヴィンスキー：《春の祭典》②民謡の引用と主題 |
| 7 | ストラヴィンスキー：《春の祭典》③音組織と楽曲構造 |
| 8 | ストラヴィンスキー：《春の祭典》④リズム |
| 9 | ストラヴィンスキー：《春の祭典》⑤楽器法 |
| 10 | ストラヴィンスキー：《春の祭典》⑥作品の影響 |
| 11 | メシアン：《鳥のカタログ》①自然と音楽 |
| 12 | メシアン：《鳥のカタログ》②「美」について |
| 13 | 研究発表① |
| 14 | 研究発表② |
| 15 | 総括 |

| | | | | |
|-----------|------|----------------|-------|-------|
| 作品研究（作曲）Ⅰ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 1年次 | | 1時限/週 | 4単位/年 |
| | 担当教員 | なるみや 成宮 ぼくと 北斗 | | |

授業の到達目標及びテーマ

20世紀後半から現在までの、代表的な作曲家の作品の分析を行い、その作曲法を会得する。またポップカルチャーやサブカルチャーの音楽、数学、物理、美術、文学など、様々な分野の科学や芸術から、作曲に活用できる知識や技術、美学を学び、個々の学生が今後新しい芸術作品を生み出していく上での、1つの指標を構築することを目的とする。

授業の概要

作品分析を中心に進め、そこから学んだ作曲法をもとに小曲の作曲も行う。また、各学生が今現在関心を持つ音楽や、修士論文の研究対象について発表を行い、それについてディスカッションする。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

現在、芸術表現は急進的に変化を遂げ、多様化の一途を辿っている。このような状況においては、あらゆるものがインスピレーションの源となる。演奏会や美術館、映画館はもとより、街に溢れるデザイン、自然、その他あらゆる芸術や科学。何を選択するかは個々の裁量に委ねられるが、多くのものに触れ、自由かつ柔軟な発想を持った、魅力的な音楽作品を生み出してほしい。

学生に対する成績評価の方法・基準

授業内に課す作曲課題、作品分析、研究発表を総合的に評価する。

テキスト

教科書は用いない。
授業毎にプリントを配布する他、多くの楽譜および音楽・映像資料を取り扱う。

参考書・参考資料等

『現代音楽キーワード事典』（春秋社）デイヴィッド・コープ 著。
『20世紀の作曲 現代音楽の理論的展望』（音楽之友社）ヴァルター・ギーゼラー 著。『現代音楽の記譜』（全音楽譜出版）エルハルト・カルコシュカ 著。
『ブライアン・ファンホウにおける架空のポリフォニー 8曲の独奏曲の分析を通して』（武蔵野音楽大学博士論文）成宮北斗 著。
その他、授業時に適宜指示する。

| | | | | |
|-----------|------|----------------|-------|-------|
| 作品研究（作曲）Ⅱ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 2年次 | | 1時限/週 | 4単位/年 |
| | 担当教員 | なるみや 成宮 ぼくと 北斗 | | |

授業の到達目標及びテーマ

20世紀後半から現在までの、代表的な作曲家の作品の分析を行い、その作曲法を会得する。またポップカルチャーやサブカルチャーの音楽、数学、物理、美術、文学など、様々な分野の科学や芸術から、作曲に活用できる知識や技術、美学を学び、個々の学生が今後新しい芸術作品を生み出していく上での、1つの指標を構築することを目的とする。

授業の概要

作品分析を中心に進め、そこから学んだ作曲法をもとに小曲の作曲も行う。また、各学生が今現在関心を持つ音楽や、修士論文の研究対象について発表を行い、それについてディスカッションする。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

現在、芸術表現は急進的に変化を遂げ、多様化の一途を辿っている。このような状況においては、あらゆるものがインスピレーションの源となる。演奏会や美術館、映画館はもとより、街に溢れるデザイン、自然、その他あらゆる芸術や科学。何を選択するかは個々の裁量に委ねられるが、多くのものに触れ、自由かつ柔軟な発想を持った、魅力的な音楽作品を生み出してほしい。

学生に対する成績評価の方法・基準

授業内に課す作曲課題、作品分析、研究発表を総合的に評価する。

テキスト

教科書は用いない。
授業毎にプリントを配布する他、多くの楽譜および音楽・映像資料を取り扱う。

参考書・参考資料等

『現代音楽キーワード事典』（春秋社）デイヴィッド・コープ 著。
『20世紀の作曲 現代音楽の理論的展望』（音楽之友社）ヴァルター・ギーゼラー 著。『現代音楽の記譜』（全音楽譜出版）エルハルト・カルコシュカ 著。
『ブライアン・ファンホウにおける架空のポリフォニー 8曲の独奏曲の分析を通して』（武蔵野音楽大学博士論文）成宮北斗 著。
その他、授業時に適宜指示する。

授業内容

（前期）

| | |
|----|---------------------------|
| 1 | オリエンテーション — 授業内容とねらい |
| 2 | ポストセリエル①ブーレーズ |
| 3 | ポストセリエル②シュトックハウゼン、ノーノ |
| 4 | 音響作曲①ペリオ、クセナキス |
| 5 | 音響作曲②リゲティ、ベンデレツキ |
| 6 | 音響作曲③ラッペンマン |
| 7 | 音響作曲④シャリーノ |
| 8 | 多用式主義①ツィンマーマン |
| 9 | 多用式主義②シュニトケ、デニソフ |
| 10 | ミニマル・ミュージック①ライヒ |
| 11 | ミニマル・ミュージック②ライリー、グラス |
| 12 | ミニマル・ミュージック③アダムス、ナイマン |
| 13 | アメリカの動向 — ケージ、フェルドマン、パピット |
| 14 | イギリスの動向 — ナッセン、ベンジャミン、タネジ |

（後期）

| | |
|----|-------------------------|
| 1 | コルヴァト・アウキ①リンドベルイ |
| 2 | コルヴァト・アウキ②サーリアホ |
| 3 | 新ロマン主義①クラム、ベルト、グレッキ |
| 4 | 新ロマン主義②リーム、ポーア |
| 5 | 複雑主義①ファンホウ |
| 6 | 複雑主義②フィニシー、パレット、マーンコプフ |
| 7 | スペクトル楽派①ミュライユ、グリゼー |
| 8 | スペクトル楽派②アンダーソン、ダルバヴィー |
| 9 | 電子音楽 |
| 10 | アルゴリズム作曲 |
| 11 | ライブエレクトロニクス |
| 12 | ポップカルチャーとサブカルチャーの音楽 |
| 13 | 自然科学と音楽 — 数学、物理、化学、情報工学 |
| 14 | 他分野の芸術 — 美術、映画、建築、文学 |
| 15 | 最先端の音楽と未来の音楽 |

授業内容

（前期）

| | |
|----|---------------------------|
| 1 | オリエンテーション — 授業内容とねらい |
| 2 | ポストセリエル①ブーレーズ |
| 3 | ポストセリエル②シュトックハウゼン、ノーノ |
| 4 | 音響作曲①ペリオ、クセナキス |
| 5 | 音響作曲②リゲティ、ベンデレツキ |
| 6 | 音響作曲③ラッペンマン |
| 7 | 音響作曲④シャリーノ |
| 8 | 多用式主義①ツィンマーマン |
| 9 | 多用式主義②シュニトケ、デニソフ |
| 10 | ミニマル・ミュージック①ライヒ |
| 11 | ミニマル・ミュージック②ライリー、グラス |
| 12 | ミニマル・ミュージック③アダムス、ナイマン |
| 13 | アメリカの動向 — ケージ、フェルドマン、パピット |
| 14 | イギリスの動向 — ナッセン、ベンジャミン、タネジ |

（後期）

| | |
|----|-------------------------|
| 1 | コルヴァト・アウキ①リンドベルイ |
| 2 | コルヴァト・アウキ②サーリアホ |
| 3 | 新ロマン主義①クラム、ベルト、グレッキ |
| 4 | 新ロマン主義②リーム、ポーア |
| 5 | 複雑主義①ファンホウ |
| 6 | 複雑主義②フィニシー、パレット、マーンコプフ |
| 7 | スペクトル楽派①ミュライユ、グリゼー |
| 8 | スペクトル楽派②アンダーソン、ダルバヴィー |
| 9 | 電子音楽 |
| 10 | アルゴリズム作曲 |
| 11 | ライブエレクトロニクス |
| 12 | ポップカルチャーとサブカルチャーの音楽 |
| 13 | 自然科学と音楽 — 数学、物理、化学、情報工学 |
| 14 | 他分野の芸術 — 美術、映画、建築、文学 |
| 15 | 最先端の音楽と未来の音楽 |

| 作品研究（ドイツ系）Ⅰ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
|-------------|---------------|---|-------|-------|
| | 1年次 | | 1時限/週 | 2単位/年 |
| 担当教員 | おばた 小畑 ありみ 朱実 | | | |

授業の到達目標及びテーマ

ドイツ語の詩やオペラ台本が音楽とどのように結びついているかを研究する。また詩をなめらかに朗読することで、ベルカント唱法でドイツ作品を歌唱することを目標とする。

授業の概要

前期はR・シュトラウスのリート、後期はドイツオペラを扱う。全員の役が当てはまる「ヘンゼルとグレーテル」に取り組む。レッスン形式で原則的に毎回演奏し、受講曲の詩やオペラ台本の朗読を重視する。伴奏者はこちらで用意をする。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

前期第1回目の授業時にR・シュトラウス Op10の中から各自選曲し演奏が出来るようにしておくこと。毎回の授業で歌唱するために週3時間以上は取り組むこと。

学生に対する成績評価の方法・基準

前期、後期の授業内発表（50%）、授業の取り組み方（40%）、レポート（10%）

テキスト

「リヒャルト・シュトラウス歌曲全集1」全音楽譜出版社。

参考書・参考資料等

「リヒャルト・シュトラウス」岡田暁生著 / 音楽之友社

授業内容

（前期）

| | |
|----|---------------------------------|
| 1 | 授業内容についての説明、課題の演奏をする。 |
| 2 | ドイツの詩の形式を理解し朗読をする。 |
| 3 | 1の課題の演奏をする。 |
| 4 | 1以外の4曲の中から自由選択し朗読をする。 |
| 5 | 4の課題をどのように朗読し演奏すべきかを考える。 |
| 6 | 4の課題の音楽分析を発表し演奏をする。 |
| 7 | 自学自習課題以外の曲の中から自由選択し朗読をする。 |
| 8 | 7の課題をどのように演奏すべきかを発表をする。 |
| 9 | 7の課題の詩と音楽の結びつきについて考え、発表する。 |
| 10 | 朗読はどうあるべきかを考え、新しい課題の朗読をする。 |
| 11 | 10の課題の演奏をする。 |
| 12 | 11までに研究した曲から2～3曲選択、演奏をする。 |
| 13 | 後期課題を提示。授業内試演会のゲネプロ。 |
| 14 | 授業内試演会。その後それぞれの演奏についてのディスカッション。 |

（後期）

| | |
|----|----------------------------------|
| 1 | 各自に与えた「ヘンゼルとグレーテル」の役柄の研究発表をする。 |
| 2 | オペラ台本を朗読する。 |
| 3 | オペラの役の表現法について考え演奏をする。 |
| 4 | ドイツ語台本の韻律について考察し、音楽との関連性について考える。 |
| 5 | 演奏上のような発声の問題点があるかについて考える。 |
| 6 | 演奏での問題点を研究し、導き出せる演奏法を考え実践する。 |
| 7 | 同じパートで異なる役柄について研究発表をする。 |
| 8 | 各自の課題箇所を最後まで歌唱する。 |
| 9 | 難解な発音箇所が正確に言えるように繰り返し朗読する。 |
| 10 | 歌唱と演技を研究し自分の問題点を理解する。 |
| 11 | 全ての課題を暗譜し演奏する。 |
| 12 | 簡単な演技をつけて歌唱する。 |
| 13 | フレーズの作り方について、それぞれ発表する。 |
| 14 | 授業内試演会のゲネプロ。 |
| 15 | 授業内試演会。自分の演奏について分析後、ディスカッション。 |

| 作品研究（ドイツ系）Ⅱ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
|-------------|----------------|---|-------|-------|
| | 2年次 | | 1時限/週 | 2単位/年 |
| 担当教員 | こばやし 小林 ありみ 晴美 | | | |

授業の到達目標及びテーマ

現在声楽界ではドイツ語離れが起きドイツ歌曲を歌う人が少なくなっている。声を作る事は大事だがその上に言葉がある事を忘れてはならない。ドイツ語の美しい響きとメロディや和声、リズムの結び付きを探る事をテーマとし、社会に出て自信を持ってドイツ語歌唱が出来る演奏家及び指導者になる事を目標としたい。

授業の概要

授業は基本的にレッスン形式で行ない、前期はドイツ歌曲の基礎であるシューベルトの作品を取り上げ、ドイツ語発音の習得と詩の内容を分析しその歌唱法を探っていく。後期はウィーンのもう一つの顔であるヨハン・シュトラウスⅡ世を中心としたオペレッタを取り上げ、その歴史と最大の特徴である三拍子に拘る。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

予習は課題曲の音取りと歌詞の意味調べをする。復習としては授業内での問題点を改善する。それに必要な時間は各自の能力に寄るので授業内で指示する。

学生に対する成績評価の方法・基準

授業内容の理解度と演奏曲の解釈や歌唱力を評価する。研究発表80%、平常点20%とする。

テキスト

前期「シューベルト歌曲集Ⅰ」全音楽譜出版。後期は授業時にプリントを配布。

参考書・参考資料等

「シューベルトのリート」村田千尋著（音楽之友社）

授業内容

（前期）

| | |
|----|---|
| 1 | 授業内容についての説明、ドイツ語の発音について会話と歌唱の違いを考える |
| 2 | An die Musik 発音し詩の内容を発表する |
| 3 | An die Musik 子音のみの歌唱と母音のみの歌唱をする |
| 4 | An die Musik 古典派に基づいて歌唱する |
| 5 | シューベルトの三大連作歌曲、Die Forelle、Frühlingsglaube を考察する |
| 6 | 「Schwanengesang」より Ständchen 発音し詩の内容を発表する |
| 7 | Ständchen 子音のみの歌唱と母音のみの歌唱をする |
| 8 | Ständchen 古典派に基づいて歌唱する |
| 9 | Wiegenlied、Heidenröslein 発音し詩の内容を発表する |
| 10 | Wiegenlied、Heidenröslein 子音のみの歌唱と母音のみの歌唱をする |
| 11 | Wiegenlied、Heidenröslein 古典派に基づいて歌唱する |
| 12 | シューベルトの歌曲より自由選択曲 発音し詩の内容を発表する |
| 13 | 12の曲を古典派に基づいて歌唱する |
| 14 | 前期に学んだ曲より2曲選択して研究発表し演奏について話し合う |

（後期）

| | |
|----|---|
| 1 | オペレッタの歴史を調べ発表する |
| 2 | スツペ「Boccaccio」「Hab'ich nur deine Liebe」発音し歌唱する |
| 3 | 2の課題を歌唱しドイツ歌曲との歌唱法の違いを考える |
| 4 | ヨハン・シュトラウスⅡ「Die Fledermaus」「Wiener Blut」を調べ発表する |
| 5 | 4の作品よりワルツを選び発音し歌唱する |
| 6 | 5で選んだワルツの歌唱法を習得しワルツを踊って体感する |
| 7 | オペレッタ以外のヨハン・シュトラウスⅡの名曲「Frühlingsstimmen」他を歌唱する |
| 8 | レハール「Die lustige Witwe」Lippen schweigen 発音し歌唱する |
| 9 | 8の曲を役柄の心情を発表し歌唱する。ヨハン・シュトラウスⅡのワルツとの違いを考える |
| 10 | レハールの他の作品より各自に与えた課題曲を発音し歌唱する |
| 11 | カールマン「Die Csárdásfürstin」「Gräfin Mariza」を調べ発表する |
| 12 | カールマンの音楽の中にあるハンガリー音楽、民族音楽について考える |
| 13 | カールマンの作品より各自に与えた課題曲を発音し歌唱する |
| 14 | ウィーン歌曲 Wien Wien、nur du allein を発音し歌唱する |
| 15 | 後期に学んだ曲より2曲選択して研究発表し演奏について話し合う |

| | | | | |
|--------------|------|------------------------|-------|-------|
| 作品研究(イタリア系)Ⅰ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 1年次 | | 1時限/週 | 2単位/年 |
| | 担当教員 | たつの 立野 よしみ 至美 | | |

授業の到達目標及びテーマ

イタリア歌曲を年代別に勉強していく事により、自己表現の世界を一層広げ興味を持って欲しい。曲や詩の背景を考察した上で演奏する事や、言葉の意味と旋律の関係、伴奏の存在とその重要性を分析し、声楽的な面からも解釈しながら将来のレパートリー作りの基盤となる事を目標にして授業を進めたい。

授業の概要

オペラが中心のイタリア声楽芸術に於ける歌曲作品中にある奥深さを学び、様々な時代や様式のイタリア歌曲を研究する。各時代の作曲家の生涯、曲の背景、詩の内容、イタリア語の発音、伴奏のあり方なども考慮して意見交換をしながら授業内で研究発表、演奏をする。更なる演奏能力のレベルアップを目指す。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

指示された作曲家や作品について課題の予告をし、学生は研究発表、演奏の予習をする。復習として研究内容を整理し改善をする。各々週に1時間以上。

学生に対する成績評価の方法・基準

到達目標に基づき前期と後期にテーマを決め、授業内で発表、演奏を行い、レポートも提出。(60%) 授業内容の理解度も含めて総合的に評価する。(40%)

テキスト

各自所有の楽譜(出版社は問わない) CD、DVD、等を使用する。

参考書・参考資料等

必要な資料は授業ごとにプリントを配布する。

授業内容

(前期)

| | |
|----|----------------------------------|
| 1 | 授業内容の説明、イタリアについて(歴史、文化、風土) |
| 2 | イタリア歌曲ができるまで(グレゴリオ聖歌の誕生と歴史) |
| 3 | カッチーニ、モンテヴェルディ、チェステイの生涯 |
| 4 | A. スカルラッチェ、ガスパリーニ、ヴィヴァルディの生涯 |
| 5 | D. スカルラッチェ、ベルゴレージ、バイジェットの生涯 |
| 6 | ロッシーニ、ドニゼッティ、ペッリーニの生涯 |
| 7 | ヴェルディ、トステイ、カタラーニ、マルトゥッチの生涯 |
| 8 | カッチーニ、モンテヴェルディ、チェステイの歌曲作品歌唱 |
| 9 | A. スカルラッチェ、ガスパリーニ、ヴィヴァルディの歌曲作品歌唱 |
| 10 | D. スカルラッチェ、ベルゴレージ、バイジェットの歌曲作品歌唱 |
| 11 | ロッシーニ、ドニゼッティ、ペッリーニの歌曲作品歌唱 |
| 12 | ヴェルディ、トステイ、カタラーニ、マルトゥッチの歌曲作品歌唱 |
| 13 | 授業内容を復習、確認し授業内で演奏発表を行う(前半) |
| 14 | 授業内容を復習、確認し授業内で演奏発表を行う(後半) |

(後期)

| | |
|----|--------------------------------|
| 1 | レオンカヴァッロ、プッチーニ、マスカーニの生涯 |
| 2 | チレーア、ジョルダノ、アルファーノの生涯 |
| 3 | W. フェッラーリ、ドナウディ、レスピーギの生涯 |
| 4 | ピツェッティ、マリピエロ、カゼッラの生涯 |
| 5 | ザンドナイ、チマーラ、タッラピッコラ他の作曲家の生涯 |
| 6 | レオンカヴァッロ、プッチーニ、マスカーニの歌曲作品歌唱 |
| 7 | チレーア、ジョルダノ、アルファーノの歌曲作品歌唱 |
| 8 | W. フェッラーリ、ドナウディ、レスピーギの歌曲作品歌唱 |
| 9 | ピツェッティ、マリピエロ、カゼッラの歌曲作品歌唱 |
| 10 | ザンドナイ、チマーラ、タッラピッコラ他の歌曲作品歌唱 |
| 11 | 授業内容を復習、確認し授業内で演奏発表を行う(前半) |
| 12 | 授業内容を復習、確認し授業内で演奏発表を行う(後半) |
| 13 | 全体のまとめ(ディスカッションを交えて) 授業内試演会を行う |
| 14 | 全体のまとめ(ディスカッションを交えて) 授業内試演会を行う |

| | | | | |
|--------------|------|-------------------------|-------|-------|
| 作品研究(イタリア系)Ⅱ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 2年次 | | 1時限/週 | 2単位/年 |
| | 担当教員 | ほりうち 堀内 やすお 康雄 | | |

授業の到達目標及びテーマ

イタリアで誕生して、今日でもなお多くの人々の人気を集めているオペラという総合芸術を、さまざまな観点から追求し研究することを目的とする。作曲家達の生きた時代背景などをふまえながら、楽曲分析を行ったり、声楽的な面からも解釈しながら、いろいろな角度から授業を進めたい

授業の概要

カストラートの誕生からヴェリズモオペラに至るまでを主要なイタリアの作曲家とその作品を題材としながら、時代背景やオペラ史の上でのさまざまな意義をスコアや音源を通じて解明して行く。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

本年度より、演習時間を設ける。選定された楽曲の準備に1時間、復習に1時間を費やすこと

学生に対する成績評価の方法・基準

平常点50%、演習30%、レポート等20%

テキスト

授業中にプリント配布

参考書・参考資料等

必要に応じて適宜指示する

授業内容

(前期)

| | |
|----|--------------------------|
| 1 | 一年間の授業内容や授業の進め方について |
| 2 | ゴシック期の音楽 |
| 3 | モンテヴェルディ |
| 4 | ロッシーニの声楽曲の演習①音程に注意して |
| 5 | ロッシーニの声楽曲の演習②発音 |
| 6 | ロッシーニの声楽曲の演習③アンサンブルを注意して |
| 7 | ロッシーニ歌唱の変遷を考える |
| 8 | ペッリーニについて |
| 9 | マリア・カラスの歌唱芸術について |
| 10 | ドニゼッティの声楽曲の演習① |
| 11 | ドニゼッティの声楽曲の演習② |
| 12 | ドニゼッティの声楽曲の演習③ |
| 13 | ルチアの演奏比較 |
| 14 | 前期のまとめ |

(後期)

| | |
|----|--------------------------|
| 1 | マリオ・デル・モナコの歌唱芸術について |
| 2 | イタリア・オペラ黄金期の歌唱とは何だったのか |
| 3 | ヴェルディ歌曲の試唱① |
| 4 | ヴェルディ歌曲の試唱② |
| 5 | ヴェルディ作品の演奏変遷① |
| 6 | ヴェルディ作品の演奏変遷② |
| 7 | ゼッフィレッリ「オテロ」の映画とオペラ上演の相違 |
| 8 | 修了演奏のプログラムノート作成① |
| 9 | 修了演奏のプログラムノート発表① |
| 10 | リスト作品の演習A 第二稿 |
| 11 | リスト作品の演習B 第二稿・第一稿 |
| 12 | リスト作品の演習C 第一稿 |
| 13 | ペリオ・プツツェッティの作品について |
| 14 | ベートーヴェンのイタリア語作品集の演習 |
| 15 | ベートーヴェンのイタリア語作品集の演習 |

| | | | | |
|------------|------|------------------|-------|-------|
| 総合演習(音楽学)Ⅰ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 1年次 | | 1時限/週 | 4単位/年 |
| | 担当教員 | こもだ はるこ 薦田 治子 | | |

授業の到達目標及びテーマ

音楽学の研究に必要とされる諸問題点のよりいっそう的確な把握、口頭発表(プレゼンテーション)と討論のためのよりいっそう高度な技術の習得、学術論文の書き方や文章スタイル等についてより広範囲な学習を行う。また、音楽会のプログラム構想や曲目解説のあり方についても学ぶ。

授業の概要

各自の問題意識を出発点に、音楽学の研究に必要とされる諸問題点を、口頭発表(研究テーマ、論文紹介、書評など)と討論によって、理解し、深め、考察する。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

毎回テーマについて問題点を整理し、各自の意見をまとめること(1時間)。また、各自与えられた課題に対し資料などの準備を行うこと(2時間)。

学生に対する成績評価の方法・基準

積極的に討論に参加したか、授業の目標に沿った的確な発表が行われたかなど、平常点で評価する。

テキスト

特に指定しない。

参考書・参考資料等

授業時に必要に応じて指示する。

授業内容

(前期)

| | |
|----|---------------------|
| 1 | 年間計画、論文作成に関する書式の演習 |
| 2 | 各自の研究テーマのプレゼンテーション① |
| 3 | 各自の研究テーマのプレゼンテーション② |
| 4 | 博士後期課程学生の研究報告 |
| 5 | 担当教員の発題による① |
| 6 | 各自の研究テーマのプレゼンテーション③ |
| 7 | 博士後期課程学生の研究報告 |
| 8 | 研究討議—学生の発題による① |
| 9 | 担当教員の発題による② |
| 10 | 音楽会の企画書 |
| 11 | 音楽会のプログラミング |
| 12 | 研究討議—学生の発題による② |
| 13 | 研究論文紹介 |
| 14 | 研究討議—学生の発題による③ |

(後期)

| | |
|----|----------------------|
| 1 | 担当教員の発題による③ |
| 2 | 研究討議—学生の発題による④ |
| 3 | 博士後期課程学生の研究報告 |
| 4 | 博士後期課程学生の研究報告 |
| 5 | 担当教員の発題による④ |
| 6 | 研究論文紹介 |
| 7 | 研究討議—学生の発題による⑤ |
| 8 | プレゼンテーション演習 |
| 9 | プレゼンテーション演習 |
| 10 | プレゼンテーション演習 |
| 11 | 各自の論文に沿った問題に関する発表と討論 |
| 12 | 各自の論文に沿った問題に関する発表と討論 |
| 13 | 各自の論文に沿った問題に関する発表と討論 |
| 14 | 文章スタイル演習① |
| 15 | 文章スタイル演習② |

| | | | | |
|------------|------|------------------|-------|-------|
| 総合演習(音楽学)Ⅱ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 2年次 | | 1時限/週 | 4単位/年 |
| | 担当教員 | こもだ はるこ 薦田 治子 | | |

授業の到達目標及びテーマ

音楽学の研究に必要とされる諸問題点のよりいっそう的確な把握、口頭発表(プレゼンテーション)と討論のためのよりいっそう高度な技術の習得、学術論文の書き方や文章スタイル等についてより広範囲な学習を行う。また、音楽会のプログラム構想や曲目解説のあり方についても学ぶ。

授業の概要

各自の問題意識を出発点に、音楽学の研究に必要とされる諸問題点を、口頭発表(研究テーマ、論文紹介、書評など)と討論によって、理解し、深め、考察する。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

毎回テーマについて問題点を整理し、各自の意見をまとめること(1時間)。また、各自与えられた課題に対し資料などの準備を行うこと(2時間)。

学生に対する成績評価の方法・基準

積極的に討論に参加したか、授業の目標に沿った的確な発表が行われたかなど、平常点で評価する。

テキスト

特に指定しない。

参考書・参考資料等

授業時に必要に応じて指示する。

授業内容

(前期)

| | |
|----|---------------------|
| 1 | 年間計画、論文作成に関する書式の演習 |
| 2 | 各自の研究テーマのプレゼンテーション① |
| 3 | 各自の研究テーマのプレゼンテーション② |
| 4 | 博士後期課程学生の研究報告 |
| 5 | 担当教員の発題による① |
| 6 | 各自の研究テーマのプレゼンテーション③ |
| 7 | 博士後期課程学生の研究報告 |
| 8 | 研究討議—学生の発題による① |
| 9 | 担当教員の発題による② |
| 10 | 音楽会の企画書 |
| 11 | 音楽会のプログラミング |
| 12 | 研究討議—学生の発題による② |
| 13 | 研究論文紹介 |
| 14 | 研究討議—学生の発題による③ |

(後期)

| | |
|----|----------------------|
| 1 | 担当教員の発題による③ |
| 2 | 研究討議—学生の発題による④ |
| 3 | 博士後期課程学生の研究報告 |
| 4 | 博士後期課程学生の研究報告 |
| 5 | 担当教員の発題による④ |
| 6 | 研究論文紹介 |
| 7 | 研究討議—学生の発題による⑤ |
| 8 | プレゼンテーション演習 |
| 9 | プレゼンテーション演習 |
| 10 | プレゼンテーション演習 |
| 11 | 各自の論文に沿った問題に関する発表と討論 |
| 12 | 各自の論文に沿った問題に関する発表と討論 |
| 13 | 各自の論文に沿った問題に関する発表と討論 |
| 14 | 文章スタイル演習① |
| 15 | 文章スタイル演習② |

| 総合演習(音楽教育)Ⅰ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
|-------------|---------------------|--------------------|----------------|---------------------|
| | 1年次 | | 1時限/週 | 4単位/年 |
| 担当教員 | かとう 加藤 てつや 徹也・秋田 | あきた しげふみ もりた 賀文・森田 | きょうこ おおば 恭子・大場 | ゆかり やまざき まさひこ 山崎 正彦 |

授業の到達目標及びテーマ

教育及び音楽教育に関わる諸問題について、主体的、協働的な活動により研究する。調査、研究と討議を通じて、論理的に考察する力と自己の考えを的確に表す力を身につけることを到達目標とする。

授業の概要

適宜テーマを設定し、それに基づいて調査・研究を行い、討議を通じて考察を深める。得られた知見を以後の研究活動に生かせるような要点を整理する。加えて、専攻研究の経過報告を行う。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

充実した調査、研究と討議を進め、学修成果を向上させるために、毎回十分な時間をかけて予習・復習を行う必要がある。

学生に対する成績評価の方法・基準

テーマに基づいて取り組んだ調査・研究の成果及び専攻研究の経過報告の内容(40%)、自己の考えを的確に表す力(30%)、研究活動に取り組む意欲と姿勢(30%)により、総合的に評価する。

テキスト

特に指定しない。

参考書・参考資料等

授業時に適宜紹介する。

授業内容

〔前期〕

| | |
|----|------------------------|
| 1 | オリエンテーション(前期の活動計画について) |
| 2 | 研究テーマの検討 |
| 3 | テーマに基づく研究と討議① |
| 4 | テーマに基づく研究と討議② |
| 5 | テーマに基づく研究と討議③ |
| 6 | テーマに基づく研究と討議④ |
| 7 | 専攻研究の経過報告と討議①(1年生) |
| 8 | 専攻研究の経過報告と討議②(2年生) |
| 9 | テーマに基づく研究と討議⑤ |
| 10 | テーマに基づく研究と討議⑥ |
| 11 | テーマに基づく研究と討議⑦ |
| 12 | テーマに基づく研究と討議⑧ |
| 13 | 夏期発表会の準備 |
| 14 | 前期のまとめ |

〔後期〕

| | |
|----|---------------------|
| 1 | 後期の活動計画の検討 |
| 2 | テーマに基づく研究と討議⑨ |
| 3 | テーマに基づく研究と討議⑩ |
| 4 | テーマに基づく研究と討議⑪ |
| 5 | テーマに基づく研究と討議⑫ |
| 6 | 研究動向 大会の事前確認 |
| 7 | 研究の動向(学会、研究会の事例研究①) |
| 8 | 研究の動向(学会、研究会の事例研究②) |
| 9 | 専攻研究の経過報告と討議③(1年生) |
| 10 | 専攻研究の経過報告と討議④(2年生) |
| 11 | テーマに基づく研究と討議⑬ |
| 12 | テーマに基づく研究と討議⑭ |
| 13 | テーマに基づく研究と討議⑮ |
| 14 | テーマに基づく研究と討議⑯ |
| 15 | 全体の総括 |

| 総合演習(音楽教育)Ⅱ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
|-------------|---------------------|--------------------|----------------|---------------------|
| | 2年次 | | 1時限/週 | 4単位/年 |
| 担当教員 | かとう 加藤 てつや 徹也・秋田 | あきた しげふみ もりた 賀文・森田 | きょうこ おおば 恭子・大場 | ゆかり やまざき まさひこ 山崎 正彦 |

授業の到達目標及びテーマ

教育及び音楽教育に関わる諸問題について、主体的、協働的な活動により研究する。調査、研究と討議を通じて、論理的に考察する力と自己の考えを的確に表す力を身につけることを到達目標とする。

授業の概要

適宜テーマを設定し、それに基づいて調査・研究を行い、討議を通じて考察を深める。得られた知見を以後の研究活動に生かせるような要点を整理する。加えて、専攻研究の経過報告を行う。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

充実した調査、研究と討議を進め、学修成果を向上させるために、毎回十分な時間をかけて予習・復習を行う必要がある。

学生に対する成績評価の方法・基準

テーマに基づいて取り組んだ調査・研究の成果及び専攻研究の経過報告の内容(40%)、自己の考えを的確に表す力(30%)、研究活動に取り組む意欲と姿勢(30%)により、総合的に評価する。

テキスト

特に指定しない。

参考書・参考資料等

授業時に適宜紹介する。

授業内容

〔前期〕

| | |
|----|------------------------|
| 1 | オリエンテーション(前期の活動計画について) |
| 2 | 研究テーマの検討 |
| 3 | テーマに基づく研究と討議① |
| 4 | テーマに基づく研究と討議② |
| 5 | テーマに基づく研究と討議③ |
| 6 | テーマに基づく研究と討議④ |
| 7 | 専攻研究の経過報告と討議①(1年生) |
| 8 | 専攻研究の経過報告と討議②(2年生) |
| 9 | テーマに基づく研究と討議⑤ |
| 10 | テーマに基づく研究と討議⑥ |
| 11 | テーマに基づく研究と討議⑦ |
| 12 | テーマに基づく研究と討議⑧ |
| 13 | 夏期発表会の準備 |
| 14 | 前期のまとめ |

〔後期〕

| | |
|----|---------------------|
| 1 | 後期の活動計画の検討 |
| 2 | テーマに基づく研究と討議⑨ |
| 3 | テーマに基づく研究と討議⑩ |
| 4 | テーマに基づく研究と討議⑪ |
| 5 | テーマに基づく研究と討議⑫ |
| 6 | 研究動向 大会の事前確認 |
| 7 | 研究の動向(学会、研究会の事例研究①) |
| 8 | 研究の動向(学会、研究会の事例研究②) |
| 9 | 専攻研究の経過報告と討議③(1年生) |
| 10 | 専攻研究の経過報告と討議④(2年生) |
| 11 | テーマに基づく研究と討議⑬ |
| 12 | テーマに基づく研究と討議⑭ |
| 13 | テーマに基づく研究と討議⑮ |
| 14 | テーマに基づく研究と討議⑯ |
| 15 | 全体の総括 |

| | | | | |
|-------|------|-------------------|--------|--------|
| 文献学研究 | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 1年次 | | 1 時限/週 | 4 単位/年 |
| | 担当教員 | いなだ たかゆき 稲田 隆之 | | |

授業の到達目標及びテーマ

修士論文を執筆する者は論文作成に向けて、またヴィルトウオーゾの学生は自分の研究を深めて言語化できるようにするため、必要となる文献の検索、調査、利用法を習得する。また文章作法のテクニックや論理的な文章力を身に付け、説得力のある論文や文章を書けるようになることを目標とする。

授業の概要

論文を書く意味と論理的な手続きについて学ぶ。そのために必要な文献の探し方、調査の仕方、利用法、パソコンの利用法、ワープロソフトの利用法、論文のフォーマット、分かりやすい文章の書き方について学ぶ。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

文献に当たること、文献表の作成、文章を書くなどの課題を事前にしっかきすること(1時間程度)。またそれらの復習もすること(1時間程度)。

学生に対する成績評価の方法・基準

授業内で提出させる研究計画書、参考文献表、プログラムノート(曲目解説)、先行研究レポート、および授業への取り組みを総合的に評価する。

テキスト

久保田慶一『【改訂版】音楽の文章セミナー』(音楽之友社、2016)

参考書・参考資料等

ウィンジェル『改訂新版 音楽の文章術』(春秋社、2014)ほか

授業内容

(前期)

| | |
|----|------------------------|
| 1 | イントロダクション：論文、研究、文章について |
| 2 | 図書館の利用法①(小グループ1) |
| 3 | 図書館の利用法②(小グループ2) |
| 4 | 図書館の利用法③(小グループ3) |
| 5 | 文献検索の意味：音楽事典・辞典・辞書の利用法 |
| 6 | 論文における論理構造 |
| 7 | 論文の構成① |
| 8 | 論文の構成② |
| 9 | 参考文献表の書き方① |
| 10 | 参考文献表の書き方② |
| 11 | 注の意味と付け方① |
| 12 | 注の意味と付け方② |
| 13 | 研究計画書について① |
| 14 | 研究計画書について② |

(後期)

| | |
|----|---------------|
| 1 | 文章の書き方① |
| 2 | 文章の書き方② |
| 3 | プログラムノートについて① |
| 4 | プログラムノートについて② |
| 5 | プログラムノートについて③ |
| 6 | 文献の批判的な読み方① |
| 7 | 文献の批判的な読み方② |
| 8 | 剽窃の問題について |
| 9 | 研究計画書について③ |
| 10 | 研究計画書について④ |
| 11 | 論文の書式と作法について① |
| 12 | 論文の書式と作法について② |
| 13 | 論文の書式と作法について③ |
| 14 | まとめ |

| | | | | |
|---------|------|--------------------|--------|--------|
| 伴奏法研究 I | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 1年次 | | 1 時限/週 | 2 単位/年 |
| | 担当教員 | みつし じゅんじ 三ツ石 潤司 | | |

授業の到達目標及びテーマ

ピアノによるアンサンブル演奏の体験をしつつ、伴奏という言葉にとらわれず「音楽」演奏の総合力を高めていく。

授業の概要

授業は原則的に学生が協議し分担を決定し、各自がオーガナイズしたパートナーとのアンサンブル演奏のレッスンという形態をとる。共演する器楽・声楽から、音色や呼吸・フレーズ、アーティキュレーションなどの、ピアノという楽器の発音機構から単独では学ぶことが難しい音楽的に重要な要素を学ぶ。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

担当学生が授業で伴奏する曲について予習する(3時間以上)。復習は授業での教員からのアドバイスを再度確認しつつさらに演奏改善のための研鑽をする(1時間以上)。

学生に対する成績評価の方法・基準

演奏内容(40%)、学習意欲(30%)、レポート(30%)を総合し評価する。

テキスト

アンサンブルに用いる楽譜、それに関わる資料(各自が用意する)。

参考書・参考資料等

『ピアノ共演法 パートナーとしてのピアニスト』(音楽之友社)など。

授業内容

(前期)

| | |
|----|--------------------------------|
| 1 | ガイドダンス、演奏パートナーとの調整 |
| 2 | 演奏のための楽曲分析の基礎(音楽史的観点から) |
| 3 | 演奏のための楽曲分析の基礎(楽式論的観点から) |
| 4 | 演奏のための楽曲分析の基礎(和声的観点から) |
| 5 | 演奏のための楽曲分析の基礎(旋律論的、対位法的観点から) |
| 6 | 技術的な問題点の確認(楽式論的観点から) |
| 7 | 技術的な問題点の確認(体の使い方や呼吸法などの観点から) |
| 8 | 技術的な問題点の確認(指使いなど個別の問題点について) |
| 9 | 総合的表現における問題点の全体的な確認 |
| 10 | 総合的表現における問題点の確認(音楽史的観点から) |
| 11 | 総合的表現における問題点の確認(楽式論的観点から) |
| 12 | 総合的表現における問題点の確認(和声的観点から) |
| 13 | 総合的表現における問題点の確認(旋律論的、対位法的観点から) |
| 14 | 前回までのまとめ |

(後期)

| | |
|----|--------------------------------|
| 1 | 新しい演奏パートナーとの調整 |
| 2 | 演奏のための楽曲分析(音楽史的観点から) |
| 3 | 演奏のための楽曲分析(楽式論的観点から) |
| 4 | 演奏のための楽曲分析(和声的観点から) |
| 5 | 演奏のための楽曲分析(旋律論的、対位法的観点から) |
| 6 | 技術的な問題点の克服(楽式論的観点から) |
| 7 | 技術的な問題点の克服(体の使い方や呼吸法などの観点から) |
| 8 | 技術的な問題点の克服(指使いなど個別の問題点について) |
| 9 | 総合的表現における問題点の全体的でより精密な確認 |
| 10 | 総合的表現における問題点の克服(音楽史的観点から) |
| 11 | 総合的表現における問題点の克服(楽式論的観点から) |
| 12 | 総合的表現における問題点の克服(和声的観点から) |
| 13 | 総合的表現における問題点の克服(旋律論的、対位法的観点から) |
| 14 | 後半のまとめ |

| | | | | |
|--------|------|--------------------|-------|-------|
| 伴奏法研究Ⅱ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 2年次 | | 1時限/週 | 2単位/年 |
| | 担当教員 | みつし じゅんじ 三ツ石 潤司 | | |

授業の到達目標及びテーマ

ピアノによるアンサンブル演奏の体験をしつつ、伴奏という言葉にとらわれず「音楽」演奏の総合力を高めていく。

授業の概要

授業は原則的に学生が協議し分担を決定し、各自がオーガナイズしたパートナーとのアンサンブル演奏のレッスンという形態をとる。共演する楽器・声楽から、音色や呼吸・フレーズ、アーティキュレーションなどの、ピアノという楽器の発音機構から単独では学ぶことが難しい音楽的に重要な要素を学ぶ。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

担当学生が授業で伴奏する曲について予習する(3時間以上)。復習は授業での教員からのアドバイスを再度確認しつつさらに演奏改善のための研鑽をする(1時間以上)。

学生に対する成績評価の方法・基準

演奏内容(40%)、学習意欲(30%)、レポート(30%)を総合し評価する。

テキスト

アンサンブルに用いる楽譜、それに関わる資料(各自が用意する)。

参考書・参考資料等

『ピアノ共演法 パートナーとしてのピアニスト』(音楽之友社)など。

授業内容

〔前期〕

| | |
|----|--------------------------------|
| 1 | ガイダンス、演奏パートナーとの調整 |
| 2 | 演奏のための楽曲分析の基礎(音楽史的観点から) |
| 3 | 演奏のための楽曲分析の基礎(楽式論的観点から) |
| 4 | 演奏のための楽曲分析の基礎(和声的観点から) |
| 5 | 演奏のための楽曲分析の基礎(旋律論的、対位法的観点から) |
| 6 | 技術的な問題点の確認(楽式論的観点から) |
| 7 | 技術的な問題点の確認(体の使い方や呼吸法などの観点から) |
| 8 | 技術的な問題点の確認(指使いなど個別の問題点について) |
| 9 | 総合的表現における問題点の全体的な確認 |
| 10 | 総合的表現における問題点の確認(音楽史的観点から) |
| 11 | 総合的表現における問題点の確認(楽式論的観点から) |
| 12 | 総合的表現における問題点の確認(和声的観点から) |
| 13 | 総合的表現における問題点の確認(旋律論的、対位法的観点から) |
| 14 | 前回までのまとめ |

〔後期〕

| | |
|----|--------------------------------|
| 1 | 新しい演奏パートナーとの調整 |
| 2 | 演奏のための楽曲分析(音楽史的観点から) |
| 3 | 演奏のための楽曲分析(楽式論的観点から) |
| 4 | 演奏のための楽曲分析(和声的観点から) |
| 5 | 演奏のための楽曲分析(旋律論的、対位法的観点から) |
| 6 | 技術的な問題点の克服(楽式論的観点から) |
| 7 | 技術的な問題点の克服(体の使い方や呼吸法などの観点から) |
| 8 | 技術的な問題点の克服(指使いなど個別の問題点について) |
| 9 | 総合的表現における問題点の全体的でより精密な確認 |
| 10 | 総合的表現における問題点の克服(音楽史的観点から) |
| 11 | 総合的表現における問題点の克服(楽式論的観点から) |
| 12 | 総合的表現における問題点の克服(和声的観点から) |
| 13 | 総合的表現における問題点の克服(旋律論的、対位法的観点から) |
| 14 | 後半のまとめ |

| | | | | |
|-------------|------|-------------------|-------|-------|
| 作品分析演習(有鍵)Ⅰ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 1年次 | | 1時限/週 | 4単位/年 |
| | 担当教員 | のざき ゆきお 野崎 勇喜夫 | | |

授業の到達目標及びテーマ

①「楽譜」という記号から、いかに多くの情報を読み取ることができるか。②「楽譜」に書かれていない情報を補うため、どのような作業をするか。③それらに基づいた解釈を見つけ、生の「音楽」を表現するために何をすれば良いか。自ら問題点を整理・分類し解決に向けての道筋を探すことを目標とする。

授業の概要

年間を通しての授業内容に基づき、作曲家、形式、分析方法などを示し、それについて毎回、数名(2~3名)に発表を行ってもらい、それについて発表者以外の受講生も質問や発言をして、問題点の整理や解決を探っていく。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

発表者はもちろんだが、それ以外の受講生もあらかじめ内容について予習をして、質問や発言をできるように準備する。必要な時間については問わない。

学生に対する成績評価の方法・基準

授業内で年間3回の小テストを行う(80%)。それに発表の内容や授業への積極的な参加などの平常点(20%)を合わせて評価する。

テキスト

授業毎に資料や楽譜を配布する。

参考書・参考資料等

『一般言語学講義』ソシュール著、『物語の構造分析』バルト著など。

授業内容

〔前期〕

| | |
|----|------------------------|
| 1 | オリエンテーション |
| 2 | 西洋音楽の特質(音高、音価の記譜について) |
| 3 | 西洋音楽の特質(音階、調性) |
| 4 | 西洋音楽の特質(拍子、リズム) |
| 5 | 西洋音楽の特質(楽節構造) |
| 6 | ピアノ小品にみる形式(ショパン) |
| 7 | ピアノ小品にみる形式(シューマン) |
| 8 | 変奏曲(モーツァルト、ハイdn) |
| 9 | 変奏曲(ベートーヴェン) |
| 10 | 変奏曲(ブラームス) |
| 11 | 形式の拡大(ロンド形式) |
| 12 | 形式の拡大(ソナタ形式—ハイdn) |
| 13 | 形式の拡大(ソナタ形式—ベートーヴェン初期) |
| 14 | 形式の拡大(ソナタ形式—ベートーヴェン中期) |

〔後期〕

| | |
|----|-------------------------------|
| 1 | 組曲(ソナタ含む)における主題の循環(ベートーヴェン) |
| 2 | 組曲における主題の循環(シューマン) |
| 3 | 単一案章における主題の循環(リスト) |
| 4 | 発展的な主題の循環(フランク) |
| 5 | 和声的考察(カデンツと楽節構造) |
| 6 | 和声的考察(調のついで概念と転調法) |
| 7 | 和声的考察(変化和音と無調) |
| 8 | 和声的考察(付加音と音響構造) |
| 9 | 対位法的考察(単一主題とフーガ) |
| 10 | 対位法的考察(低音主題と和音進行) |
| 11 | 対位法的考察(ホモフォニーにおける対位法—ベートーヴェン) |
| 12 | 対位法的考察(ホモフォニーにおける対位法—ブラームス) |
| 13 | 浮遊する旋律、和音(ドビュッシー) |
| 14 | 3度堆積でない和音(ドビュッシー) |
| 15 | 旋法と形式構造(ラヴェル) |

| | | | | |
|-------------|------|------------|--------|--------|
| 作品分析演習(有鍵)Ⅱ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 2年次 | | 1 時限/週 | 4 単位/年 |
| | 担当教員 | のぎき 野崎 勇喜夫 | | |

授業の到達目標及びテーマ

①「楽譜」という記号から、いかに多くの情報を読み取ることができるか。②「楽譜」に書かれていない情報を補うため、どのような作業をするか。③それらに基づいた解釈を見つけ、生の「音楽」を表現するために何をすれば良いか。自ら問題点を整理・分類し解決に向けての道筋を探すことを目標とする。

授業の概要

年間を通しての授業内容に基づき、作曲家、形式、分析方法などを示し、それについて毎回、数名(2~3名)に発表を行ってもらう。それについて発表者以外の受講生も質問や発言をして、問題点の整理や解決を探っていく。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

発表者はもちろんだが、それ以外の受講生もあらかじめ内容について予習をして、質問や発言をできるように準備する。必要な時間については問わない。

学生に対する成績評価の方法・基準

授業内で年間3回の小テストを行う(80%)。それに発表の内容や授業への積極的な参加などの平常点(20%)を合わせて評価する。

テキスト

授業毎に資料や楽譜を配布する。

参考書・参考資料等

『一般言語学講義』ソシュール著、『物語の構造分析』バルト著など。

授業内容

| | |
|------|------------------------|
| (前期) | |
| 1 | オリエンテーション |
| 2 | 西洋音楽の特質(音高、音価の記譜について) |
| 3 | 西洋音楽の特質(音階、調性) |
| 4 | 西洋音楽の特質(拍子、リズム) |
| 5 | 西洋音楽の特質(楽節構造) |
| 6 | ピアノ小品にみる形式(ショパン) |
| 7 | ピアノ小品にみる形式(シューマン) |
| 8 | 変奏曲(モーツァルト、ハイドゥン) |
| 9 | 変奏曲(ベートーヴェン) |
| 10 | 変奏曲(ブラームス) |
| 11 | 形式の拡大(ロンド形式) |
| 12 | 形式の拡大(ソナタ形式-ハイドゥン) |
| 13 | 形式の拡大(ソナタ形式-ベートーヴェン初期) |
| 14 | 形式の拡大(ソナタ形式-ベートーヴェン中期) |

| | |
|------|------------------------------|
| (後期) | |
| 1 | 組曲(ソナタ含む)における主題の循環(ベートーヴェン) |
| 2 | 組曲における主題の循環(シューマン) |
| 3 | 単一案章における主題の循環(リスト) |
| 4 | 発展的な主題の循環(フランク) |
| 5 | 和声的考察(カデンツと楽節構造) |
| 6 | 和声的考察(調のついで概念と転調法) |
| 7 | 和声的考察(変化和音と無調) |
| 8 | 和声的考察(付加音と音響構造) |
| 9 | 対位的考察(単一主題とフーガ) |
| 10 | 対位的考察(低音主題と和音進行) |
| 11 | 対位的考察(ホモフォニーにおける対位法-ベートーヴェン) |
| 12 | 対位的考察(ホモフォニーにおける対位法-ブラームス) |
| 13 | 浮遊する旋律、和音(ドビュッシー) |
| 14 | 3度堆積でない和音(ドビュッシー) |
| 15 | 旋法と形式構造(ラヴェル) |

| | | | | |
|---------------|------|---------------|--------|--------|
| 作品分析演習(管打弦作)Ⅰ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 1年次 | | 1 時限/週 | 4 単位/年 |
| | 担当教員 | たちばな いさむ 立原 勇 | | |

授業の到達目標及びテーマ

実際の作品を、自分自身の力だけで細かく分析することが出来る知識の習得。

単にフォームの分析のみならず、作曲家自身について、また、曲の生まれる背景等も含めて、一つ一つの作品を総合的に分析する力をつけることを目標とする。

授業の概要

前半は各作品の細胞とも言える動機、楽節の理解から、各形式についてまでを復習を兼ねて学ぶ。また、後半では近代以降(ワグナー以降の音楽の変化やバルトーク、ラヴェル等の技法)、そして現代(メシアン等の語法等)を含めて学ぶ。

授業中、受講生自身が分析した曲を発表し、皆で批評しあう。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

自身の力で、一つ一つの楽曲を細かく分析してくること。

学生に対する成績評価の方法・基準

授業内での発表、および期末でのレポート提出。

テキスト

新総合音楽講座 4 楽式(浦田健次郎著)ヤマハ音楽振興会

参考書・参考資料等

プリント配布

授業内容

| | |
|------|-----------------------------|
| (前期) | |
| 1 | オリエンテーション及び「作品分析」の意味と意義について |
| 2 | 動機について |
| 3 | 楽節について |
| 4 | 基礎楽式:1) 1部・2部 |
| 5 | 基礎楽式:2) 3部形式 |
| 6 | 主題変容の方法 |
| 7 | 複合2部形式 |
| 8 | 複合3部形式 |
| 9 | 主題の応用 |
| 10 | ロンド形式:1 |
| 11 | ロンド形式:2 |
| 12 | ソナタ形式:1 |
| 13 | ソナタ形式:2 |
| 14 | ソナタ形式:3 |

| | |
|------|--------------------------------|
| (後期) | |
| 1 | 分析の発表及び批評:1 |
| 2 | 分析の発表及び批評:2 |
| 3 | 分析の発表及び批評:3 |
| 4 | 分析の発表及び批評:4 |
| 5 | 対位的作法による楽曲:1) インベンションとカノン |
| 6 | 対位的作法による楽曲:2) フーガ |
| 7 | 分析:1) ラヴェル作曲 ソナチネ 1楽章 |
| 8 | 分析:2) ラヴェル作曲 ソナチネ 2・3楽章 |
| 9 | 分析:3) フランク作曲 ヴァイオリンソナタ 1・2楽章 |
| 10 | 分析:4) フランク作曲 ヴァイオリンソナタ 3・4楽章 |
| 11 | 分析:5) バルトーク作曲 弦・打・チェレスタの為の音楽 1 |
| 12 | 分析:6) バルトーク作曲 弦・打・チェレスタの為の音楽 2 |
| 13 | 分析:7) バルトーク作曲 弦・打・チェレスタの為の音楽 3 |
| 14 | 分析:8) メシアン作曲 幼子イエスに注ぐ20のまなざし 1 |
| 15 | 分析:9) フランク作曲 幼子イエスに注ぐ20のまなざし 2 |

| | | | | |
|---------------|------|--------------|--------|--------|
| 作品分析演習（管打弦作）Ⅱ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 2年次 | | 1 時限/週 | 4 単位/年 |
| | 担当教員 | たちはら 立原 勇 | | |

授業の到達目標及びテーマ

実際の作品を、自分自身の力だけで細かく分析することが出来る知識の習得。

単にフォームの分析のみならず、作曲家自身について、また、曲の生まれる背景等も含めて、一つ一つの作品を総合的に分析する力をつけることを目標とする。

授業の概要

前半は各作品の細胞とも言える動機、楽節の理解から、各形式についてまでを復習を兼ねて学ぶ。また、後半では近代以降（ワーグナー以降の音楽の変化やバルトーク、ラヴェル等の技法）、そして現代（メシアンの語法等）を含めて学ぶ。

授業中、受講生自身が分析した曲を発表し、皆で批評しあう。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

自身の力で、一つ一つの楽曲を細かく分析してくること。

学生に対する成績評価の方法・基準

授業内での発表、および期末でのレポート提出。

テキスト

新総合音楽講座 4 楽式（浦田健次郎著）ヤマハ音楽振興会

参考書・参考資料等

プリント配布

授業内容

〔前期〕

| | |
|----|-----------------------------|
| 1 | オリエンテーション及び「作品分析」の意味と意義について |
| 2 | 動機について |
| 3 | 楽節について |
| 4 | 基礎楽式：1) 1部・2部 |
| 5 | 基礎楽式：2) 3部形式 |
| 6 | 主題変容の方法 |
| 7 | 複合2部形式 |
| 8 | 複合3部形式 |
| 9 | 主題の応用 |
| 10 | ロンド形式：1 |
| 11 | ロンド形式：2 |
| 12 | ソナタ形式：1 |
| 13 | ソナタ形式：2 |
| 14 | ソナタ形式：3 |

〔後期〕

| | |
|----|--------------------------------|
| 1 | 分析の発表及び批評：1 |
| 2 | 分析の発表及び批評：2 |
| 3 | 分析の発表及び批評：3 |
| 4 | 分析の発表及び批評：4 |
| 5 | 対位法的作法による楽曲：1) インベンションとカノン |
| 6 | 対位法的作法による楽曲：2) フーガ |
| 7 | 分析：1) ラヴェル作曲 ソナチネ 1楽章 |
| 8 | 分析：2) ラヴェル作曲 ソナチネ 2・3楽章 |
| 9 | 分析：3) フランク作曲 ヴァイオリンソナタ 1・2楽章 |
| 10 | 分析：4) フランク作曲 ヴァイオリンソナタ 3・4楽章 |
| 11 | 分析：5) バルトーク作曲 弦・打・チェレスタの為の音楽 1 |
| 12 | 分析：6) バルトーク作曲 弦・打・チェレスタの為の音楽 2 |
| 13 | 分析：7) バルトーク作曲 弦・打・チェレスタの為の音楽 3 |
| 14 | 分析：8) メシアン作曲 幼子イエスに注ぐ20のまなざし 1 |
| 15 | 分析：9) フランク作曲 幼子イエスに注ぐ20のまなざし 2 |

| | | | | |
|---------------|------|--------------------|--------|--------|
| 有鍵楽器音楽史（ピアノ）Ⅰ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 1年次 | | 1 時限/週 | 4 単位/年 |
| | 担当教員 | の はら やす こ 野原 泰子 | | |

授業の到達目標及びテーマ

有鍵楽器の音楽史を通観し、各時期の主要な様式や作曲家、その代表的な作品に関する知識を深めることを目的とする。また各自が興味あるテーマを見つけ、自ら調べて考察した内容を学年末に発表する。発表を通して自らの研究や演奏に役立つ知識を獲得し、それを共有することも目指す。

授業の概要

バロック以降の各時期の音楽様式を再確認しながら、その作曲家や作品について掘り下げて学ぶ（扱う内容は受講生の関心に応じて調整する）。学年末には受講生による発表の時間（一人30分程度）を設け、活発な意見交換の場とする。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

各自がテーマを見つけ、学期末の発表に向け、資料を調べる、分析を試みるなど、考察を進める。（週90分程度）

学生に対する成績評価の方法・基準

学期末の発表の内容を重視し（80%）、受講態度（20%）を加味して判断する。

テキスト

特定のテキストは使用せず、毎回レジュメを配布する。

参考書・参考資料等

グラウト/パリスカ『新西洋音楽史（中・下）』（音楽之友社）他。

授業内容

〔前期〕

| | |
|----|-------------------|
| 1 | バロック：概要、バロックの鍵盤楽器 |
| 2 | バロック：J.S. バッハ① |
| 3 | バロック：J.S. バッハ② |
| 4 | バロック：フランス、イタリア |
| 5 | 古典派：概要、初期古典派 |
| 6 | 古典派：ハイドン |
| 7 | 古典派：モーツァルト① |
| 8 | 古典派：モーツァルト② |
| 9 | 古典派：ベートーヴェン① |
| 10 | 古典派：ベートーヴェン② |
| 11 | ロマン派：概要 |
| 12 | ロマン派：シューベルト |
| 13 | ロマン派：リスト |
| 14 | ロマン派：シューマン |

〔後期〕

| | |
|----|--------------|
| 1 | ロマン派：ブラームス |
| 2 | ロマン派：ショパン |
| 3 | ロマン派：ロシア国民楽派 |
| 4 | 20世紀：ドビュッシ |
| 5 | 20世紀：ラヴェル |
| 6 | 20世紀：スクリャーピン |
| 7 | 20世紀：ラフマニノフ |
| 8 | 20世紀：プロコフィエフ |
| 9 | 20世紀：バルトーク |
| 10 | 20世紀：メシアン |
| 11 | 研究発表① |
| 12 | 研究発表② |
| 13 | 研究発表③ |
| 14 | 研究発表④ |
| 15 | 総括 |

| | | | | |
|------------------|------|--------------------|--------|--------|
| 有鍵楽器音楽史 (ピアノ) II | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 2年次 | | 1 時限/週 | 4 単位/年 |
| | 担当教員 | の はら やす こ 野原 泰子 | | |

授業の到達目標及びテーマ

有鍵楽器の音楽史を通観し、各時期の主要な様式や作曲家、その代表的な作品に関する知識を深めることを目的とする。また各自が興味あるテーマを見つけ、自ら調べて考察した内容を学年末に発表する。発表を通して自らの研究や演奏に役立つ知識を獲得し、それを共有することも目指す。

授業の概要

バロック以降の各時期の音楽様式を再確認しながら、その作曲家や作品について掘り下げて学ぶ(扱う内容は受講生の関心に応じて調整する)。学年末には受講生による発表の時間(一人30分程度)を設け、活発な意見交換の場とする。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

各自がテーマを見つけ、学期末の発表に向け、資料を調べる、分析を試みるなど、考察を進める。(週90分程度)

学生に対する成績評価の方法・基準

学期末の発表の内容を重視し(80%)、受講態度(20%)を加味して判断する。

テキスト

特定のテキストは使用せず、毎回レジュメを配布する。

参考書・参考資料等

グラウト/パリスカ『新西洋音楽史(中・下)』(音楽之友社)他。

授業内容

(前期)

| | |
|----|-------------------|
| 1 | バロック：概要、バロックの鍵盤楽器 |
| 2 | バロック：J.S. バッハ① |
| 3 | バロック：J.S. バッハ② |
| 4 | バロック：フランス、イタリア |
| 5 | 古典派：概要、初期古典派 |
| 6 | 古典派：ハイドン |
| 7 | 古典派：モーツァルト① |
| 8 | 古典派：モーツァルト② |
| 9 | 古典派：ベートーヴェン① |
| 10 | 古典派：ベートーヴェン② |
| 11 | ロマン派：概要 |
| 12 | ロマン派：シューベルト |
| 13 | ロマン派：リスト |
| 14 | ロマン派：シューマン |

(後期)

| | |
|----|--------------|
| 1 | ロマン派：ブラームス |
| 2 | ロマン派：ショパン |
| 3 | ロマン派：ロシア国民楽派 |
| 4 | 20世紀：ドビュッシー |
| 5 | 20世紀：ラヴェル |
| 6 | 20世紀：スクリャービン |
| 7 | 20世紀：ラフマニノフ |
| 8 | 20世紀：プロコフィエフ |
| 9 | 20世紀：バルトーク |
| 10 | 20世紀：メシアン |
| 11 | 研究発表① |
| 12 | 研究発表② |
| 13 | 研究発表③ |
| 14 | 研究発表④ |
| 15 | 総括 |

修士課程

| | | | | |
|-------------------|------|------------------|--------|--------|
| 有鍵楽器音楽史 (オルガン) II | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 2年次 | | 1 時限/週 | 4 単位/年 |
| | 担当教員 | いしまる ゆか 石丸 由佳 | | |

授業の到達目標及びテーマ

オルガン演奏のあらゆる技術と知識をもとに、オルガンの外観、音色構成の特質、地域別発展史の概観を学び、コンサートホールや教会にある様々な様式のオルガンにおいてその楽器の持つ特徴を素早く捉え、良いレジストレーションと演奏法を選択できるための理解を得ることを到達目標とする。

授業の概要

文献や世界中の実際のオルガンのディスプレイを読むことで研究を進める。また歴史的な楽器の音を鑑賞したり、その建造の歴史、様式の変遷を追うことによって理解を深める。授業内で課題を実施した場合、その都度解説を行う。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

授業で扱う資料とそれに関連した文献を読み、予習、復習に努める。1日1時間程度。

学生に対する成績評価の方法・基準

レポートにより評価する。

テキスト

特に指定しない。

参考書・参考資料等

必要があれば随時指定する。

授業内容

(前期)

| | |
|----|------------------------|
| 1 | オルガンとは(草分けの頃) |
| 2 | オルガンの発展 |
| 3 | 完成期のオルガン |
| 4 | 近代のオルガン |
| 5 | ネーデルランド |
| 6 | 北ドイツ |
| 7 | 中部ドイツ |
| 8 | 南ドイツ |
| 9 | イギリス(ルネサンス~バロック) |
| 10 | イタリア(ルネサンス~バロック) |
| 11 | スペイン(ルネサンス~バロック) |
| 12 | フランス(古典期) |
| 13 | ドイツ(ヨハン・セバスティアン・バッハ前編) |
| 14 | ドイツ(ヨハン・セバスティアン・バッハ後編) |

(後期)

| | |
|----|------------------------------|
| 1 | ドイツ(19世紀) |
| 2 | フランス(19世紀) |
| 3 | フランス(20世紀) |
| 4 | アメリカ |
| 5 | その他のヨーロッパ |
| 6 | 日本の教会 |
| 7 | 日本のコンサートホール |
| 8 | パイプの構造と種類について |
| 9 | ディスプレイの理解 |
| 10 | レジストレーションの理解 |
| 11 | コンサートオルガンでのレジストレーション実践(バロック) |
| 12 | コンサートオルガンでのレジストレーション実践(ロマン派) |
| 13 | 20世紀のオルガン文化 |
| 14 | オルガニストの系譜 |
| 15 | まとめ |

| 重唱研究（歌曲重唱） | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
|------------|-------------------|---|--------|--------|
| | 1・2年次 | | 1 時限/週 | 4 単位/年 |
| 担当教員 | ほりうち やすお 堀内 康雄 | | | |

授業の到達目標及びテーマ

独唱にはない重唱の魅力を多面的に追求し、演習することを目的とする。あわせて各自の声楽上のテクニックや音楽性の向上を目指す。歌曲ならではの様式感、繊細さ詩へのアプローチを通じてアンサンブルの素晴らしさを体感してほしい。重唱に限らず歌曲全体への造詣を深める事が目標である。

授業の概要

重唱曲、宗教曲を多数取り上げ二重唱から多重唱に渡って演習する。受講生の自主性を重視し、選曲から音楽づくりまで、相互のコミュニケーションを基に進めていく。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

諸読みだけでなく、全体の講習を理解し表現につなげる。(予習1時間)。発声面音楽面のバランスを考えて復唱する。(復習1時間)。

学生に対する成績評価の方法・基準

研究意欲や歌唱の完成度等から総合的に判断し、評価する。平常点45%、演習55%とする。

テキスト

授業時配布

参考書・参考資料等

授業時に適宜指導する。

授業内容

〔前期〕

| | |
|----|----------------------------|
| 1 | 授業内容、計画について説明 |
| 2 | 任意の曲を歌ってもらい、重唱曲を選定する |
| 3 | 代表的な重唱曲を試唱し、アンサンブルを確認する |
| 4 | 受講生自身の選曲により、重唱曲への知識を広げる |
| 5 | 重唱におけるアンサンブルの基礎を学ぶ ~技術面から~ |
| 6 | 重唱におけるアンサンブルの基礎を学ぶ ~音楽面から~ |
| 7 | アンサンブルの精度を高めるテクニックの習得をはかる |
| 8 | 演習曲の様式について発表する |
| 9 | 演習曲の内容について発表する |
| 10 | 《第九》のソロパートの演習に取り組む |
| 11 | それぞれの演習曲を音楽的に掘り下げる |
| 12 | 全演習曲に対してアンサンブルの充実をはかる |
| 13 | 前期の発表① |
| 14 | 前期の発表② |

〔後期〕

| | |
|----|----------------------------|
| 1 | 後期内容についての説明 |
| 2 | 重唱課題曲の選定 |
| 3 | 様々な重唱課題曲の演習 |
| 4 | 後期発表の曲を決めていく（前期発表していない曲も可） |
| 5 | 後期発表の曲を音楽的に掘り下げる |
| 6 | 後期発表の曲を内容・詩の側面から深く掘り下げる |
| 7 | 声質やプログラムのバランスを考慮し共演者を決める |
| 8 | 共演者同士で曲の解釈等の音楽的方向を模索する |
| 9 | 後期発表の曲目についてレポートを提出する |
| 10 | 各々の演奏に対してディスカッションをする |
| 11 | 暗譜を含め全曲目を仕上げている |
| 12 | プログラムの最終確認 |
| 13 | 後期発表演習① |
| 14 | 後期発表演習② |
| 15 | まとめディスカッション |

| 重唱研究（歌劇重唱） | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
|------------|------------------|---|--------|--------|
| | 1・2年次 | | 1 時限/週 | 4 単位/年 |
| 担当教員 | きしもと ちから 岸本 力 | | | |

授業の到達目標及びテーマ

オペラを演奏するのに不可欠な重唱演奏を通して、オペラのドラマを理解し、歌と演技の融合を研究する。特に演技の基礎的な方法、歌唱による表現方法、最終研究発表を通して、実演することにより、オペラの重唱の醍醐味と魅力を体験させる。

授業の概要

歌劇重唱の魅力について説明する。毎回、自由に感情表現方法をトレーニングする。

モーツァルトの重唱曲を教材にし、重唱の大事さ、基本的な演奏方法を説明し、オペラの楽しさを示す。研究発表会の曲を、自由に選曲させ、レポートを提出させる。歌劇重唱の研究発表を通して、外部でのオペラ上演に繋がる様に研究させる。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

オペラ・ミュージカル・能・歌舞伎・バレエ・お芝居などを鑑賞し「生」の芸術に接し、茶道・華道にも興味を示してほしい。それには最大限の時間が必要。

学生に対する成績評価の方法・基準

評価にあたっては、到達目標に基づき、重唱での歌唱力、技術を踏まえた演技力、重唱に必要な協調性等、レポートの内容も評価の対象とする。

テキスト

授業時配布

参考書・参考資料等

授業中に指示する。

授業内容

〔前期〕

| | |
|----|---|
| 1 | 受講生の声種を聴き、授業の進め方について、方針を伝える。 |
| 2 | 受講生に基本的な重唱曲（モーツァルト作品）を指示する。 |
| 3 | モーツァルトの重唱曲を演奏させる。 |
| 4 | モーツァルトの重唱曲を演奏させる。 |
| 5 | 受講生に、それぞれ自由に演技させる。 |
| 6 | 各自の演技について、お互いにディスカッションさせる。 |
| 7 | 基本的な演技を説明し、再度演技させる。 |
| 8 | 基本的な演技を説明し、再度演技させる。 |
| 9 | 研究発表について、各自に選曲させる。 |
| 10 | 研究発表の曲を試演する。 |
| 11 | 研究発表の曲を試演する。 |
| 12 | 研究発表の曲目を決め、それぞれの曲目について、音楽的に深く追求する。(研究発表曲) |
| 13 | 研究発表の曲目を決め、それぞれの曲目について、音楽的に深く追求する。(研究発表曲) |
| 14 | 各自が、自由に演技の基本ラインを述べさせる。(研究発表曲) |

〔後期〕

| | |
|----|--|
| 1 | 研究発表の曲目についてのレポートを提出させる。 |
| 2 | 研究発表曲の歌唱、音楽的内容、演技について、再度深く掘り下げる。 |
| 3 | 研究発表曲の歌唱、音楽的内容、演技について、再度深く掘り下げる。 |
| 4 | 研究発表曲の歌唱、音楽的内容、演技について、再度深く掘り下げる。 |
| 5 | 研究発表曲について、歌唱、演技について各自に工夫させる。 |
| 6 | 研究発表曲について、歌唱、演技について各自に工夫させる。 |
| 7 | 暗譜の確認をし、各自がそれぞれの考えで演技させ、歌唱と演技について基本的な間違いを訂正する(研究発表曲) |
| 8 | 暗譜の確認をし、各自がそれぞれの考えで演技させ、歌唱と演技について基本的な間違いを訂正する(研究発表曲) |
| 9 | 暗譜の確認をし、各自がそれぞれの考えで演技させ、歌唱と演技について基本的な間違いを訂正する(研究発表曲) |
| 10 | 全曲を通し、全体の流れを理解させる(研究発表曲) |
| 11 | 全曲を通し、全体の流れを理解させる(研究発表曲) |
| 12 | 全曲を通し、全体の流れを理解させる(研究発表曲) |
| 13 | 通し稽古 |
| 14 | ゲネプロ |
| 15 | 研究発表 |

| 発音法研究（ドイツ語） | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
|---------------|-------|---|--------|--------|
| | 1・2年次 | | 1 時限/週 | 2 単位/年 |
| 担当教員 ヨズア・バルチュ | | | | |

授業の到達目標及びテーマ

ドイツ語圏への留学やドイツ語圏でのオーディション、コンクールに対応できる、音楽に特化した専門的なドイツ語および声楽技能の習得をめざす。それと同時に、舞台上で活躍するために必要とされる劇場や歴史（音楽史）的背景についての知識や教養を身につける。

授業の概要

授業前半では指揮者や演出家、舞台スタッフとドイツ語で意思疎通ができるようになることをめざし、音楽分野の専門語彙を実践的に行う。授業後半では受講者がそれぞれレッスンで練習しているドイツ語およびドイツ語圏における教会ラテン語の声楽作品を扱い、理解を深める。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

留学に必要な情報をインターネットでチェックすること。90分～120分。

学生に対する成績評価の方法・基準

口頭試験 50%・授業参加 35%・出席 15%

テキスト

プリント教材・各受講生の持参する楽譜のコピー。

参考書・参考資料等

独和辞典

授業内容

（前期）

| | |
|----|--------------------------|
| 1 | オリエンテーション |
| 2 | プリントおよび各受講生の持参する声楽作品を扱う。 |
| 3 | プリントおよび各受講生の持参する声楽作品を扱う。 |
| 4 | プリントおよび各受講生の持参する声楽作品を扱う。 |
| 5 | プリントおよび各受講生の持参する声楽作品を扱う。 |
| 6 | プリントおよび各受講生の持参する声楽作品を扱う。 |
| 7 | プリントおよび各受講生の持参する声楽作品を扱う。 |
| 8 | プリントおよび各受講生の持参する声楽作品を扱う。 |
| 9 | プリントおよび各受講生の持参する声楽作品を扱う。 |
| 10 | プリントおよび各受講生の持参する声楽作品を扱う。 |
| 11 | プリントおよび各受講生の持参する声楽作品を扱う。 |
| 12 | プリントおよび各受講生の持参する声楽作品を扱う。 |
| 13 | プリントおよび各受講生の持参する声楽作品を扱う。 |
| 14 | まとめと評価 |

（後期）

| | |
|----|--------------------------|
| 1 | プリントおよび各受講生の持参する声楽作品を扱う。 |
| 2 | プリントおよび各受講生の持参する声楽作品を扱う。 |
| 3 | プリントおよび各受講生の持参する声楽作品を扱う。 |
| 4 | プリントおよび各受講生の持参する声楽作品を扱う。 |
| 5 | プリントおよび各受講生の持参する声楽作品を扱う。 |
| 6 | プリントおよび各受講生の持参する声楽作品を扱う。 |
| 7 | プリントおよび各受講生の持参する声楽作品を扱う。 |
| 8 | プリントおよび各受講生の持参する声楽作品を扱う。 |
| 9 | プリントおよび各受講生の持参する声楽作品を扱う。 |
| 10 | プリントおよび各受講生の持参する声楽作品を扱う。 |
| 11 | プリントおよび各受講生の持参する声楽作品を扱う。 |
| 12 | プリントおよび各受講生の持参する声楽作品を扱う。 |
| 13 | プリントおよび各受講生の持参する声楽作品を扱う。 |
| 14 | プリントおよび各受講生の持参する声楽作品を扱う。 |
| 15 | まとめと評価 |

修士課程

| 発音法研究（イタリア語） | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
|-------------------|-------|---|--------|--------|
| | 1・2年次 | | 1 時限/週 | 2 単位/年 |
| 担当教員 ミッシヨ・フランチェスカ | | | | |

授業の到達目標及びテーマ

このクラスではイタリア語の発音をしっかりと学ぶ。有名なオペラのアリアや学習者が希望するアリアを正しく発音できるようにすることを目標とする。

授業の概要

テキストをよく音読し、意味を理解した上で授業にのぞむこと。また、授業で取り上げられたオペラのアリアは自宅にて繰り返し聴くように心がけ、正しく発音できるよう練習することが求められる。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

毎回の授業で行った内容を、各自必要な時間をかけて、復習するように。予習が必要な場合は、授業内に指示をする。

学生に対する成績評価の方法・基準

毎授業時の質問に対する答え方 50%、試験 40%、宿題 10%

テキスト

場面で学ぶイタリア語発音マスター 三修社 ミッシヨ・フランチェスカ

参考書・参考資料等

全ての配布したプリントを毎授業に持参。その他必要な場合は授業中に指示する

授業内容

（前期）

| | |
|----|--------------------------|
| 1 | イントロダクション。IPA とは |
| 2 | 音節の分け方とアクセント |
| 3 | 音が出る仕組み。子音及び母音の生成と分類。 |
| 4 | 中舌低段母音 |
| 5 | 前舌高段母音 |
| 6 | 後舌高段母音 |
| 7 | 前舌中高段母音、前舌中低段母音 |
| 8 | 前舌低段母音 |
| 9 | 後舌中高段母音、後舌低段母音 |
| 10 | 後舌低段母音 |
| 11 | ドン・ジョバンニのアリアによる音声記号を書く練習 |
| 12 | ドン・ジョバンニのアリアによる音声記号を読む練習 |
| 13 | セビリアの理髪師のアリアによる音声記号を書く練習 |
| 14 | これまでの復習とまとめ |

（後期）

| | |
|----|---------------------------|
| 1 | 子音・両唇音 |
| 2 | 子音・歯音 |
| 3 | 子音・後部歯茎硬口蓋唇音 |
| 4 | 子音・硬口蓋音 |
| 5 | 子音・唇歯音 |
| 6 | 子音・歯茎音 |
| 7 | 子音・軟口蓋音 |
| 8 | アイーダのアリアによる音声記号を読み書きの練習 |
| 9 | リゴレットのアリアによる音声記号を読み書きの練習 |
| 10 | ラ・ボエームのアリアによる音声記号を読み書きの練習 |
| 11 | 蝶々婦人のアリアによる音声記号を読み書きの練習 |
| 12 | 生徒自身が選んだアリアによる音声記号を読む練習 |
| 13 | 生徒自身が選んだアリアによる音声記号を書く練習 |
| 14 | 後期の復習 |
| 15 | 全授業の総復習とまとめ |

| | | | | |
|--------------|-------|------------------|--------|--------|
| 発音法研究（フランス語） | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 1・2年次 | | 1 時限/週 | 2 単位/年 |
| | 担当教員 | しほの えいこ 塩野 衛子 | | |

授業の到達目標及びテーマ

フランス語の音読に必要な基礎文法習得と発音の基礎練習。フランス語の読み方の規則をしっかりと学ぶ。各受講生が、自分に合うフランス語歌詞レパートリー（歌曲やオペラのアリアなど）を模索し、それを正確に歌えるようにするのを目的とする。

授業の概要

毎回、授業の前半3分の1は、最低限必要な文法習得に当てる。その後で、フランス語のテキストの音読練習を行う。聴講は歓迎するが、初日に概要を説明するので、それで判断し必ず出席すること。アクティブ・ラーニング授業。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

毎回の授業の予習、復習、宿題に最低週1時間程度

学生に対する成績評価の方法・基準

授業への参加意欲や態度（50%）、授業内発表試験（50%）

テキスト

プリントその他

参考書・参考資料等

その都度紹介

授業内容

（前期）

| | |
|----|--------------------------|
| 1 | オリエンテーション、APIとは？ |
| 2 | 前舌母音 |
| 3 | 後舌母音 |
| 4 | 複合母音 |
| 5 | 鼻母音 |
| 6 | 半母音 |
| 7 | 閉鎖子音（有声音） |
| 8 | 閉鎖子音（無声音） |
| 9 | 狭容子音（有声音） |
| 10 | 狭容子音（無声音） |
| 11 | 鼻子音 |
| 12 | 流音 |
| 13 | 単語からフレーズへ（1）リズムグループなど |
| 14 | 単語からフレーズへ（2）リエゾンなど、前期まとめ |

（後期）

| | |
|----|-------------------------------------|
| 1 | 前期の復習 |
| 2 | 受講生の発表（1） フレーズを読む練習、e muet |
| 3 | 受講生の発表（2） テキストを読む練習（散文）、歌唱時の e muet |
| 4 | 受講生の発表（3） テキストを読む練習（散文）、長母音 |
| 5 | 受講生の発表（4） 韻文の音読練習 |
| 6 | 受講生の発表（5） 韻文の仕組みについて |
| 7 | 受講生の発表に対する教師のフィードバック |
| 8 | 歌曲、デュバルクより |
| 9 | 歌曲、フォーレ歌曲（第1集）より |
| 10 | 歌曲、フォーレ歌曲（第2集）より |
| 11 | オペラ、ソプラノのアリア |
| 12 | オペラ、メゾソプラノ、もしくはアルトのアリア |
| 13 | オペラ、テノールのアリア |
| 14 | オペラ、バリトンのアリア |
| 15 | 復習、まとめ |

| | | | | |
|-----|-------|-------------------|--------|--------|
| 歌曲史 | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 1・2年次 | | 1 時限/週 | 2 単位/年 |
| | 担当教員 | いなだ たかゆき 稲田 隆之 | | |

授業の到達目標及びテーマ

「鍵盤楽器伴奏による独唱声楽曲」となった歌曲の歴史を、ドイツ・リートとフランス語歌曲を中心に、詩の分析と楽曲分析の総合によって理解する。また、受講生が実際に詩と音楽の関係を分析できるようにすることを到達目標とする。

授業の概要

18世紀以降の代表的な作曲家の代表的な作品を取り上げ、具体的に詩と音楽の関係を分析しながら、歌曲の歴史を学ぶ。授業は教員からの一方通行の講義ではなく、受講生とともに歌曲を分析し、ディスカッションを交えながら行う。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

取り上げる作曲家と作品には限りがあるため、できるだけ多くの作品を事前・事後それぞれ1時間程度聴き、詩も読んでおくこと。

学生に対する成績評価の方法・基準

授業内の発表（40%）、ディスカッションへの参加（40%）、レポート（20%）を総合して評価する。

テキスト

プリントおよび楽譜を随時配布する。

参考書・参考資料等

ヴァルター・デュル『声楽曲の作曲原理』村田千尋訳、音楽之友社など

授業内容

（前期）

| | |
|----|-----------------|
| 1 | イントロダクション：歌曲史前史 |
| 2 | ベルリン・リート楽派 |
| 3 | ハイドンとモーツァルト |
| 4 | ベートーヴェン |
| 5 | シューベルト①初期 |
| 6 | シューベルト②中期 |
| 7 | シューベルト③晩年 |
| 8 | メンデルスゾーン |
| 9 | シューマン①歌曲の年（前半） |
| 10 | シューマン②歌曲の年（後半） |
| 11 | シューマン③後期 |
| 12 | リスト |
| 13 | ヴァーグナー |
| 14 | ヴァーグナーのオペラからの影響 |

（後期）

| | |
|----|-------------------------|
| 1 | ブラームス |
| 2 | ヴォルフ①メーリケ詩集 |
| 3 | ヴォルフ②アイヒェンドルフ詩集とゲーテ詩集 |
| 4 | ヴォルフ③後期 |
| 5 | マーラー①歌曲集 |
| 6 | マーラー②交響曲と歌曲 |
| 7 | フランス語歌曲の位置付け：ベルリオーズ |
| 8 | フランスのメロディー：ピゼー、グノー、マスネら |
| 9 | フォーレ |
| 10 | ドビュッシー |
| 11 | ラヴェル |
| 12 | R. シュトラウス① |
| 13 | R. シュトラウス② |
| 14 | 新ウィーン楽派 |

| 歌劇史 | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
|-----|-------|-----------------|--------|--------|
| | 1・2年次 | | 1 時限/週 | 2 単位/年 |
| | 担当教員 | くろだ あきら 黒田 彰 | | |

授業の到達目標及びテーマ

受講生の研究レベル向上を目指し、自分の興味あるテーマについて研究、発表することにより、口述試験に答えられる力、プレゼンテーション力をつけることを到達目標とする（16年間続くハーバード大学音楽学部式アクティブ・ラーニング）。

授業の概要

テーマは、受講生の選択によるため、毎年度異なった授業内容となることが本講座の特色である。また、論文テーマがなかなか決められない院生のために、歌劇史的側面から、助言（多角的視点、視野の拡張）をする。院1年次生には、この1年ですべきことを助言する。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

多くのオペラ作品に触れること（公演、Blu-ray等）。図書館（大学図書館、国会図書館等）を利用して学習。予習復習まず30分ずつして2時間以上を目指す。

学生に対する成績評価の方法・基準

前期試験（25%）、プレゼンテーション（25%）、後期試験（25%）、授業時における積極的勉強態度（25%）。

テキスト

特に指示しない。高校世界史参考書等、適宜基本書を指示。

参考書・参考資料等

特に指示しない。歌劇史研究の入門必携書、必携用具を随時紹介

授業内容

| 〔前期〕 | |
|------|--------------------------------|
| 1 | 受講生一人一人に、授業で興味ある研究したい事を述べてもらう |
| 2 | 歌劇史の勉強の仕方（初歩から高度なレベルまで）問題の発見法 |
| 3 | イタリア歌劇史概観（レオンカヴァッロ没後100年） |
| 4 | ドイツ歌劇史概観（ウィーン国立歌劇場・日奥友好150年） |
| 5 | フランス歌劇史概観（オッフェンバック生誕200年） |
| 6 | 各自が選択したテーマでのプレゼンテーション1その後助言 |
| 7 | プレゼンテーション2（自分の論文研究への方法を見出す） |
| 8 | プレゼンテーション3（歌劇研究レベルの向上が到達目標） |
| 9 | プレゼンテーション4（世界の歌劇史に関する情報を紹介） |
| 10 | プレゼンテーション5（世界の新聞＜電子版＞を用いて） |
| 11 | プレゼンテーション6（毎回有名歌劇初演日の紹介） |
| 12 | プレゼンテーション7（受講者各1 question と応答） |
| 13 | プレゼンテーション8（ハーバード大学式質問法を体験） |
| 14 | 前期試験（テーマを予告、1時間で用紙1枚）ディスカッション |

| 〔後期〕 | |
|------|---------------------------------|
| 1 | 後期の授業についてミーティング（深く高度な内容を理解） |
| 2 | プレゼンテーション1（2 questions 連続質問に解答） |
| 3 | プレゼンテーション2（問題を見つけ解決の糸口を探る） |
| 4 | プレゼンテーション3（他の受講生の口頭発表を聞く利点） |
| 5 | プレゼンテーション4（他の受講生の質問、答えを聞く利点） |
| 6 | プレゼンテーション5（自分一人では得られない視点、知識） |
| 7 | プレゼンテーション6（自分の文章の弱点把握と改善策） |
| 8 | プレゼンテーション7（誰にでもできる研究の掘り下げ方） |
| 9 | プレゼンテーション8（声楽コース院生に適したまとめ方） |
| 10 | プレゼンテーション予備（受講生の人数により調整） |
| 11 | 「蝶々夫人」受講生による資料収集発表（各自の視点で） |
| 12 | 「蝶々夫人」受講生による発表（蝶々夫人の気持ちを深く理解） |
| 13 | 「蝶々夫人」受講生による資料収集（法的視点）（貴重資料） |
| 14 | 後期試験（テーマ冬休み前に事前予告1時間で用紙1枚）解説 |
| 15 | 後期及び一年のまとめ |

| 作曲技法演習 I | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
|----------|------|-------------------|--------|--------|
| | 1年次 | | 1 時限/週 | 2 単位/年 |
| | 担当教員 | いけだ かずひで 池田 一秀 | | |

授業の到達目標及びテーマ

19世紀末から20世紀初頭の音楽作品には、今日の音楽を予見する様々な創意工夫がみられる。これらの作品を研究することによって、重要なキーワードとアイデアを手にすることがテーマである。作品を4声体和声に変換し、その骨格をもとに別の作品に再構築し、自分の言葉にしていくことが到達目標になる。

授業の概要

西洋近代音楽の和声分析が中心の授業であるが、そこから骨格となる4声体和声抽出することによって、作曲家固有の響きを自分の言葉として吸収する。機能と声の視点では分析不能な構造も、この作業によって理解し、多様な再構築により自分の作品に取り入れることができる。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

先行研究を調べて、課題をあらかじめ分析しておく（予習）。抽出した和声から再構築する作業を、時間をかけて練習する（復習）。

学生に対する成績評価の方法・基準

授業時に行う課題の分析や、授業に参加する積極性（20%）と、年度末に提出するレポート（80%）で評価する。

テキスト

授業時に配布するプリントがテキストとなる。

参考書・参考資料等

必要な参考文献は、授業時に指示する。

授業内容

| 〔前期〕 | |
|------|------------------------------|
| 1 | 4声体和声の抽出の練習（ブルグミュラー Op100-6） |
| 2 | 4声体和声の抽出の練習（ブルグミュラー Op100-8） |
| 3 | 4声体和声の抽出の練習（ギロック：抒情小曲集 11） |
| 4 | 4声体和声の抽出の練習（ギロック：抒情小曲集 24） |
| 5 | 遠隔調転調の分析練習①（異名同音転調を含めない） |
| 6 | 遠隔調転調の分析練習②（異名同音転調を含める） |
| 7 | 遠隔調転調を含む作品の分析（ショパン：マズルカ #8） |
| 8 | 遠隔調転調を含む作品の分析（ショパン：マズルカ #15） |
| 9 | 遠隔調転調を含む作品の分析（ショパン：マズルカ #36） |
| 10 | フォーレ：「シリエンヌ」の分析 |
| 11 | ドリア終止の分析練習（半終止） |
| 12 | ドリア終止の分析練習（変終止） |
| 13 | フォーレ：「月の光」の分析 |
| 14 | フォーレ：「夢のあとに」の分析 |

| 〔後期〕 | |
|------|------------------------------|
| 1 | フランク：「前奏曲、コラールとフーガ」の分析（前奏曲） |
| 2 | フランク：「前奏曲、コラールとフーガ」の分析（コラール） |
| 3 | フランク：「前奏曲、コラールとフーガ」の分析（フーガ） |
| 4 | ドビュッシー：「前奏曲集 1-1」の分析（第1部） |
| 5 | ドビュッシー：「前奏曲集 1-1」の分析（第2部） |
| 6 | ドビュッシー：「前奏曲集 1-1」の分析（第3部） |
| 7 | ドビュッシー：「前奏曲集 1-7」の分析（第1部） |
| 8 | ドビュッシー：「前奏曲集 1-7」の分析（第2部） |
| 9 | ドビュッシー：「前奏曲集 1-7」の分析（第3部） |
| 10 | ラヴェル：「水の戯れ」の分析（提示部の前半） |
| 11 | ラヴェル：「水の戯れ」の分析（提示部の後半） |
| 12 | ラヴェル：「水の戯れ」の分析（展開部の前半） |
| 13 | ラヴェル：「水の戯れ」の分析（展開部の後半） |
| 14 | ラヴェル：「水の戯れ」の分析（再現部） |
| 15 | まとめとレポートの提出要領 |

| | | | | |
|---------|------|-------------------|--------|--------|
| 作曲技法演習Ⅱ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 2年次 | | 1 時限/週 | 2 単位/年 |
| | 担当教員 | いけだ かずひで 池田 一秀 | | |

授業の到達目標及びテーマ

19世紀末から20世紀初頭の音楽作品には、今日の音楽を予見する様々な創意工夫がみられる。これらの作品を研究することによって、重要なキーワードとアイデアを手にすることがテーマである。作品を4声体和声に変換し、その骨格をもとに別の作品に再構築し、自分の言葉にしていくことが到達目標になる。

授業の概要

西洋近代音楽の和声分析が中心の授業であるが、そこから骨格となる4声体和声を抽出することによって、作曲家固有の響きを自分の言葉として吸収する。機能と声の視点では分析不能な構造も、この作業によって理解し、多様な再構築により自分の作品に取り入れることができる。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

先行研究を調べて、課題をあらかじめ分析しておく(予習)。抽出した和声から再構築する作業を、時間をかけて練習する(復習)。

学生に対する成績評価の方法・基準

授業時に行う課題の分析や、授業に参加する積極性(20%)と、年度末に提出するレポート(80%)で評価する。

テキスト

授業時に配布するプリントがテキストとなる。

参考書・参考資料等

必要な参考文献は、授業時に指示する。

授業内容

(前期)

| | |
|----|------------------------------|
| 1 | 4声体和声の抽出の練習(ブルグミュラー Op100-6) |
| 2 | 4声体和声の抽出の練習(ブルグミュラー Op100-8) |
| 3 | 4声体和声の抽出の練習(ギロック:抒情小曲集 11) |
| 4 | 4声体和声の抽出の練習(ギロック:抒情小曲集 24) |
| 5 | 遠隔調転調の分析練習①(異名同音転調を含めない) |
| 6 | 遠隔調転調の分析練習②(異名同音転調を含める) |
| 7 | 遠隔調転調を含む作品の分析(ショパン:マズルカ #8) |
| 8 | 遠隔調転調を含む作品の分析(ショパン:マズルカ #15) |
| 9 | 遠隔調転調を含む作品の分析(ショパン:マズルカ #36) |
| 10 | フォーレ:「シリエンヌ」の分析 |
| 11 | ドリア終止の分析練習(半終止) |
| 12 | ドリア終止の分析練習(変終止) |
| 13 | フォーレ:「月の光」の分析 |
| 14 | フォーレ:「夢のあとに」の分析 |

(後期)

| | |
|----|------------------------------|
| 1 | フランク:「前奏曲、コラールとフーガ」の分析(前奏曲) |
| 2 | フランク:「前奏曲、コラールとフーガ」の分析(コラール) |
| 3 | フランク:「前奏曲、コラールとフーガ」の分析(フーガ) |
| 4 | ドビュッシー:「前奏曲集 1-1」の分析(第1部) |
| 5 | ドビュッシー:「前奏曲集 1-1」の分析(第2部) |
| 6 | ドビュッシー:「前奏曲集 1-1」の分析(第3部) |
| 7 | ドビュッシー:「前奏曲集 1-7」の分析(第1部) |
| 8 | ドビュッシー:「前奏曲集 1-7」の分析(第2部) |
| 9 | ドビュッシー:「前奏曲集 1-7」の分析(第3部) |
| 10 | ラヴェル:「水の戯れ」の分析(提示部の前半) |
| 11 | ラヴェル:「水の戯れ」の分析(提示部の後半) |
| 12 | ラヴェル:「水の戯れ」の分析(展開部の前半) |
| 13 | ラヴェル:「水の戯れ」の分析(展開部の後半) |
| 14 | ラヴェル:「水の戯れ」の分析(再現部) |
| 15 | まとめとレポートの提出要領 |

音楽学研究西洋(講義)Ⅰ

開講年次

1年次

組

時限数

1 時限/週

単位数

4 単位/年

担当教員

こしかけざわ
越懸澤

まい
麻衣

授業の到達目標及びテーマ

西洋音楽を中心とする音楽学研究の諸領域とその方法論を知り、具体的に研究を行うための視点を養い、方法論を身に付けることを目標とする。また、音楽や音楽をめぐる文化的・社会的な事象に対し、問題意識をもって、批判的に先行研究を読めるようになることを目指す。

授業の概要

音楽学研究の基礎となる諸領域を紹介し、受講者とのディスカッションを通して、それぞれの特徴や問題点についての理解を深める。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

授業で扱うトピックについて、積極的に文献を読み、自ら調査する(1時間)。

学生に対する成績評価の方法・基準

授業への取り組みによる。

テキスト

なし。

参考書・参考資料等

授業中に適宜紹介する。

授業内容

(前期)

| | |
|----|---------------------|
| 1 | オリエンテーション |
| 2 | 音楽の歴史研究①-導入 |
| 3 | 音楽の歴史研究②-展開 |
| 4 | 音楽の歴史研究③-応用 |
| 5 | 音楽の歴史研究④-受講者によるまとめ |
| 6 | 楽曲分析の方法論①-導入 |
| 7 | 楽曲分析の方法論②-展開 |
| 8 | 楽曲分析の方法論③-応用 |
| 9 | 楽曲分析の方法論④-受講者によるまとめ |
| 10 | 受容史研究①-導入 |
| 11 | 受容史研究②-展開 |
| 12 | 受容史研究③-応用 |
| 13 | 受容史研究④-受講者によるまとめ |
| 14 | 前期のまとめ |

(後期)

| | |
|----|---------------------------|
| 1 | パフォーマンス・スタディーズ①-導入 |
| 2 | パフォーマンス・スタディーズ②-展開 |
| 3 | パフォーマンス・スタディーズ③-応用 |
| 4 | パフォーマンス・スタディーズ④-受講者によるまとめ |
| 5 | 音楽の理論書①-導入 |
| 6 | 音楽の理論書②-展開 |
| 7 | 音楽の理論書③-応用 |
| 8 | 音楽の理論書④-受講者によるまとめ |
| 9 | 音楽と都市①-導入 |
| 10 | 音楽と都市②-展開、応用 |
| 11 | 音楽と都市④-受講者によるまとめ |
| 12 | 音楽社会学①-導入 |
| 13 | 音楽社会学②-展開、応用 |
| 14 | 音楽社会学④-受講者によるまとめ |
| 15 | 後期のまとめ |

| | | | | |
|--------------|------|---------------------|--------|--------|
| 音楽学研究西洋（講義）Ⅱ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 2年次 | | 1 時限/週 | 4 単位/年 |
| | 担当教員 | こしかげざわ まい 越懸澤 麻衣 | | |

授業の到達目標及びテーマ

西洋音楽を中心とする音楽学研究の諸領域とその方法論を知り、具体的に研究を行うための視点を養い、方法論を身に付けることを目標とする。また、音楽や音楽をめぐる文化的・社会的な事象に対し、問題意識をもって、批判的に先行研究を読めるようになることを目指す。

授業の概要

音楽学研究の基礎となる諸領域を紹介し、受講者とのディスカッションを通して、それぞれの特徴や問題点についての理解を深める。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

授業で扱うトピックについて、積極的に文献を読み、自ら調査する（1時間）。

学生に対する成績評価の方法・基準

授業への取り組みによる。

テキスト

なし

参考書・参考資料等

授業中に適宜紹介する。

授業内容

〔前期〕

| | |
|----|---------------------|
| 1 | オリエンテーション |
| 2 | 音楽の歴史研究①-導入 |
| 3 | 音楽の歴史研究②-展開 |
| 4 | 音楽の歴史研究③-応用 |
| 5 | 音楽の歴史研究④-受講者によるまとめ |
| 6 | 楽曲分析の方法論①-導入 |
| 7 | 楽曲分析の方法論②-展開 |
| 8 | 楽曲分析の方法論③-応用 |
| 9 | 楽曲分析の方法論④-受講者によるまとめ |
| 10 | 受容史研究①-導入 |
| 11 | 受容史研究②-展開 |
| 12 | 受容史研究③-応用 |
| 13 | 受容史研究④-受講者によるまとめ |
| 14 | 前期のまとめ |

〔後期〕

| | |
|----|---------------------------|
| 1 | パフォーマンス・スタディーズ①-導入 |
| 2 | パフォーマンス・スタディーズ②-展開 |
| 3 | パフォーマンス・スタディーズ③-応用 |
| 4 | パフォーマンス・スタディーズ④-受講者によるまとめ |
| 5 | 音楽の理論書①-導入 |
| 6 | 音楽の理論書②-展開 |
| 7 | 音楽の理論書③-応用 |
| 8 | 音楽の理論書④-受講者によるまとめ |
| 9 | 音楽と都市①-導入 |
| 10 | 音楽と都市②-展開、応用 |
| 11 | 音楽と都市④-受講者によるまとめ |
| 12 | 音楽社会学①-導入 |
| 13 | 音楽社会学②-展開、応用 |
| 14 | 音楽社会学④-受講者によるまとめ |
| 15 | 後期のまとめ |

| | | | | |
|--------------|------|-----------------|--------|--------|
| 音楽学研究西洋（演習）Ⅰ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 1年次 | | 1 時限/週 | 4 単位/年 |
| | 担当教員 | ふくだ わたる 福田 弥 | | |

授業の到達目標及びテーマ

西洋音楽を対象とする音楽学研究の諸領域を知り、基本的な文献の扱い方、および研究の方法論を身につけることが到達目標である。とりわけ批判的態度を習得し、学術論文に対する批判ができるようになることも目標となる。

授業の概要

音楽学の基礎となる「授業内容」に示した諸問題について説明する。諸資料の扱い方も習得してもらいたい。受講者からの積極的な発言を期待する。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

今回のテーマについてハンド・アウトを作成し、授業に臨むこと。授業以上に、普段の自発的かつ積極的な各自の調査が必要。1時間。

学生に対する成績評価の方法・基準

授業態度による。

テキスト

教科書は指定しない。

参考書・参考資料等

講義時に指示する。

授業内容

〔前期〕

| | |
|----|-------------------|
| 1 | 音楽学の諸領域について |
| 2 | 音楽学の資料 |
| 3 | 音楽学の基本文献について：作品目録 |
| 4 | 同：批判校訂版（作品全集） |
| 5 | 同：実用版 |
| 6 | 同：書簡集 |
| 7 | 同：伝記など |
| 8 | 受容研究について：資料の種類 |
| 9 | 同：演奏会のポスター |
| 10 | 同：レパートリー研究 |
| 11 | 同：書簡を批判的に読む |
| 12 | 同：批評を批判的に読む |
| 13 | 受講者による論文批判 |
| 14 | 同 |

〔後期〕

| | |
|----|----------------|
| 1 | 様式研究について：資料の種類 |
| 2 | 同 |
| 3 | 同 |
| 4 | 同 |
| 5 | 同 |
| 6 | 資料研究について：資料の種類 |
| 7 | 同：資料記述 1 |
| 8 | 同：資料記述 2 |
| 9 | 同：資料批判 1 |
| 10 | 同：資料批判 2 |
| 11 | 同：資料批判 3 |
| 12 | 典礼音楽の基礎 |
| 13 | 同 |
| 14 | 受講者による論文批判 |
| 15 | 同 |

| | | | | |
|--------------|------|-----------------|--------|--------|
| 音楽学研究西洋（演習）Ⅱ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 2年次 | | 1 時限/週 | 4 単位/年 |
| | 担当教員 | ふくだ わたる 福田 弥 | | |

授業の到達目標及びテーマ

西洋音楽を対象とする音楽学研究の諸領域を知り、基本的な文献の扱い方、および研究の方法論を身につけることが到達目標である。とりわけ批判的態度を習得し、学術論文に対する批判ができるようになることも目標となる。

授業の概要

音楽学の基礎となる「授業内容」に示した諸問題について説明する。諸資料の扱い方も習得してもらいたい。受講者からの積極的な発言を期待する。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

今回のテーマについてハンド・アウトを作成し、授業に臨むこと。授業以上に、普段の自発的かつ積極的な各自の調査が必要。1時間。

学生に対する成績評価の方法・基準

授業態度による。

テキスト

教科書は指定しない。

参考書・参考資料等

講義時に指示する。

授業内容

〔前期〕

| | |
|----|-------------------|
| 1 | 音楽学の諸領域について |
| 2 | 音楽学の資料 |
| 3 | 音楽学の基本文献について：作品目録 |
| 4 | 同：批判校訂版（作品全集） |
| 5 | 同：実用版 |
| 6 | 同：書簡集 |
| 7 | 同：伝記など |
| 8 | 受容研究について：資料の種類 |
| 9 | 同：演奏会のポスター |
| 10 | 同：レパートリー研究 |
| 11 | 同：書簡を批判的に読む |
| 12 | 同：批評を批判的に読む |
| 13 | 受講者による論文批判 |
| 14 | 同 |

〔後期〕

| | |
|----|----------------|
| 1 | 様式研究について：資料の種類 |
| 2 | 同 |
| 3 | 同 |
| 4 | 同 |
| 5 | 同 |
| 6 | 資料研究について：資料の種類 |
| 7 | 同：資料記述 1 |
| 8 | 同：資料記述 2 |
| 9 | 同：資料批判 1 |
| 10 | 同：資料批判 2 |
| 11 | 同：資料批判 3 |
| 12 | 典礼音楽の基礎 |
| 13 | 同 |
| 14 | 受講者による論文批判 |
| 15 | 同 |

| | | | | |
|--------------|------|------------------|--------|--------|
| 音楽学研究日本（演習）Ⅰ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 1年次 | | 1 時限/週 | 4 単位/年 |
| | 担当教員 | こもだ はるこ 薦田 治子 | | |

授業の到達目標及びテーマ

日本音楽研究の基礎知識を養い、現在の研究動向を学び、各分野における研究の問題点を把握することを目標とする。そのために各分野の基本文献と直近の学会論文の講読を行う。

授業の概要

雅楽、仏教音楽、平家、能楽、三曲、歌舞伎、人形浄瑠璃、民俗音楽、民謡について、基本文献と現状について学ぶ。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

予習・復習として与えられた課題に取り組む。2時間。

学生に対する成績評価の方法・基準

試験（80%）、平常点（20%）。

テキスト

特に指定しない

参考書・参考資料等

小島美子監修『日本の伝統芸能講座 音楽』（淡水社 2008）

授業内容

〔前期〕

| | |
|----|---------------|
| 1 | 雅楽の基本文献 |
| 2 | 仏教音楽の基本文献 |
| 3 | 平家の基本文献 |
| 4 | 能楽の基本文献 |
| 5 | 中世歌謡の基本文献 |
| 6 | 箏曲、地歌の基本文献 |
| 7 | 尺八楽、胡弓楽の基本文献 |
| 8 | 長唄の基本文献 |
| 9 | 義太夫節の基本文献 |
| 10 | 民謡の基本文献 1 |
| 11 | 民謡の基本文献 2 |
| 12 | 民俗芸能の基本文献 |
| 13 | 近現代の日本音楽の基本文献 |
| 14 | 前期のまとめ |

〔後期〕

| | |
|----|---------------|
| 1 | 雅楽研究の現状 |
| 2 | 仏教音楽研究の現状 |
| 3 | 平家研究の現状 |
| 4 | 能楽研究の現状 |
| 5 | 中世歌謡研究の現状 |
| 6 | 箏曲、地歌研究の現状 |
| 7 | 尺八楽、胡弓楽研究の現状 |
| 8 | 長唄研究の現状 |
| 9 | 義太夫節研究の現状 |
| 10 | 民謡研究の現状 1 |
| 11 | 民謡研究の現状 2 |
| 12 | 民俗芸能研究の現状 |
| 13 | 近現代の日本音楽研究の現状 |
| 14 | 後期のまとめ |

| | | | | |
|--------------|------|------------------|--------|--------|
| 音楽学研究日本（演習）Ⅱ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 2年次 | | 1 時限/週 | 4 単位/年 |
| | 担当教員 | こもだ はるこ 薦田 治子 | | |

授業の到達目標及びテーマ

日本音楽研究の基礎知識を養い、現在の研究動向を学び、各分野における研究の問題点を把握することを目標とする。そのために各分野の基本文献と直近の学会論文の講読を行う。

授業の概要

雅楽、仏教音楽、平家、能楽、三曲、歌舞伎、人形浄瑠璃、民俗音楽、民謡について、基本文献と現状について学ぶ。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

予習・復習として与えられた課題に取り組む。2 時間。

学生に対する成績評価の方法・基準

試験（80%）、平常点（20%）。

テキスト

特に指定しない

参考書・参考資料等

小島美子監修『日本の伝統芸能講座 音楽』（淡水社 2008）

授業内容

〔前期〕

| | |
|----|---------------|
| 1 | 雅楽の基本文献 |
| 2 | 仏教音楽の基本文献 |
| 3 | 平家の基本文献 |
| 4 | 能楽の基本文献 |
| 5 | 中世歌謡の基本文献 |
| 6 | 箏曲、地歌の基本文献 |
| 7 | 尺八楽、胡弓楽の基本文献 |
| 8 | 長唄の基本文献 |
| 9 | 義太夫節の基本文献 |
| 10 | 民謡の基本文献 1 |
| 11 | 民謡の基本文献 2 |
| 12 | 民俗芸能の基本文献 |
| 13 | 近現代の日本音楽の基本文献 |
| 14 | 前期のまとめ |

〔後期〕

| | |
|----|---------------|
| 1 | 雅楽研究の現状 |
| 2 | 仏教音楽研究の現状 |
| 3 | 平家研究の現状 |
| 4 | 能楽研究の現状 |
| 5 | 中世歌謡研究の現状 |
| 6 | 箏曲、地歌研究の現状 |
| 7 | 尺八楽、胡弓楽研究の現状 |
| 8 | 長唄研究の現状 |
| 9 | 義太夫節研究の現状 |
| 10 | 民謡研究の現状 1 |
| 11 | 民謡研究の現状 2 |
| 12 | 民俗芸能研究の現状 |
| 13 | 近現代の日本音楽研究の現状 |
| 14 | 後期のまとめ |

| | | | | |
|-------------|------|------------------|--------|--------|
| 音楽教育研究（講義）Ⅰ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 1年次 | | 1 時限/週 | 4 単位/年 |
| | 担当教員 | かとう てつや 加藤 徹也 | | |

授業の到達目標及びテーマ

音楽教育の現状を概観して問題点を考察するとともに、研究活動を進める上で必要となる基礎的な事柄を学修する。幅広い視野から音楽教育の意義と役割を考察する力と主体的に探究する力を身につけることを到達目標とする。

授業の概要

我が国及び世界各地の音楽活動や音楽教育の現状を概観して問題点を考察する。また、設定された課題に取り組み、発表や討議を通じて考察を深める。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

学修成果の充実・向上を図るため、毎回十分な時間をかけて予習・復習を行う必要がある。

学生に対する成績評価の方法・基準

課題への取り組みの成果（40%）、自己の考えを的確に表す力（30%）、活動に取り組む意欲と姿勢（30%）により、総合的に評価する。

テキスト

特に指定しない。

参考書・参考資料等

授業時に適宜紹介する。

授業内容

〔前期〕

| | |
|----|------------------------|
| 1 | オリエンテーション |
| 2 | 音楽教育の状況①（小学校音楽科） |
| 3 | 音楽教育の状況②（中学校音楽科） |
| 4 | 音楽教育の状況③（高等学校芸術科音楽） |
| 5 | 音楽教育の状況④（音楽の専門教育） |
| 6 | 音楽科教育の課題①（指導事例の研究と討議①） |
| 7 | 音楽科教育の課題②（指導事例の研究と討議②） |
| 8 | 音楽科教育の課題③（指導事例の研究と討議③） |
| 9 | 音楽活動と指導の状況①（吹奏楽） |
| 10 | 音楽活動と指導の状況②（合唱） |
| 11 | 音楽活動と指導の状況③（民謡、民俗芸能） |
| 12 | 音楽活動と指導の状況④（諸外国の音楽①） |
| 13 | 音楽活動と指導の状況⑤（諸外国の音楽②） |
| 14 | 前期のまとめ |

〔後期〕

| | |
|----|------------------------|
| 1 | 問題解決の基礎①（問題の把握） |
| 2 | 問題解決の基礎②（問題解決の姿勢と方策） |
| 3 | 問題解決の基礎③（情報の収集） |
| 4 | 問題解決の基礎④（分析の視点） |
| 5 | 音楽科教育の課題④（指導事例の研究と討議④） |
| 6 | 音楽科教育の課題⑤（指導事例の研究と討議⑤） |
| 7 | 音楽科教育の課題⑥（指導事例の研究と討議⑥） |
| 8 | 研究の動向①（研究大会における実践事例①） |
| 9 | 研究の動向②（研究大会における実践事例②） |
| 10 | 研究の動向③（学会における研究発表） |
| 11 | 研究調査の基礎①（研究と調査） |
| 12 | 研究調査の基礎②（質的調査） |
| 13 | 研究調査の基礎③（量的調査） |
| 14 | 研究調査の基礎④（調査の手順） |
| 15 | 全体の総括 |

| | | | | |
|-------------|------|------------------|--------|--------|
| 音楽教育研究（講義）Ⅱ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 2年次 | | 1 時限/週 | 4 単位/年 |
| | 担当教員 | かとう てつや 加藤 徹也 | | |

授業の到達目標及びテーマ

音楽教育の現状を概観して問題点を考察するとともに、研究活動を進める上で必要となる基礎的な事柄を学修する。幅広い視野から音楽教育の意義と役割を考察する力と主体的に探究する力を身につけることを到達目標とする。

授業の概要

我が国及び世界各地の音楽活動や音楽教育の現状を概観して問題点を考察する。また、設定された課題に取り組み、発表や討議を通じて考察を深める。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

学修成果の充実・向上を図るため、毎回十分な時間をかけて予習・復習を行う必要がある。

学生に対する成績評価の方法・基準

課題への取り組みの成果（40%）、自己の考えを的確に表す力（30%）、活動に取り組む意欲と姿勢（30%）により、総合的に評価する。

テキスト

特に指定しない。

参考書・参考資料等

授業時に適宜紹介する。

授業内容

〔前期〕

| | |
|----|------------------------|
| 1 | オリエンテーション |
| 2 | 音楽教育の状況①（小学校音楽科） |
| 3 | 音楽教育の状況②（中学校音楽科） |
| 4 | 音楽教育の状況③（高等学校芸術科音楽） |
| 5 | 音楽教育の状況④（音楽の専門教育） |
| 6 | 音楽科教育の課題①（指導事例の研究と討議①） |
| 7 | 音楽科教育の課題②（指導事例の研究と討議②） |
| 8 | 音楽科教育の課題③（指導事例の研究と討議③） |
| 9 | 音楽活動と指導の状況①（吹奏楽） |
| 10 | 音楽活動と指導の状況②（合唱） |
| 11 | 音楽活動と指導の状況③（民謡、民俗芸能） |
| 12 | 音楽活動と指導の状況④（諸外国の音楽①） |
| 13 | 音楽活動と指導の状況⑤（諸外国の音楽②） |
| 14 | 前期のまとめ |

〔後期〕

| | |
|----|------------------------|
| 1 | 問題解決の基礎①（問題の把握） |
| 2 | 問題解決の基礎②（問題解決の姿勢と方策） |
| 3 | 問題解決の基礎③（情報の収集） |
| 4 | 問題解決の基礎④（分析の視点） |
| 5 | 音楽科教育の課題④（指導事例の研究と討議④） |
| 6 | 音楽科教育の課題⑤（指導事例の研究と討議⑤） |
| 7 | 音楽科教育の課題⑥（指導事例の研究と討議⑥） |
| 8 | 研究の動向①（研究大会における実践事例①） |
| 9 | 研究の動向②（研究大会における実践事例②） |
| 10 | 研究の動向③（学会における研究発表） |
| 11 | 研究調査の基礎①（研究と調査） |
| 12 | 研究調査の基礎②（質的調査） |
| 13 | 研究調査の基礎③（量的調査） |
| 14 | 研究調査の基礎④（調査の手順） |
| 15 | 全体の総括 |

| | | | | |
|---------------|------|-------------------|--------|--------|
| 音楽教育文献研究（講義）Ⅰ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 1年次 | | 1 時限/週 | 4 単位/年 |
| | 担当教員 | もりた きょうこ 森田 恭子 | | |

授業の到達目標及びテーマ

さまざまなタイプの研究論文の精読を通して、音楽教育研究の遂行に必要な論文（特に質的研究）解釈のための技能を習得する。また、その著者が、論文を執筆するまでを追体験することで、自身の修士論文の構想に資することを目標とする。

授業の概要

前期は質的研究の進め方を理解し、クラスでテーマを決めてバーチャル論文の作成を試みる。後期は実際の研究論文の精読と解釈を通して、自身の修士論文の構想に資する先行研究の検討の技能を高める。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

授業時に提示された課題の解決に向けて、参考資料や文献を精読する。また、自身の修士論文をめぐる課題との関連性を意識するよう心がける。（5時間）

学生に対する成績評価の方法・基準

課題解決に向けての取り組みの姿勢（50%）
前期：バーチャル論文の作成（25%）・後期：レポート（25%）

テキスト

授業時にプリントを配付する。

参考書・参考資料等

関口靖広（2013）『教育研究のための質的研究方講座』北大路書房

授業内容

〔前期〕

| | |
|----|---------------------------|
| 1 | 音楽教育研究の分野 |
| 2 | 音楽教育研究の方法① 質的研究 |
| 3 | 質的研究の事例検討 |
| 4 | 音楽教育研究の方法② 量的研究 |
| 5 | 量的研究の事例検討 |
| 6 | 質的研究の進め方① 先行研究の検討・研究課題の設定 |
| 7 | 質的研究の進め方② 研究方法の検討 |
| 8 | 質的研究の進め方③ 主研究の内容とその計画 |
| 9 | 質的研究の進め方④ 観察の記録 |
| 10 | 質的研究の進め方⑤ データの分析 |
| 11 | 質的研究の進め方⑥ 研究のまとめ |
| 12 | バーチャル論文の作成① 研究課題の設定 |
| 13 | バーチャル論文の作成② 研究方法・内容・計画の検討 |
| 14 | バーチャル論文の作成③ 観察記録・データ分析 |

〔後期〕

| | |
|----|----------------------------|
| 1 | バーチャル論文の精読及び検討 |
| 2 | 研究論文の解釈① 先行研究の検討方法 |
| 3 | 研究論文の解釈② 研究課題の導き方 |
| 4 | 研究論文の解釈③ 研究計画の妥当性 |
| 5 | 研究論文の解釈④ データ収集の信頼性 |
| 6 | 研究論文の解釈⑤ データ分析の妥当性 |
| 7 | 研究論文の解釈⑥ 結論の導き方 |
| 8 | 研究論文の解釈⑦ 考察の適格性 |
| 9 | 研究論文の解釈⑧ 論文の構成 |
| 10 | 研究論文の解釈⑨ 論文の表現 |
| 11 | 修士論文計画の検討① 先行研究の検討の範囲 |
| 12 | 修士論文計画の検討② 先行研究の検討の視点 |
| 13 | 修士論文計画の検討③ 先行研究の検討と修論の研究課題 |
| 14 | 修士論文計画の検討④ 論文の構成 |
| 15 | まとめ：研究論文とは |

| | | | | |
|---------------|------|-------------------|--------|--------|
| 音楽教育文献研究（講義）Ⅱ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 2年次 | | 1 時限/週 | 4 単位/年 |
| | 担当教員 | もりた きょうこ 森田 恭子 | | |

授業の到達目標及びテーマ

さまざまなタイプの研究論文の精読を通して、音楽教育研究の遂行に必要な論文（特に質的研究）解釈のための技能を習得する。また、その著者が、論文を執筆するまでを追体験することで、自身の修士論文の構想に資することを目標とする。

授業の概要

前期は質的研究の進め方を理解し、クラスでテーマを決めてパーチャル論文の作成を試みる。後期は実際の研究論文の精読と解釈を通して、自身の修士論文の構想に資する先行研究の検討の技能を高める。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

授業時に提示された課題の解決に向けて、参考資料や文献を精読する。また、自身の修士論文をめぐる課題との関連性を意識するよう心がける。（5時間）

学生に対する成績評価の方法・基準

課題解決に向けての取り組みの姿勢（50%）
前期：パーチャル論文の作成（25%）・後期：レポート（25%）

テキスト

授業時にプリントを配付する。

参考書・参考資料等

関口靖広（2013）『教育研究のための質的研究方講座』北大路書房

授業内容

（前期）

| | |
|----|---------------------------|
| 1 | 音楽教育研究の分野 |
| 2 | 音楽教育研究の方法① 質的研究 |
| 3 | 質的研究の事例検討 |
| 4 | 音楽教育研究の方法② 量的研究 |
| 5 | 量的研究の事例検討 |
| 6 | 質的研究の進め方① 先行研究の検討・研究課題の設定 |
| 7 | 質的研究の進め方② 研究方法の検討 |
| 8 | 質的研究の進め方③ 主研究の内容とその計画 |
| 9 | 質的研究の進め方④ 観察の記録 |
| 10 | 質的研究の進め方⑤ データの分析 |
| 11 | 質的研究の進め方⑥ 研究のまとめ |
| 12 | パーチャル論文の作成① 研究課題の設定 |
| 13 | パーチャル論文の作成② 研究方法・内容・計画の検討 |
| 14 | パーチャル論文の作成③ 観察記録・データ分析 |

（後期）

| | |
|----|----------------------------|
| 1 | パーチャル論文の精読及び検討 |
| 2 | 研究論文の解釈① 先行研究の検討方法 |
| 3 | 研究論文の解釈② 研究課題の導き方 |
| 4 | 研究論文の解釈③ 研究計画の妥当性 |
| 5 | 研究論文の解釈④ データ収集の信頼性 |
| 6 | 研究論文の解釈⑤ データ分析の妥当性 |
| 7 | 研究論文の解釈⑥ 結論の導き方 |
| 8 | 研究論文の解釈⑦ 考察の適格性 |
| 9 | 研究論文の解釈⑧ 論文の構成 |
| 10 | 研究論文の解釈⑨ 論文の表現 |
| 11 | 修士論文計画の検討① 先行研究の検討の範囲 |
| 12 | 修士論文計画の検討② 先行研究の検討の視点 |
| 13 | 修士論文計画の検討③ 先行研究の検討と修論の研究課題 |
| 14 | 修士論文計画の検討④ 論文の構成 |
| 15 | まとめ：研究論文とは |

修士課程

| | | | | |
|---------------|------|----------------|--------|--------|
| 演奏研究（西洋古楽実習）Ⅰ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 1年次 | | 1 時限/週 | 4 単位/年 |
| | 担当教員 | いしかわ 石川 かおり | | |

授業の到達目標及びテーマ

西洋古楽の根幹をなすヴィオラ・ダ・ガンバの基本的な奏法を学び、後の時代の楽器奏法との違いを経験する。音楽史を学ぶ上で、実践的にルネッサンス・バロック時代のアンサンブルを演奏することにより学術的な学びからさらに一歩研究を深めることを目標とする。

授業の概要

古楽におけるヴィオラ・ダ・ガンバの重要性を知り、楽器の構造や奏法を学ぶ。また、いろいろなタイプの楽器の特徴を知ることにより、合奏の技術を習得する。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

本学所蔵の楽器を借用し、基礎的な奏法の練習や課題曲の譜読みを1時間程度行う。

学生に対する成績評価の方法・基準

授業中に適宜行う発表（80%）、普段の授業への取り組みや練習状況、技術的な上達度（20%）を合わせて評価する。

テキスト

教則本は使用しない。授業毎に楽譜を配布する。

参考書・参考資料等

ヴィオラ・ダ・ガンバの手引（日本ヴィオラ・ダ・ガンバ協会）

授業内容

（前期）

| | |
|----|---------------------------------|
| 1 | 概論—西洋古楽におけるヴィオラ・ダ・ガンバ |
| 2 | 楽器、弓の取り扱いと調弦法 |
| 3 | 楽器の構え方、弓の持ち方と運弓法 |
| 4 | 高音弦と低音弦の違いを意識した運弓練習 |
| 5 | 左手の指使い練習 |
| 6 | ト長調の音階練習 |
| 7 | ト長調上での様々なリズムでの練習 |
| 8 | 記譜法、音部記号について |
| 9 | 大きさの違う楽器に触れる（トレブル、テナー、バス） |
| 10 | 独奏曲（アウグスト・ヴェンツィンガー教則本より） |
| 11 | 音源を鑑賞することにより美しい音のイメージを掴む |
| 12 | 二重奏の演奏（Chr. シンプソンの教則本（1659）による） |
| 13 | ミヒャエル・プレトリウスの《ヴォルテ》 |
| 14 | 発表 |

（後期）

| | |
|----|---------------------------------|
| 1 | 運弓法、フィンガリングの復習 |
| 2 | 左手のポジション移動の練習 |
| 3 | ポジション移動のある二重奏（Chr. シンプソンの教則本より） |
| 4 | 調弦法の違うテノール楽器に慣れる |
| 5 | ヘンリー 8 世の三重奏《良き仲間との気晴らし》 |
| 6 | 音程、強弱、フレーズに気をつける |
| 7 | ミヒャエル・プレトリウスの《小さなブドウリオン》 |
| 8 | 他声部に意識を向ける |
| 9 | ジョン・ダウランドの四重奏《今こそ、私は去らねばならぬ》 |
| 10 | 歌詞を参考にしたフレーズの解釈 |
| 11 | ルネッサンス、バロック時代の舞曲について |
| 12 | ティールマン・スザートの四重奏 バヴァーヌ《苦い後悔》 |
| 13 | バヴァーヌのリズムに乗せて |
| 14 | 聴き合うことにより声部間の縦の動きを揃える |
| 15 | 発表 |

| | | | | |
|---------------|------|-------------|--------|--------|
| 演奏研究（西洋古楽実習）Ⅱ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 2年次 | | 1 時限/週 | 4 単位/年 |
| | 担当教員 | いしかわ 石川 かおり | | |

授業の到達目標及びテーマ

西洋古楽の根幹をなすヴィオラ・ダ・ガンバの基本的な奏法を学び、後の時代の楽器奏法との違いを経験する。音楽史を学ぶ上で、実践的にルネッサンス・バロック時代のアンサンブルを演奏することにより学術的な学びからさらに一歩研究を深めることを目標とする。

授業の概要

古楽におけるヴィオラ・ダ・ガンバの重要性を知り、楽器の構造や奏法を学ぶ。また、いろいろなタイプの楽器の特徴を知ることにより、合奏の技術を習得する。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

本学所蔵の楽器を借用し、基礎的な奏法の練習や課題曲の譜読みを1時間程度行う。

学生に対する成績評価の方法・基準

授業中に適宜行う発表（80%）、普段の授業への取り組みや練習状況、技術的な上達度（20%）を合わせて評価する。

テキスト

教則本は使用しない。授業毎に楽譜を配布する。

参考書・参考資料等

ヴィオラ・ダ・ガンバの手引（日本ヴィオラ・ダ・ガンバ協会）

授業内容

（前期）

| | |
|----|---------------------------------|
| 1 | 概論—西洋古楽におけるヴィオラ・ダ・ガンバ |
| 2 | 楽器、弓の取り扱いと調弦法 |
| 3 | 楽器の構え方、弓の持ち方と運弓法 |
| 4 | 高音弦と低音弦の違いを意識した運弓練習 |
| 5 | 左手の指使い練習 |
| 6 | ト長調の音階練習 |
| 7 | ト長調上での様々なリズムでの練習 |
| 8 | 記譜法、音部記号について |
| 9 | 大きさの違う楽器に触れる（トレブル、テナー、バス） |
| 10 | 独奏曲（アウグスト・ヴェンツィンガー教則本より） |
| 11 | 音源を鑑賞することにより美しい音のイメージを掴む |
| 12 | 二重奏の演習（Chr. シンプソンの教則本（1659）による） |
| 13 | ミヒャエル・プレトリウスの《ヴォルテ》 |
| 14 | 発表 |

（後期）

| | |
|----|---------------------------------|
| 1 | 運弓法、フィンガリングの復習 |
| 2 | 左手のポジション移動の練習 |
| 3 | ポジション移動のある二重奏（Chr. シンプソンの教則本より） |
| 4 | 調弦法の違うテノール楽器に慣れる |
| 5 | ヘンリー 8 世の三重奏《良き仲間との気晴らし》 |
| 6 | 音程、強弱、フレーズに気をつける |
| 7 | ミヒャエル・プレトリウスの《小さなブドウリオン》 |
| 8 | 他声部に意識を向ける |
| 9 | ジョン・ダウランドの四重奏《今こそ、私は去らねばならぬ》 |
| 10 | 歌詞を参考にしたフレーズの解釈 |
| 11 | ルネッサンス、バロック時代の舞曲について |
| 12 | ティールマン・スザートの四重奏 バヴァーヌ《苦い後悔》 |
| 13 | バヴァーヌのリズムに乗せて |
| 14 | 聴き合うことにより声部間の縦の動きを揃える |
| 15 | 発表 |

| | | | | |
|-------------|------|----------------------|--------|--------|
| 演奏研究（雅楽実習）Ⅰ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 1年次 | | 1 時限/週 | 4 単位/年 |
| | 担当教員 | とうぎ 東儀 博昭・黒川 まりえ 真理恵 | | |

授業の到達目標及びテーマ

雅楽は、日本で最も古い伝統と歴史を誇る総合芸術であり、重要無形文化財である。日本の伝統音楽の源流となり、現代音楽へも影響を与え続けている。この授業では、雅楽の歴史、理論、記譜法などの知識を深め、雅楽の楽器の実技演奏を習得することを目標とする。

授業の概要

雅楽の歴史や理論を学ぶとともに、楽器の実技演奏を行う。前期では、打物・吹物・弾物のそれぞれの唱歌（しょうが）と演奏技法を習得し、合奏を行う。後期では、舞楽の舞と伴奏、国風歌舞や歌ものの歌唱と伴奏に取り組む。合奏や発表のグループ・ワークを通して、アクティブ・ラーニングへの取り組みとする。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

予習は、5分程度、日本音楽史の教科書などで雅楽の項目を読んでくること。復習は、10分程度、唱歌を覚えて、楽器の演奏に取り組むこと。

学生に対する成績評価の方法・基準

授業時の態度、意欲、雅楽の基本的な知識や雅楽独特の演奏技法を習得しているか、という点から判断する。

テキスト

特に指定しない。適宜プリントを配布する。

参考書・参考資料等

増本供共子『新版雅楽入門』（オルフェオライブラリー）2013年 音楽之友社

授業内容

（前期）

| | |
|----|-----------------|
| 1 | 雅楽の保存と伝承 |
| 2 | 雅楽のプログラム編成 |
| 3 | 打物①鞆鼓の構造と演奏 |
| 4 | 打物②楽太鼓と鉦鼓の構造と演奏 |
| 5 | 吹物①笙の構造と演奏 |
| 6 | 吹物②箏の構造と演奏 |
| 7 | 吹物③龍笛の構造と演奏 |
| 8 | 吹物④高麗笛の構造と演奏 |
| 9 | 弾物①楽琵琶の構造と演奏 |
| 10 | 弾物②楽箏の構造と演奏 |
| 11 | 管弦の合奏①吉越調の楽曲 |
| 12 | 管弦の合奏②平調の楽曲 |
| 13 | 管弦の合奏③双調の楽曲 |
| 14 | 管弦の合奏④黄鐘調の楽曲 |

（後期）

| | |
|----|---------------|
| 1 | 雅楽と現代音楽 |
| 2 | 雅楽の美学 |
| 3 | 管弦の合奏①盤沙調の楽曲 |
| 4 | 管弦の合奏②太食調の楽曲 |
| 5 | 舞楽①左方（登場楽） |
| 6 | 舞楽②左方（当曲） |
| 7 | 舞楽③左方（退場楽） |
| 8 | 舞楽④右方（登場楽） |
| 9 | 舞楽⑤右方（当曲） |
| 10 | 舞楽⑥右方（退場楽） |
| 11 | 和琴の構造と演奏 |
| 12 | 神楽笛と笏拍子の構造と演奏 |
| 13 | 歌ものの演奏 |
| 14 | 神楽歌・東遊びの演奏 |
| 15 | 催馬楽・朗詠の演奏 |

| 演奏研究（雅楽実習）Ⅱ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
|-------------|---------------------------------|---|--------|--------|
| | 2年次 | | 1 時限/週 | 4 単位/年 |
| 担当教員 | とうぎ 東儀 ひろあき 博昭・黒川 まりえ 真理恵 | | | |

授業の到達目標及びテーマ

雅楽は、日本で最も古い伝統と歴史を誇る総合芸術であり、重要無形文化財である。日本の伝統音楽の源流となり、現代音楽へも影響を与え続けている。この授業では、雅楽の歴史、理論、記譜法などの知識を深め、雅楽の楽器の実技演奏を習得することを目標とする。

授業の概要

雅楽の歴史や理論を学ぶとともに、楽器の実技演奏を行う。前期では、打物・吹物・弾物のそれぞれの唱歌（しょうが）と演奏技法を習得し、合奏を行う。後期では、舞楽の舞と伴奏、国風歌舞や歌ものの歌唱と伴奏に取り組み、合奏や発表のグループ・ワークを通して、アクティブ・ラーニングへの取り組みとする。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

予習は、5分程度、日本音楽史の教科書などで雅楽の項目を読んでくること。復習は、10分程度、唱歌を覚えて、楽器の演奏に取り組むこと。

学生に対する成績評価の方法・基準

平常点100%。試験は行わない。授業時の態度、意欲、雅楽の基本的な知識や雅楽独特の演奏技法を習得しているか、という点から判断する。

テキスト

特に指定しない。適宜プリントを配布する。

参考書・参考資料等

増本供共子『新版雅楽入門』（オルフェオライブラリー）2013年 音楽之友社

授業内容

〔前期〕

| | |
|----|-----------------|
| 1 | 雅楽の保存と伝承 |
| 2 | 雅楽のプログラム編成 |
| 3 | 打物①鞆鼓の構造と演奏 |
| 4 | 打物②楽太鼓と鉦鼓の構造と演奏 |
| 5 | 吹物①笙の構造と演奏 |
| 6 | 吹物②箏の構造と演奏 |
| 7 | 吹物③篳篥の構造と演奏 |
| 8 | 吹物④高麗笛の構造と演奏 |
| 9 | 弾物①楽琵琶の構造と演奏 |
| 10 | 弾物②楽箏の構造と演奏 |
| 11 | 管弦の合奏①吉越調の楽曲 |
| 12 | 管弦の合奏②平調の楽曲 |
| 13 | 管弦の合奏③双調の楽曲 |
| 14 | 管弦の合奏④黄鐘調の楽曲 |

〔後期〕

| | |
|----|---------------|
| 1 | 雅楽と現代音楽 |
| 2 | 雅楽の美学 |
| 3 | 管弦の合奏①盤沙調の楽曲 |
| 4 | 管弦の合奏②太食調の楽曲 |
| 5 | 舞楽①左方（登場楽） |
| 6 | 舞楽②左方（当曲） |
| 7 | 舞楽③左方（退場楽） |
| 8 | 舞楽④右方（登場楽） |
| 9 | 舞楽⑤右方（当曲） |
| 10 | 舞楽⑥右方（退場楽） |
| 11 | 和琴の構造と演奏 |
| 12 | 神楽笛と笏拍子の構造と演奏 |
| 13 | 歌ものの演奏 |
| 14 | 神楽歌・東遊びの演奏 |
| 15 | 催馬楽・朗詠の演奏 |

| 演奏研究（箏実習）Ⅰ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
|------------|----------------|-----|--------|--------|
| | 1年次 | A.B | 1 時限/週 | 4 単位/年 |
| 担当教員 | すぎうら 聡 そう 聡 | | | |

授業の到達目標及びテーマ

この授業では山田流箏曲の実習を行う。箏曲を含む日本の伝統芸能では、習い手が師匠のすることをそのまま真似して吸収する「稽古」という方法が受け継がれている。この授業では「稽古」という教育方法のシステムを解明してゆく。

授業の概要

箏の奏法と山田流箏曲の歌唱について研究し、「稽古」というシステムのなかにある「師匠と自分の違いを自発的に発見する能力」と「自分が発見した違いを身に付け方法を工夫する能力」を習得する方法を探り、利点や批判すべき点などを検証する。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

予習と復習に必要な時間は、それぞれ講義時間に相当する時間とする。それにあたって1週間につき2時間、教室を利用できるものとする。

学生に対する成績評価の方法・基準

前期後期の最終日に行う発表（50%）、レポート（30%）、授業に対する姿勢（20%）、などを総合して評価する。

テキスト

別途指定する。

参考書・参考資料等

箏爪を購入すること。箏曲楽譜（曲目、出版社など）は別途指定する。

授業内容

〔前期〕

| | |
|----|---------------------------------|
| 1 | 楽器の扱いかた、平調子の調弦、基礎奏法の確認等。 |
| 2 | 古典研究 1、山田流箏曲『さくら』と山田流古典基礎奏法。 |
| 3 | 古典研究 2、奏法と唱歌の関係とは。 |
| 4 | 古典研究 3、近世邦楽の歌と伴奏楽器の関係とは。 |
| 5 | 古典研究 4、八橋検校作曲『六段の調』『初段』の試奏。 |
| 6 | 古典研究 5、同曲「初段」の特殊奏法の研究。 |
| 7 | 古典研究 6、同曲「二・三段」の試奏。 |
| 8 | 古典研究 7、同曲「二・三段」の特殊奏法の研究。 |
| 9 | 古典研究 8、同曲「四・五・六段」の試奏。 |
| 10 | 古典研究 9、同曲「四・五・六段」の特殊奏法の研究。 |
| 11 | 古典研究 10、『六段の調』全曲を弾く。段落演奏の構成力とは。 |
| 12 | 古典研究 11、山田流箏曲流祖山田検校作曲『弓八幡』の試奏。 |
| 13 | 古典研究 12、前期に演奏した3曲の終止部分の研究。 |
| 14 | 研究（中間）発表、および講評と解説。 |

〔後期〕

| | |
|----|---------------------------------|
| 1 | 古典研究 13、八橋検校作曲『六段の調』の楽曲研究。 |
| 2 | 古典研究 14、吉沢検校作曲『千鳥の曲』『前奏と前歌』の試奏。 |
| 3 | 古典研究 15、同曲「手事と後歌」の試奏。 |
| 4 | 古典研究 16、同曲の楽曲研究。 |
| 5 | 古典研究 17、前期の3曲と『千鳥の曲』の歌唱技法の比較。 |
| 6 | 新曲研究 1、宮城道雄作曲『さくら変奏曲』の試奏と分析。 |
| 7 | 新曲研究 2、同曲を初心者に教えるための研究。 |
| 8 | 新曲研究 3、宮城道雄作曲『春の海』『第一楽章』の試奏と分析。 |
| 9 | 新曲研究 4、同曲「第二楽章」の試奏と分析。 |
| 10 | 新曲研究 5、同曲「第三楽章」の試奏と分析。 |
| 11 | 新曲研究 6、同曲を初心者に教えるための研究。 |
| 12 | 技法研究 1、古典奏法と現代奏法の違いとは。 |
| 13 | 技法研究 2、生田流と山田流の構えの違いとは。 |
| 14 | 技法研究 3、生田流と山田流の奏法の違いとは。 |
| 15 | 研究発表、および講評と解説。 |

| | | | | |
|------------|------|--------------|--------|--------|
| 演奏研究（箏実習）Ⅱ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 2年次 | A.B | 1 時限/週 | 4 単位/年 |
| | 担当教員 | すぎうら 杉浦 聡 | | |

授業の到達目標及びテーマ

この授業では山田流箏曲の実習を行う。
箏曲を含む日本の伝統芸能では、習い手が師匠のすることをそのまま真似して吸収する「稽古」という方法が受け継がれている。
この授業では「稽古」という教育方法のシステムを解明してゆく。

授業の概要

箏の奏法と山田流箏曲の歌唱について研究し、「稽古」というシステムのなかにある「師匠と自分の違いを自発的に発見する能力」と「自分が発見した違いを身に付け方法を工夫する能力」を習得する方法を探り、利点や批判すべき点などを検証する。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

予習と復習に必要な時間は、それぞれ講義時間に相当する時間とする。それにあたって1週間に付き2時間、教室を利用できるものとする。

学生に対する成績評価の方法・基準

前期後期の最終日に行う発表（50%）、レポート（30%）、授業に対する姿勢（20%）、などを総合して評価する。

テキスト

別途指定する。

参考書・参考資料等

箏爪を購入すること。箏曲楽譜（曲目、出版社など）は別途指定する。

授業内容

（前期）

| | |
|----|---------------------------------|
| 1 | 楽器の扱いかた、平調子の調弦、基礎奏法の確認等。 |
| 2 | 古典研究 1、山田流箏曲『さくら』と山田流古典基礎奏法。 |
| 3 | 古典研究 2、奏法と唱歌の関係とは。 |
| 4 | 古典研究 3、近世邦楽の歌と伴奏楽器の関係とは。 |
| 5 | 古典研究 4、八橋検校作曲『六段の調』『初段』の試奏。 |
| 6 | 古典研究 5、同曲「初段」の特殊奏法の研究。 |
| 7 | 古典研究 6、同曲「二・三段」の試奏。 |
| 8 | 古典研究 7、同曲「二・三段」の特殊奏法の研究。 |
| 9 | 古典研究 8、同曲「四・五・六段」の試奏。 |
| 10 | 古典研究 9、同曲「四・五・六段」の特殊奏法の研究。 |
| 11 | 古典研究 10、『六段の調』全曲を弾く。段物演奏の構成力とは。 |
| 12 | 古典研究 11、山田流箏曲流祖山田検校作歌「弓八幡」の試奏。 |
| 13 | 古典研究 12、前期に演奏した3曲の終止部分の研究。 |
| 14 | 研究（中間）発表、および講評と解説。 |

（後期）

| | |
|----|---------------------------------|
| 1 | 古典研究 13、八橋検校作曲『六段の調』の楽曲研究。 |
| 2 | 古典研究 14、吉沢検校作曲『千鳥の曲』『前奏と前歌』の試奏。 |
| 3 | 古典研究 15、同曲「手事と後歌」の試奏。 |
| 4 | 古典研究 16、同曲の楽曲研究。 |
| 5 | 古典研究 17、前期の3曲と『千鳥の曲』の歌唱技法の比較。 |
| 6 | 新曲研究 1、宮城道雄作曲『さくら変奏曲』の試奏と分析。 |
| 7 | 新曲研究 2、同曲を初心者に教えるための研究。 |
| 8 | 新曲研究 3、宮城道雄作曲『春の海』『第一楽章』の試奏と分析。 |
| 9 | 新曲研究 4、同曲「第二楽章」の試奏と分析。 |
| 10 | 新曲研究 5、同曲「第三楽章」の試奏と分析。 |
| 11 | 新曲研究 6、同曲を初心者に教えるための研究。 |
| 12 | 技法研究 1、古典奏法と現代奏法の違いとは。 |
| 13 | 技法研究 2、生田流と山田流の構えの違いとは。 |
| 14 | 技法研究 3、生田流と山田流の奏法の違いとは。 |
| 15 | 研究発表、および講評と解説。 |

特別講義（音楽学）

| | | | |
|------|---------------------|--------|--------|
| 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| 1年次 | | 1 時限/週 | 4 単位/年 |
| 担当教員 | ながい 永井 たまも 玉藻 | | |

授業の到達目標及びテーマ

音楽学研究の様々な文献や論考の講読を通して、研究のテーマと論点、具体的な研究手法と内容、研究の意義について説明できるようになることを目標とする。また、これらの点を各自の研究についても説明できるようにし、研究に必要な基礎的な方法論と論理性を身につけることも目指す。

授業の概要

教員や受講者が紹介する文献や論考を講読し、音楽学研究の方法論や論点を精査する。取り上げる文献は英語もしくは日本語のものを中心とする。また、レポートの執筆や口頭発表を通して、専門的な研究に必要な基礎能力も養う。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

音楽学専攻の授業であるため、普段からの自発的な予習・復習は必須である。また、課題の文献などはあらかじめ精読した上で授業に臨むこと。

学生に対する成績評価の方法・基準

レポートや発表（50%）と、授業および研究に対する姿勢（50%）を総合して評価する。

テキスト

授業時に配布する。

参考書・参考資料等

授業内で適宜紹介する。

授業内容

（前期）

| | |
|----|--------------------------------|
| 1 | オリエンテーション |
| 2 | 音楽学研究の概要①学問の成立背景 |
| 3 | 音楽学研究の概要②歴史的音楽学 |
| 4 | 音楽学研究の概要③体系的音楽学 |
| 5 | 音楽学の現状に関する論考の講読と検討①近代以降の音楽学 |
| 6 | 音楽学の現状に関する論考の講読と検討②20～21世紀の音楽学 |
| 7 | 資料研究①に関する論考の講読と検討：資料研究とは |
| 8 | 資料研究①に関する受講者の考察と検討 |
| 9 | 資料研究②に関する論考の講読と検討：楽譜の校訂について |
| 10 | 資料研究②に関する受講者の考察と検討 |
| 11 | 楽曲分析に関する論考の講読と検討：楽曲分析とは |
| 12 | 楽曲分析に関する論考の講読と検討：楽曲分析の目的と意義 |
| 13 | 楽曲分析に関する論考の講読と検討：作曲家による分析 |
| 14 | 前期授業のまとめ |

（後期）

| | |
|----|------------------------------|
| 1 | 作曲家の伝記に関する論考の講読と検討①作曲家伝 |
| 2 | 作曲家の伝記に関する論考の講読と検討②作曲家に関する情報 |
| 3 | 作曲家の伝記に関する受講者の考察と検討 |
| 4 | 楽譜に関する論考の講読と検討①実用版と原典版 |
| 5 | 楽譜に関する論考の講読と検討②楽譜と演奏の関係 |
| 6 | 楽譜に関する論考の受講者の考察と検討 |
| 7 | 研究における資料の用い方について①アーカイブへのアクセス |
| 8 | 研究における資料の用い方について②資料調査の実践的方法 |
| 9 | 研究における資料の用い方に関する受講者の考察と検討 |
| 10 | 論文執筆の基礎的考察①論文とはなにか |
| 11 | 論文執筆の基礎的考察②論文に不可欠の要素 |
| 12 | 論文執筆の基礎的考察③問いを立てる |
| 13 | 受講者の修士論文に関する発表①テーマ、論点について |
| 14 | 受講者の修士論文に関する発表②方法論について |
| 15 | 総括 |

| | | | | |
|------|-------|-------------------|--------|--------|
| 特別講義 | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 1・2年次 | | 1 時限/週 | 4 単位/年 |
| | 担当教員 | もりた きょうこ 森田 恭子 | | |

授業の到達目標及びテーマ

英語の文献や音楽教育ウェブサイトの講読・閲覧を通して、海外の音楽教育の最新情報にアクセスする力を養うことを目標とする。

授業の概要

前期は、基本的な文献や雑誌記事の講読を通して、音楽教育特有の英語力を伸ばす。後期は、音楽教育関連の学会や団体（主に ISME* や MENC* のウェブサイトが発信する最新情報に精通する力を伸ばす。

*ISME: 世界音楽教育協会、*MENC: 全米音楽教育協会

予習・復習等の内容・それに必要な時間

授業時に提示された課題の翻訳をする。また、その際、関連する国の音楽教育事情にも精通しておく。(5時間)

学生に対する成績評価の方法・基準

課題の翻訳に向けての取組みの姿勢 (50%)
翻訳の適切さ (50%)

テキスト

授業時にプリントを配付、または閲覧ウェブサイトを示す。

参考書・参考資料等

授業時に提示する。

授業内容

(前期)

| | |
|----|-----------------------|
| 1 | オリエンテーション：アメリカの音楽教育事情 |
| 2 | 音楽教育関連雑誌の閲覧・記事の収集 |
| 3 | 音楽教育関連記事の購読① カリキュラム |
| 4 | ①の翻訳及び内容の検討 |
| 5 | 音楽教育関連記事の購読② 音楽教育メソッド |
| 6 | ②の翻訳及び内容の検討 |
| 7 | 音楽教育関連記事の購読③ 合唱指導 |
| 8 | ③の翻訳及び内容の検討 |
| 9 | 音楽教育関連記事の購読④ 器楽指導 |
| 10 | ④の翻訳及び内容の検討 |
| 11 | 音楽教育関連記事の購読⑤ 創作指導 |
| 12 | ⑤の翻訳及び内容の検討 |
| 13 | 音楽教育関連記事の購読⑥ 鑑賞 |
| 14 | ⑥の翻訳及び内容の検討 |

(後期)

| | |
|----|---------------------------|
| 1 | 世界の音楽教育事情 |
| 2 | ウェブサイト閲覧① ニューヨーク・フィルハーモニー |
| 3 | ①の教育活動ページの翻訳と内容の検討 |
| 4 | ウェブサイト閲覧② ISME |
| 5 | ②の団体の性格及び活動のページの翻訳と内容の検討 |
| 6 | ②の国際大会のページの翻訳と内容の検討 |
| 7 | ウェブサイト閲覧③ MENC |
| 8 | ③の団体の性格及び活動のページの翻訳と内容の検討 |
| 9 | ③の全国大会のページの翻訳と内容の検討 |
| 10 | その他の音楽教育団体の検索 |
| 11 | 上記の概要のプレゼンテーション (分担) |
| 12 | 国際学会もしくは大会の検索 |
| 13 | 国際学会もしくは大会要項の見方についての理解 |
| 14 | 国際学会もしくは大会要項の翻訳と内容の検討 |
| 15 | バーチャルな国際学会もしくは大会参加申込み |

修士課程

| | | | | |
|-----|-------|--------------------|--------|--------|
| 指揮法 | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 1・2年次 | | 1 時限/週 | 4 単位/年 |
| | 担当教員 | ときとう やすふみ 時任 康文 | | |

授業の到達目標及びテーマ

指揮するという行為から音楽を研究し、それによって各自の専門分野での楽曲の理解を深め、幅広い視野を持つ音楽家の形成を目標とする。

授業の概要

現実的に合唱や合奏を指揮するための技術をレッスン形式で学び、前期はピアノ曲や合唱を中心に指揮法の基礎を、後期はオーケストラ曲やオペラ等も含めて指揮の実際を研究する。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

課題の楽曲の十分な理解を事前しておくことが大切。しかし短い楽曲中心なので、それほどの長い時間は必要としない。

学生に対する成績評価の方法・基準

評価にあたっては到達目標に基づき、授業内での達成度や態度 (60%)、及び前期、後期の最後に行う本番 (40%) によって評価を決定する。

テキスト

ピアノ曲やオーケストラ曲、オペラ曲を随時使い教材とする。

参考書・参考資料等

なし

授業内容

(前期)

| | |
|----|----------------------------|
| 1 | 履修者の希望や目的を話し合う。指揮法の基礎の実際。 |
| 2 | 夏の思い出を指揮しながら、指揮法の基礎を学ぶ。 |
| 3 | 夏の思い出を教材に音楽表現を学ぶ。 |
| 4 | メンデルスゾーンの無言歌を指揮の練習。 |
| 5 | メンデルスゾーンの無言歌の表現の実際。 |
| 6 | メンデルスゾーンの無言歌の8分の6拍子の練習。 |
| 7 | シューマンの子供の情景を教材に指揮の練習。 |
| 8 | シューマンの子供の情景の表現方法の実際。 |
| 9 | シューマンの子供の情景を使ってフェルマータ等の練習。 |
| 10 | 変拍子のピアノ曲を使って変拍子の練習。 |
| 11 | 変拍子の腕の運動の練習。 |
| 12 | 変拍子の合唱曲の練習。 |
| 13 | 変拍子の合唱曲の表現方法を学ぶ。 |
| 14 | 変拍子の曲を指揮して前期のまとめ。 |

(後期)

| | |
|----|-----------------------------------|
| 1 | オーケストラ曲を使いスコアの読み方を研究する。 |
| 2 | オーケストラ曲の指揮をしながら各楽器の解釈を学ぶ。 |
| 3 | オーケストラ曲の休符の振り方、及びフェルマータの実際。 |
| 4 | カルミナ・ブラーナを教材に変拍子の練習。 |
| 5 | カルミナ・ブラーナの指揮及び表現を研究する。 |
| 6 | カルミナ・ブラーナの復習をして変拍子の強化。 |
| 7 | オペラアリアを教材として声楽専攻生に歌ってもらい指揮する。 |
| 8 | オペラの指揮の基本を学ぶ。 |
| 9 | オペラのレチタティーヴォの実習。 |
| 10 | オペラのコンパニオートの実習。 |
| 11 | ハンガリー舞曲を使い指揮の練習。 |
| 12 | ハンガリー舞曲のテンポの変化の練習。 |
| 13 | ベートーヴェンの交響曲「運命」1楽章冒頭の指揮。 |
| 14 | 運命の第一主題と第二主題の指揮。 |
| 15 | まとめとして運命の冒頭から展開部前までを使いクラス内で本番を行う。 |

| | | | | |
|---------|------|-------------------|-------|-------|
| 音楽理論演習Ⅰ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 1年次 | | 1時限/週 | 2単位/年 |
| | 担当教員 | さやま のりひこ 佐山 紀彦 | | |

授業の到達目標及びテーマ

大学で学んだ和声・対位法・楽式に加えて、音の素材を理解する事で音楽の構築性をより深く学ぶ事がこの講義の意図するところである。様々な楽曲において音の素材による分析ができるようになること、それらを演奏表現に活用できるようになることを到達目標とする。

授業の概要

和声や楽式の分析に加えて、楽曲に使われている音の素材とその用法を分析することで、楽曲の構造が明らかになる。自分が演奏する曲にはどんな音の素材が使われて用いられているか常に考え演奏に生かす姿勢が必要である。授業で取り上げた楽曲については、楽曲分析例を示し理解できない部分を説明する。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

楽曲をピアノ等で弾き分析内容と響きを一致させる(復習)、取り上げる作曲家の代表的な楽曲を調べて聴く(予習)、各自それらに取り込む時間が必要時間となる。

学生に対する成績評価の方法・基準

楽曲分析のレポート(前期レポートと後期レポート(計80%))、平常点(20%)より評価する。

テキスト

テキストは用いない。板書以外に必要なものはその都度配布する。

参考書・参考資料等

授業で取り上げた作曲家達の楽譜及びそれに関連した書籍、CD、DVDなど。

授業内容

(前期)

| | |
|----|------------------|
| 1 | 分析と音の素材 |
| 2 | 音楽史における Schubert |
| 3 | Schubert 和声分析 |
| 4 | Schubert 素材による分析 |
| 5 | Schubert 分析のまとめ |
| 6 | 音楽史における Schumann |
| 7 | Schumann 和声分析 |
| 8 | Schumann 素材による分析 |
| 9 | Schumann 分析のまとめ |
| 10 | 音楽史における Chopin |
| 11 | Chopin 和声分析 |
| 12 | Chopin 素材による分析 |
| 13 | Chopin 分析のまとめ |
| 14 | 前期ロマン派の音楽について |

(後期)

| | |
|----|---------------------|
| 1 | 音楽史における Mozart |
| 2 | Mozart 和音分析 |
| 3 | Mozart 素材による分析 |
| 4 | Mozart 分析のまとめ |
| 5 | 音楽史における Beethoven |
| 6 | Beethoven 和声分析 |
| 7 | Beethoven 素材による分析 |
| 8 | Beethoven 分析のまとめ |
| 9 | 音楽史における Bach |
| 10 | Bach 和声分析 |
| 11 | Bach 素材による分析 |
| 12 | Bach 分析のまとめ |
| 13 | Wagner 和声分析・素材による分析 |
| 14 | Brahms 和声分析・素材による分析 |

| | | | | |
|---------|------|-------------------|-------|-------|
| 音楽理論演習Ⅱ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 2年次 | | 1時限/週 | 2単位/年 |
| | 担当教員 | さやま のりひこ 佐山 紀彦 | | |

授業の到達目標及びテーマ

大学で学んだ和声・対位法・楽式に加えて、音の素材を理解する事で音楽の構築性をより深く学ぶ事がこの講義の意図するところである。様々な楽曲において音の素材による分析ができるようになること、それらを演奏表現に活用できるようになることを到達目標とする。

授業の概要

和声や楽式の分析に加えて、楽曲に使われている音の素材とその用法を分析することで、楽曲の構造が明らかになる。自分が演奏する曲にはどんな音の素材が使われて用いられているか常に考え演奏に生かす姿勢が必要である。授業で取り上げた楽曲については、楽曲分析例を示し理解できない部分を説明する。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

楽曲をピアノ等で弾き分析内容と響きを一致させる(復習)、取り上げる作曲家の代表的な楽曲を調べて聴く(予習)、各自それらに取り込む時間が必要時間となる。

学生に対する成績評価の方法・基準

楽曲分析のレポート(前期レポートと後期レポート(計80%))、平常点(20%)より評価する。

テキスト

テキストは用いない。板書以外に必要なものはその都度配布する。

参考書・参考資料等

授業で取り上げた作曲家達の楽譜及びそれに関連した書籍、CD、DVDなど。

授業内容

(前期)

| | |
|----|------------------|
| 1 | 分析と音の素材 |
| 2 | 音楽史における Schubert |
| 3 | Schubert 和声分析 |
| 4 | Schubert 素材による分析 |
| 5 | Schubert 分析のまとめ |
| 6 | 音楽史における Schumann |
| 7 | Schumann 和声分析 |
| 8 | Schumann 素材による分析 |
| 9 | Schumann 分析のまとめ |
| 10 | 音楽史における Chopin |
| 11 | Chopin 和声分析 |
| 12 | Chopin 素材による分析 |
| 13 | Chopin 分析のまとめ |
| 14 | 前期ロマン派の音楽について |

(後期)

| | |
|----|---------------------|
| 1 | 音楽史における Mozart |
| 2 | Mozart 和音分析 |
| 3 | Mozart 素材による分析 |
| 4 | Mozart 分析のまとめ |
| 5 | 音楽史における Beethoven |
| 6 | Beethoven 和声分析 |
| 7 | Beethoven 素材による分析 |
| 8 | Beethoven 分析のまとめ |
| 9 | 音楽史における Bach |
| 10 | Bach 和声分析 |
| 11 | Bach 素材による分析 |
| 12 | Bach 分析のまとめ |
| 13 | Wagner 和声分析・素材による分析 |
| 14 | Brahms 和声分析・素材による分析 |

| 音楽史特殊研究Ⅰ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
|----------|--------|--------|-------|-------|
| | 1年次 | | 1時限/週 | 4単位/年 |
| 担当教員 | ながい 永井 | たかも 玉藻 | | |

授業の到達目標及びテーマ

作曲家・作品研究に関する様々な角度からの考察をテーマとする。教員が紹介する論考の特色や目的、研究方法などを理解し、自身の研究（特に修士論文の作成）に応用できることを目指す。また、受講者が関心を持つテーマについて、修士課程のレベルにふさわしい論理的な口頭発表が出来ることも目標とする。

授業の概要

作品や作曲家に関する英語および日本語の論考を精読したのち、研究の手法や方向性、問いの設定方法、歴史資料の読み方の手順などを解説する。各論考を概説した後には毎回レポートを提出し、教員による添削を通して、論文で用いる言葉遣いや文章の書き方などに慣れ、自身の言葉で論考に関する考察を行う。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

論考紹介の際は、授業前に最低1時間は予習して内容を把握してこよう。また、レポート執筆に最低3時間は時間を要することを念頭に入れておくこと。

学生に対する成績評価の方法・基準

予習の状況（20%）、レポートの質と提出状況（20%）、授業内発表（30%）、出席状況を含む授業への参加態度、積極性（30%）などを総合して判断する。

テキスト

プリントを配布する。

参考書・参考資料等

授業内で適宜紹介する。

授業内容

（前期）

| | |
|----|------------------------------|
| 1 | オリエンテーション |
| 2 | 音楽研究の様々な種類について |
| 3 | 作品研究の目的と手法 |
| 4 | 論考の紹介（音楽研究における楽曲分析の役割について） |
| 5 | 4.の論考に関する教員からの発題と受講者の考察 |
| 6 | 5.の受講者の考察に対する解説 |
| 7 | 論考の紹介（ドビュッシー：《ペレアスとメリザンド》研究） |
| 8 | 7.の論考に関する教員からの発題と受講者の考察 |
| 9 | 8.の受講者の考察に対する解説 |
| 10 | 論考の紹介（ベルク：《叙情組曲》研究） |
| 11 | 10.の論考に関する教員からの発題と受講者の考察 |
| 12 | 11.の受講者の考察に対する解説 |
| 13 | 受講者による修士論文の内容発表① |
| 14 | 受講者による修士論文の内容発表② |

（後期）

| | |
|----|---------------------------|
| 1 | 作曲家研究の目的と手法 |
| 2 | 実例の紹介（J.S.バッハ伝の変遷について） |
| 3 | 2.の実例に関する教員からの発題と受講者の考察 |
| 4 | 3.の受講者の考察に対する解説 |
| 5 | 実例の紹介（19世紀の作曲家による著作物について） |
| 6 | 5.の実例に関する教員からの発題と受講者の考察 |
| 7 | 6.の受講者の考察に対する解説 |
| 8 | 実例の紹介（ショスタコーヴィチ伝について） |
| 9 | 8.の実例に関する教員からの発題と受講者の考察 |
| 10 | 9.の受講者の考察に対する解説 |
| 11 | 受講者による修士論文の内容発表③ |
| 12 | 受講者による修士論文の内容発表④ |
| 13 | 受講者による修士論文の内容発表⑤ |
| 14 | 受講者による研究発表 |
| 15 | 全体の総括 |

修士課程

| 音楽史特殊研究Ⅱ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
|----------|--------|--------|-------|-------|
| | 2年次 | | 1時限/週 | 4単位/年 |
| 担当教員 | ながい 永井 | たかも 玉藻 | | |

授業の到達目標及びテーマ

作曲家・作品研究に関する様々な角度からの考察をテーマとする。教員が紹介する論考の特色や目的、研究方法などを理解し、自身の研究（特に修士論文の作成）に応用できることを目指す。また、受講者が関心を持つテーマについて、修士課程のレベルにふさわしい論理的な口頭発表が出来ることも目標とする。

授業の概要

作品や作曲家に関する英語および日本語の論考を精読したのち、研究の手法や方向性、問いの設定方法、歴史資料の読み方の手順などを解説する。各論考を概説した後には毎回レポートを提出し、教員による添削を通して、論文で用いる言葉遣いや文章の書き方などに慣れ、自身の言葉で論考に関する考察を行う。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

論考紹介の際は、授業前に最低1時間は予習して内容を把握してこよう。また、レポート執筆に最低3時間は時間を要することを念頭に入れておくこと。

学生に対する成績評価の方法・基準

予習の状況（20%）、レポートの質と提出状況（20%）、授業内発表（30%）、出席状況を含む授業への参加態度、積極性（30%）などを総合して判断する。

テキスト

プリントを配布する。

参考書・参考資料等

授業内で適宜紹介する。

授業内容

（前期）

| | |
|----|------------------------------|
| 1 | オリエンテーション |
| 2 | 音楽研究の様々な種類について |
| 3 | 作品研究の目的と手法 |
| 4 | 論考の紹介（音楽研究における楽曲分析の役割について） |
| 5 | 4.の論考に関する教員からの発題と受講者の考察 |
| 6 | 5.の受講者の考察に対する解説 |
| 7 | 論考の紹介（ドビュッシー：《ペレアスとメリザンド》研究） |
| 8 | 7.の論考に関する教員からの発題と受講者の考察 |
| 9 | 8.の受講者の考察に対する解説 |
| 10 | 論考の紹介（ベルク：《叙情組曲》研究） |
| 11 | 10.の論考に関する教員からの発題と受講者の考察 |
| 12 | 11.の受講者の考察に対する解説 |
| 13 | 受講者による修士論文の内容発表① |
| 14 | 受講者による修士論文の内容発表② |

（後期）

| | |
|----|---------------------------|
| 1 | 作曲家研究の目的と手法 |
| 2 | 実例の紹介（J.S.バッハ伝の変遷について） |
| 3 | 2.の実例に関する教員からの発題と受講者の考察 |
| 4 | 3.の受講者の考察に対する解説 |
| 5 | 実例の紹介（19世紀の作曲家による著作物について） |
| 6 | 5.の実例に関する教員からの発題と受講者の考察 |
| 7 | 6.の受講者の考察に対する解説 |
| 8 | 実例の紹介（ショスタコーヴィチ伝について） |
| 9 | 8.の実例に関する教員からの発題と受講者の考察 |
| 10 | 9.の受講者の考察に対する解説 |
| 11 | 受講者による修士論文の内容発表③ |
| 12 | 受講者による修士論文の内容発表④ |
| 13 | 受講者による修士論文の内容発表⑤ |
| 14 | 受講者による研究発表 |
| 15 | 全体の総括 |

| | | | | |
|-----------|------|------------------|-------|-------|
| 楽書講読（英語）Ⅰ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 1年次 | A | 1時限/週 | 4単位/年 |
| | 担当教員 | ながおか めぐみ 長岡 英 | | |

授業の到達目標及びテーマ

音楽に関する英文を読み、英語に慣れる。研究に必要な英語の文献や、留学・コンクールの要項などの様々な英語の書類を理解するために必要な読解力をつけることが、到達目標である。

授業の概要

前期は、英文法の基礎を復習しながら音楽や作曲家についての英文を輪読し、段落の構造や専門用語に慣れる。後期は、スコアやCDの楽曲解説、辞書項目など、より複雑な英文を取り上げる（受講生のニーズに合わせて、内容を変更する場合も有り得る）。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

予習：単語を調べ、全部の日本語訳を書いてくること。復習：正しい日本語訳に書き直すこと（合計で120～180分）。

学生に対する成績評価の方法・基準

前記試験、後記試験、提出物（添削し、後日解説を行う）など（80%）平常点（20%）。

テキスト

Kamien: *MUSIC: An Appreciation* (McGraw-Hill, 1996) などのプリントを配布する。

参考書・参考資料等

必要に応じて授業時に紹介する。

授業内容

（前期）

| | |
|----|-------------------------------------|
| 1 | オリエンテーション |
| 2 | 音楽の基礎（Sound など） |
| 3 | 音楽の基礎（Rhythm など） |
| 4 | 音楽の基礎（Notation など） |
| 5 | 音楽の基礎（Sonata Form など） |
| 6 | 音楽の歴史（The Classical Style など） |
| 7 | 音楽の歴史（Classical Forms など） |
| 8 | 音楽の歴史（The Classical Symphony など） |
| 9 | 音楽の歴史（The Classical Concerto など） |
| 10 | 音楽の歴史（Classical Chamber Music など） |
| 11 | 作曲家の伝記（Josef Haydn, p. 234 など） |
| 12 | 作曲家の伝記（Josef Haydn, p. 235 など） |
| 13 | 作曲家の伝記（Josef Haydn, p. 236 など） |
| 14 | 作曲家の伝記（Josef Haydn, p. 237 など）、前期試験 |

（後期）

| | |
|----|--|
| 1 | 前期試験の講評、音楽事典の項目を読む（Gregorian Chant など） |
| 2 | 音楽事典の項目を読む（Madrigal など） |
| 3 | 音楽事典の項目を読む（Chorale など） |
| 4 | 音楽事典の項目を読む（Lully など） |
| 5 | 音楽事典の項目を読む（Sinfonia など） |
| 6 | スコアの解説を読む（ブラームス：交響曲 4 番など） |
| 7 | スコアの解説を読む（ブラームス：交響曲 4 番第 1 楽章など） |
| 8 | スコアの解説を読む（ブラームス：交響曲 4 番第 2 楽章など） |
| 9 | スコアの解説を読む（ブラームス：交響曲 4 番第 3 楽章など） |
| 10 | スコアの解説を読む（ブラームス：交響曲 4 番第 4 楽章など） |
| 11 | CD 解説を読む（ストラヴィンスキー：《ペトルーシュカ》第 1 部など） |
| 12 | CD 解説を読む（ストラヴィンスキー：《ペトルーシュカ》第 2 部など） |
| 13 | CD 解説を読む（ストラヴィンスキー：《ペトルーシュカ》第 3 部など） |
| 14 | CD 解説を読む（ストラヴィンスキー：《ペトルーシュカ》第 4 部など） |
| 15 | まとめ |

| | | | | |
|-----------|------|------------------|-------|-------|
| 楽書講読（英語）Ⅱ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 2年次 | A | 1時限/週 | 4単位/年 |
| | 担当教員 | ながおか めぐみ 長岡 英 | | |

授業の到達目標及びテーマ

音楽に関する英文を読み、英語に慣れる。研究に必要な英語の文献や、留学・コンクールの要項などの様々な英語の書類を理解するために必要な読解力をつけることが、到達目標である。

授業の概要

前期は、英文法の基礎を復習しながら音楽や作曲家についての英文を輪読し、段落の構造や専門用語に慣れる。後期は、スコアやCDの楽曲解説、辞書項目など、より複雑な英文を取り上げる（受講生のニーズに合わせて、内容を変更する場合も有り得る）。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

予習：単語を調べ、全部の日本語訳を書いてくること。復習：正しい日本語訳に書き直すこと（合計で120～180分）。

学生に対する成績評価の方法・基準

前記試験、後記試験、提出物（添削し、後日解説を行う）など（80%）平常点（20%）。

テキスト

Kamien: *MUSIC: An Appreciation* (McGraw-Hill, 1996) などのプリントを配布する。

参考書・参考資料等

必要に応じて授業時に紹介する。

授業内容

（前期）

| | |
|----|-------------------------------------|
| 1 | オリエンテーション |
| 2 | 音楽の基礎（Sound など） |
| 3 | 音楽の基礎（Rhythm など） |
| 4 | 音楽の基礎（Notation など） |
| 5 | 音楽の基礎（Sonata Form など） |
| 6 | 音楽の歴史（The Classical Style など） |
| 7 | 音楽の歴史（Classical Forms など） |
| 8 | 音楽の歴史（The Classical Symphony など） |
| 9 | 音楽の歴史（The Classical Concerto など） |
| 10 | 音楽の歴史（Classical Chamber Music など） |
| 11 | 作曲家の伝記（Josef Haydn, p. 234 など） |
| 12 | 作曲家の伝記（Josef Haydn, p. 235 など） |
| 13 | 作曲家の伝記（Josef Haydn, p. 236 など） |
| 14 | 作曲家の伝記（Josef Haydn, p. 237 など）、前期試験 |

（後期）

| | |
|----|--|
| 1 | 前期試験の講評、音楽事典の項目を読む（Gregorian Chant など） |
| 2 | 音楽事典の項目を読む（Madrigal など） |
| 3 | 音楽事典の項目を読む（Chorale など） |
| 4 | 音楽事典の項目を読む（Lully など） |
| 5 | 音楽事典の項目を読む（Sinfonia など） |
| 6 | スコアの解説を読む（ブラームス：交響曲 4 番など） |
| 7 | スコアの解説を読む（ブラームス：交響曲 4 番第 1 楽章など） |
| 8 | スコアの解説を読む（ブラームス：交響曲 4 番第 2 楽章など） |
| 9 | スコアの解説を読む（ブラームス：交響曲 4 番第 3 楽章など） |
| 10 | スコアの解説を読む（ブラームス：交響曲 4 番第 4 楽章など） |
| 11 | CD 解説を読む（ストラヴィンスキー：《ペトルーシュカ》第 1 部など） |
| 12 | CD 解説を読む（ストラヴィンスキー：《ペトルーシュカ》第 2 部など） |
| 13 | CD 解説を読む（ストラヴィンスキー：《ペトルーシュカ》第 3 部など） |
| 14 | CD 解説を読む（ストラヴィンスキー：《ペトルーシュカ》第 4 部など） |
| 15 | まとめ |

| | | | | |
|-----------|------|--------------------|-------|-------|
| 楽書講読（英語）Ⅰ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 1年次 | B | 1時限/週 | 4単位/年 |
| | 担当教員 | いしかわ りょうこ 石川 亮子 | | |

授業の到達目標及びテーマ

音楽について書かれた英語の文章を読むことで、音楽に関する専門的な語彙力や文章の理解力を深めながら、主に読むことを中心に、音楽家として活躍していくために必要な語学力を養うことを目標とする。

授業の概要

前期では英語による音楽用語の基礎知識を身に付けると同時に、主に事典項目を読み進めながら文法事項を丁寧に復習する。後期では様々なタイプの文章に触れることで、英語の文章を読みこなすための総合的な力の向上を目指す。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

辞書を丁寧に調べ、必ず予習をして毎回の授業に参加すること。授業後は、新しく学んだ語彙を単語帳にまとめ、訳文を作成し直ししておくこと。各1時間。

学生に対する成績評価の方法・基準

筆記による期末試験（前期・後期）による（80%）。また小テストや授業への参加態度も加味する（20%）。

テキスト

特に指定せず、プリントを配付する。

参考書・参考資料等

三ヶ尻正『改装版 音楽家の英語入門』（ハンナ 2012年）

授業内容

| | |
|------|-----------------------|
| 〔前期〕 | |
| 1 | 前期オリエンテーション |
| 2 | 英語で読む楽典①—譜表と音名 |
| 3 | 英語で読む楽典②—音符と休符、拍子 |
| 4 | 英語で読む楽典③—楽語 |
| 5 | 英語で読む楽典④—音程 |
| 6 | 英語で読む楽典⑤—長音階と短音階 |
| 7 | 英語で読む楽典⑥—和音 |
| 8 | 英語で読む楽典⑦—楽式&小テスト |
| 9 | 音楽事典の項目を読む①—「オーケストラ」 |
| 10 | 音楽事典の項目を読む②—「モーツァルト」 |
| 11 | 音楽事典の項目を読む③—「ベートーヴェン」 |
| 12 | 音楽事典の項目を読む④—「リスト」 |
| 13 | 音楽事典の項目を読む⑤—「新古典主義」 |
| 14 | 前期の総括 |

| | |
|------|----------------------------|
| 〔後期〕 | |
| 1 | 後期オリエンテーション&前期試験の返却と解説 |
| 2 | 音楽史を読む①—単語を中心に |
| 3 | 音楽史を読む②—文法を中心に |
| 4 | 音楽史を読む③—よりよい翻訳を目指す |
| 5 | 楽譜の序文を読む①—単語と文法を中心に |
| 6 | 楽譜の序文を読む②—よりよい翻訳を目指す |
| 7 | 音楽家の文章を読む①—単語と文法を中心に |
| 8 | 音楽家の文章を読む②—よりよい翻訳を目指す&小テスト |
| 9 | 楽曲分析を読む①—単語を中心に |
| 10 | 楽曲分析を読む②—文法を中心に |
| 11 | 楽曲分析を読む③—よりよい翻訳を目指す |
| 12 | 音楽家の評伝を読む①—単語を中心に |
| 13 | 音楽家の評伝を読む②—文法を中心に |
| 14 | 音楽家の評伝を読む③—よりよい翻訳を目指す |
| 15 | 後期の総括 |

| | | | | |
|-----------|------|--------------------|-------|-------|
| 楽書講読（英語）Ⅱ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 2年次 | B | 1時限/週 | 4単位/年 |
| | 担当教員 | いしかわ りょうこ 石川 亮子 | | |

授業の到達目標及びテーマ

音楽について書かれた英語の文章を読むことで、音楽に関する専門的な語彙力や文章の理解力を深めながら、主に読むことを中心に、音楽家として活躍していくために必要な語学力を養うことを目標とする。

授業の概要

前期では英語による音楽用語の基礎知識を身に付けると同時に、主に事典項目を読み進めながら文法事項を丁寧に復習する。後期では様々なタイプの文章に触れることで、英語の文章を読みこなすための総合的な力の向上を目指す。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

辞書を丁寧に調べ、必ず予習をして毎回の授業に参加すること。授業後は、新しく学んだ語彙を単語帳にまとめ、訳文を作成し直ししておくこと。各1時間。

学生に対する成績評価の方法・基準

筆記による期末試験（前期・後期）による（80%）。また小テストや授業への参加態度も加味する（20%）。

テキスト

特に指定せず、プリントを配付する。

参考書・参考資料等

三ヶ尻正『改装版 音楽家の英語入門』（ハンナ 2012年）

授業内容

| | |
|------|-----------------------|
| 〔前期〕 | |
| 1 | 前期オリエンテーション |
| 2 | 英語で読む楽典①—譜表と音名 |
| 3 | 英語で読む楽典②—音符と休符、拍子 |
| 4 | 英語で読む楽典③—楽語 |
| 5 | 英語で読む楽典④—音程 |
| 6 | 英語で読む楽典⑤—長音階と短音階 |
| 7 | 英語で読む楽典⑥—和音 |
| 8 | 英語で読む楽典⑦—楽式&小テスト |
| 9 | 音楽事典の項目を読む①—「オーケストラ」 |
| 10 | 音楽事典の項目を読む②—「モーツァルト」 |
| 11 | 音楽事典の項目を読む③—「ベートーヴェン」 |
| 12 | 音楽事典の項目を読む④—「リスト」 |
| 13 | 音楽事典の項目を読む⑤—「新古典主義」 |
| 14 | 前期の総括 |

| | |
|------|----------------------------|
| 〔後期〕 | |
| 1 | 後期オリエンテーション&前期試験の返却と解説 |
| 2 | 音楽史を読む①—単語を中心に |
| 3 | 音楽史を読む②—文法を中心に |
| 4 | 音楽史を読む③—よりよい翻訳を目指す |
| 5 | 楽譜の序文を読む①—単語と文法を中心に |
| 6 | 楽譜の序文を読む②—よりよい翻訳を目指す |
| 7 | 音楽家の文章を読む①—単語と文法を中心に |
| 8 | 音楽家の文章を読む②—よりよい翻訳を目指す&小テスト |
| 9 | 楽曲分析を読む①—単語を中心に |
| 10 | 楽曲分析を読む②—文法を中心に |
| 11 | 楽曲分析を読む③—よりよい翻訳を目指す |
| 12 | 音楽家の評伝を読む①—単語を中心に |
| 13 | 音楽家の評伝を読む②—文法を中心に |
| 14 | 音楽家の評伝を読む③—よりよい翻訳を目指す |
| 15 | 後期の総括 |

| | | | | |
|-------------|------|---------------------|-------|-------|
| 楽書講読（ドイツ語）Ⅰ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 1年次 | | 1時限/週 | 4単位/年 |
| | 担当教員 | こしかげざわ まい 越懸澤 麻衣 | | |

授業の到達目標及びテーマ

音楽について書かれたドイツ語の文章を読むことによって読解力を養うと共に、ドイツ語の音楽用語およびドイツ語の文章に特徴的な表現に慣れることを目標とする。また、そのことによって演奏する際や修士論文を執筆する際に、少しでもドイツ語文献を利用できるようになることを目指す。

授業の概要

音楽について書かれたさまざまなタイプの文章を読み、内容を理解し、日本語の訳文を作成する。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

必ず辞書で単語を調べて授業に参加すること。授業後は新たに学んだ語彙を整理し、訳文を作成すること。各1時間。

学生に対する成績評価の方法・基準

試験成績（70%）、平常点（30%）

テキスト

教材は授業時にプリントを配布する。

参考書・参考資料等

独和辞典、ドイツ語の文法書

授業内容

（前期）

| | |
|----|---------------------|
| 1 | オリエンテーション |
| 2 | ドイツ語で読む楽典①ー譜表と音名 |
| 3 | ドイツ語で読む楽典②ー音符、休符 |
| 4 | ドイツ語で読む楽典③ー楽語 |
| 5 | ドイツ語で読む楽典④ー音程 |
| 6 | ドイツ語で読む楽典⑤ー和声 |
| 7 | CD解説を読む①ーバッハ |
| 8 | CD解説を読む②ーモーツァルト |
| 9 | CD解説を読む③ーベートーヴェン |
| 10 | CD解説を読む④ーシューベルト |
| 11 | 楽譜の序文を読む①ーシューマン |
| 12 | 楽譜の序文を読む②ーマーラー |
| 13 | 楽譜の序文を読む③ーR. シュトラウス |
| 14 | 楽譜の序文を読む④ーシェーンベルク |

（後期）

| | |
|----|--------------------------|
| 1 | 音楽事典の項目を読む①ー全体の意味を把握する |
| 2 | 音楽事典の項目を読む②ー文法の留意点を確認する |
| 3 | 音楽事典の項目を読む③ーよりよい翻訳を目指す |
| 4 | 音楽家自身の文章を読む①ー全体の意味を把握する |
| 5 | 音楽家自身の文章を読む②ー文法の留意点を確認する |
| 6 | 音楽家自身の文章を読む③ーよりよい翻訳を目指す |
| 7 | 音楽家の評伝を読む①ー全体の意味を把握する |
| 8 | 音楽家の評伝を読む②ー文法の留意点を確認する |
| 9 | 音楽家の評伝を読む③ーよりよい翻訳を目指す |
| 10 | 楽曲分析を読む①ー全体の意味を把握する |
| 11 | 楽曲分析を読む②ー文法の留意点を確認する |
| 12 | 楽曲分析を読む③ーよりよい翻訳を目指す |
| 13 | 詩とその作曲①ー全体の意味を把握する |
| 14 | 詩とその作曲②ー文法の留意点を確認する |
| 15 | 詩とその作曲③ーよりよい翻訳を目指す |

| | | | | |
|-------------|------|---------------------|-------|-------|
| 楽書講読（ドイツ語）Ⅱ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 2年次 | | 1時限/週 | 4単位/年 |
| | 担当教員 | こしかげざわ まい 越懸澤 麻衣 | | |

授業の到達目標及びテーマ

音楽について書かれたドイツ語の文章を読むことによって読解力を養うと共に、ドイツ語の音楽用語およびドイツ語の文章に特徴的な表現に慣れることを目標とする。また、そのことによって演奏する際や修士論文を執筆する際に、少しでもドイツ語文献を利用できるようになることを目指す。

授業の概要

音楽について書かれたさまざまなタイプの文章を読み、内容を理解し、日本語の訳文を作成する。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

必ず辞書で単語を調べて授業に参加すること。授業後は新たに学んだ語彙を整理し、訳文を作成すること。各1時間。

学生に対する成績評価の方法・基準

試験成績（70%）、平常点（30%）

テキスト

教材は授業時にプリントを配布する。

参考書・参考資料等

独和辞典、ドイツ語の文法書

授業内容

（前期）

| | |
|----|---------------------|
| 1 | オリエンテーション |
| 2 | ドイツ語で読む楽典①ー譜表と音名 |
| 3 | ドイツ語で読む楽典②ー音符、休符 |
| 4 | ドイツ語で読む楽典③ー楽語 |
| 5 | ドイツ語で読む楽典④ー音程 |
| 6 | ドイツ語で読む楽典⑤ー和声 |
| 7 | CD解説を読む①ーバッハ |
| 8 | CD解説を読む②ーモーツァルト |
| 9 | CD解説を読む③ーベートーヴェン |
| 10 | CD解説を読む④ーシューベルト |
| 11 | 楽譜の序文を読む①ーシューマン |
| 12 | 楽譜の序文を読む②ーマーラー |
| 13 | 楽譜の序文を読む③ーR. シュトラウス |
| 14 | 楽譜の序文を読む④ーシェーンベルク |

（後期）

| | |
|----|--------------------------|
| 1 | 音楽事典の項目を読む①ー全体の意味を把握する |
| 2 | 音楽事典の項目を読む②ー文法の留意点を確認する |
| 3 | 音楽事典の項目を読む③ーよりよい翻訳を目指す |
| 4 | 音楽家自身の文章を読む①ー全体の意味を把握する |
| 5 | 音楽家自身の文章を読む②ー文法の留意点を確認する |
| 6 | 音楽家自身の文章を読む③ーよりよい翻訳を目指す |
| 7 | 音楽家の評伝を読む①ー全体の意味を把握する |
| 8 | 音楽家の評伝を読む②ー文法の留意点を確認する |
| 9 | 音楽家の評伝を読む③ーよりよい翻訳を目指す |
| 10 | 楽曲分析を読む①ー全体の意味を把握する |
| 11 | 楽曲分析を読む②ー文法の留意点を確認する |
| 12 | 楽曲分析を読む③ーよりよい翻訳を目指す |
| 13 | 詩とその作曲①ー全体の意味を把握する |
| 14 | 詩とその作曲②ー文法の留意点を確認する |
| 15 | 詩とその作曲③ーよりよい翻訳を目指す |

| | | | | |
|--------------|------|------------------|-------|-------|
| 楽書講読（イタリア語）Ⅰ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 1年次 | | 1時限/週 | 4単位/年 |
| | 担当教員 | とよき やよい 鳥木 弥生 | | |

授業の到達目標及びテーマ

イタリア語の基本的な文法、基礎的な表現、語彙を確認しながら、音楽に関連する様々な文章を読み、理解し、相応しい日本語の文章へ訳する力をつけることを目標とする。また、修士論文作成のための資料集めなどに活かせるよう、イタリア語でのコミュニケーション能力の向上を図る。

授業の概要

イタリア語で書かれた文法書を用い、各々のイタリア語履修歴、能力に応じて必要な知識を身につける。イタリア語の文章の流れをより感じ、理解しやすくするためにイタリア語の聞き取り、読みも積極的に行う。また、論文の題材となる詩や文献なども適切に訳せるよう、日本語の力も合わせて養う。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

予習:配布された資料について、辞書等を使い調べる(30分程度)。
復習:プリントによる課題、文法、イタリア語文章の和訳など(45分程度)。

学生に対する成績評価の方法・基準

課題や授業中の受け答えにより、イタリア語の理解度、知識、文章力などを評価するとともに、積極的な授業への参加など、平常点も加味する。

テキスト

授業時にプリント配布。

参考書・参考資料等

伊和・和伊辞典（電子辞書も可）

授業内容

〔前期〕

| | |
|----|--------------------------|
| 1 | オリエンテーション |
| 2 | 基本的な文法、語彙の確認 |
| 3 | オペラのストーリーを読む① |
| 4 | オペラのストーリーを読む② |
| 5 | オペラのストーリーを読む③ |
| 6 | オペラのストーリーを読む④ |
| 7 | 音楽家の履歴書を読む① |
| 8 | 音楽家の履歴書を読む② |
| 9 | 音楽家の履歴書を読む③ |
| 10 | 音楽家の履歴書を読む④ |
| 11 | 映像と文章で音楽家の人生を知る① |
| 12 | 映像と文章で音楽家の人生を知る② |
| 13 | 映像と文章で音楽家の人生を知る③ |
| 14 | 前期まとめ・イタリア語で自分の意見を書く、話す① |

〔後期〕

| | |
|----|----------------------------|
| 1 | 前期の復習・イタリア語で自分の意見を書く、話す② |
| 2 | 映像と文章で音楽家の人生を知る④ |
| 3 | 映像と文章で音楽家の人生を知る⑤ |
| 4 | 映像と文章で音楽家の人生を知る⑥ |
| 5 | 詩を読む① |
| 6 | 詩を読む② |
| 7 | 詩を読む③ |
| 8 | 音楽家の評伝を読む① |
| 9 | 音楽家の評伝を読む② |
| 10 | 音楽家の評伝を読む③ |
| 11 | 音楽家の評伝を読む④ |
| 12 | 自分のプロフィールを書く① |
| 13 | 自分のプロフィールを書く② |
| 14 | イタリア語文法・語彙力・表現力など、習得度のチェック |
| 15 | 後期まとめ・イタリア語で自分の意見を書く、話す③ |

| | | | | |
|--------------|------|------------------|-------|-------|
| 楽書講読（イタリア語）Ⅱ | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 2年次 | | 1時限/週 | 4単位/年 |
| | 担当教員 | とよき やよい 鳥木 弥生 | | |

授業の到達目標及びテーマ

イタリア語の基本的な文法、基礎的な表現、語彙を確認しながら、音楽に関連する様々な文章を読み、理解し、相応しい日本語の文章へ訳する力をつけることを目標とする。また、修士論文作成のための資料集めなどに活かせるよう、イタリア語でのコミュニケーション能力の向上を図る。

授業の概要

イタリア語で書かれた文法書を用い、各々のイタリア語履修歴、能力に応じて必要な知識を身につける。イタリア語の文章の流れをより感じ、理解しやすくするためにイタリア語の聞き取り、読みも積極的に行う。また、論文の題材となる詩や文献なども適切に訳せるよう、日本語の力も合わせて養う。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

予習:配布された資料について、辞書等を使い調べる(30分程度)。
復習:プリントによる課題、文法、イタリア語文章の和訳など(45分程度)。

学生に対する成績評価の方法・基準

課題や授業中の受け答えにより、イタリア語の理解度、知識、文章力などを評価するとともに、積極的な授業への参加など、平常点も加味する。

テキスト

授業時にプリント配布。

参考書・参考資料等

伊和・和伊辞典（電子辞書も可）

授業内容

〔前期〕

| | |
|----|--------------------------|
| 1 | オリエンテーション |
| 2 | 基本的な文法、語彙の確認 |
| 3 | オペラのストーリーを読む① |
| 4 | オペラのストーリーを読む② |
| 5 | オペラのストーリーを読む③ |
| 6 | オペラのストーリーを読む④ |
| 7 | 音楽家の履歴書を読む① |
| 8 | 音楽家の履歴書を読む② |
| 9 | 音楽家の履歴書を読む③ |
| 10 | 音楽家の履歴書を読む④ |
| 11 | 映像と文章で音楽家の人生を知る① |
| 12 | 映像と文章で音楽家の人生を知る② |
| 13 | 映像と文章で音楽家の人生を知る③ |
| 14 | 前期まとめ・イタリア語で自分の意見を書く、話す① |

〔後期〕

| | |
|----|----------------------------|
| 1 | 前期の復習・イタリア語で自分の意見を書く、話す② |
| 2 | 映像と文章で音楽家の人生を知る④ |
| 3 | 映像と文章で音楽家の人生を知る⑤ |
| 4 | 映像と文章で音楽家の人生を知る⑥ |
| 5 | 詩を読む① |
| 6 | 詩を読む② |
| 7 | 詩を読む③ |
| 8 | 音楽家の評伝を読む① |
| 9 | 音楽家の評伝を読む② |
| 10 | 音楽家の評伝を読む③ |
| 11 | 音楽家の評伝を読む④ |
| 12 | 自分のプロフィールを書く① |
| 13 | 自分のプロフィールを書く② |
| 14 | イタリア語文法・語彙力・表現力など、習得度のチェック |
| 15 | 後期まとめ・イタリア語で自分の意見を書く、話す③ |

| | | | | |
|---------------|-------|---------------|--------|--------|
| 通奏低音研究 | 開講年次 | 組 | 時限数 | 単位数 |
| | 1・2年次 | | 1 時限/週 | 4 単位/年 |
| | 担当教員 | いしまる 石丸 由佳 | | |

修士課程

授業の到達目標及びテーマ

簡単な和音を鍵盤上で初見で弾ける学生を対象とする。通奏低音の教則本を使い数字の意味を学んでいくとともに、通奏低音の意義を理解する。通奏低音のある楽曲に親しみ、コンティヌオパートの役割とそれがもたらす音楽的表現について学ぶ。

授業の概要

通奏低音の教則本を使い数字の意味を学んでいくとともに、通奏低音の意義を理解する。バッハなどの通奏低音のある楽曲に親しみ、コンティヌオパートの役割とそれがもたらす音楽的表現について学ぶ。授業内で課題を実施した場合、毎回解説を行う。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

新しく学んだ事を、可能であれば楽器に触れながら復習する。その際疑問に思ったことを予習としてまとめておく。1日30分程度。

学生に対する成績評価の方法・基準

授業内課題と試験による。

テキスト

特に指定しない

参考書・参考資料等

必要があれば随時指定する

授業内容

〔前期〕

| | |
|----|---------------|
| 1 | オリエンテーション |
| 2 | 通奏低音の意義 |
| 3 | 数字や記号の意味 |
| 4 | 通奏低音作品の鑑賞 |
| 5 | 普通和音（基本位置） |
| 6 | 6の和音 |
| 7 | 56の和音 |
| 8 | 7の和音 |
| 9 | 繋留 |
| 10 | 各種のカデンツ |
| 11 | アンサンブルの中の通奏低音 |
| 12 | 様々なアンサンブル作品 |
| 13 | 課題のリアライゼーション |
| 14 | 前期試験 |

〔後期〕

| | |
|----|--------------|
| 1 | 前期おさらい |
| 2 | 経過音 |
| 3 | 長・短9度、減7度 |
| 4 | アンサンブル実践 |
| 5 | アンサンブル実践 |
| 6 | 低音中の休符 |
| 7 | コラル課題 |
| 8 | レチタティーヴォ |
| 9 | 外声を与えられた課題 |
| 10 | 低音のみ与えられた課題 |
| 11 | 名曲の中の通奏低音 前編 |
| 12 | 名曲の中の通奏低音 後編 |
| 13 | 即興的要素 |
| 14 | リアライゼーション実践 |
| 15 | 試験 |

2

大学院音楽研究科
博士後期課程

2019年度 大学院博士後期課程 学事予定

| 月日(曜日) | | 学事 | 時間・場所・他 |
|------------------------|-------------------------|--------------------------------------|----------------------------|
| 3月 | 30日(土) | 1年次～在学延長者 学務課ガイダンス | 10時00分～11時00分[S307] |
| 4月 | 1日(月) | 入学式 | 10時30分～ [ペーターヴェンホール] |
| | | 1年次～在学延長者 研究指導教員によるガイダンス | 14時00分～15時00分 [S307] |
| | 2日(火) | 健康診断 | (学生部掲示板で確認)[ウインドアンサンブルホール] |
| | 3日(水) | レッスン時間割編成(ピアノ以外) | 9時30分～11時00分 [学務課掲示板で確認] |
| | | レッスン時間割編成(ピアノ) | 12時30分～14時00分 [学務課掲示板で確認] |
| | 8日(月) | 1年次～在学延長者 作曲ガイダンス | 15時00分～16時00分 [S308] |
| | 25日(木) | 前期授業科目・演奏法特別研究開始日 | |
| 27(土) ∩ 5月6日(月) | 履修届・博士論文指導教員提出日 | 8時30分～16時00分 | |
| 27(土) ∩ 5月6日(月) | 天皇即位のため休校 | | |
| 6月 | 5日(水) | 第1回研究指導記録簿提出日(教員) | 4月8日～5月31日実施分 |
| 7月 | 12日(金) | ウインドアンサンブル演奏会 | 18時30分～ [東京オペラシティ] |
| | 14日(日) ∩ 16日(火) | ウインドアンサンブル演奏旅行 | 15日 [小松市:こまつ芸術劇場] |
| | 15日(月・祝) | 海の日(月曜日の授業科目・演奏法特別研究実施日) | |
| | 22日(月) | 前期授業科目・演奏法特別研究終了日 | |
| | 23日(火) ∩ 9月19日(木) | 夏期休暇期間 | |
| | 9月 | 13日(金) ∩ 15日(日) | 管弦楽団演奏旅行 |
| 20日(金) | | 管弦楽団演奏会 | 19時00分～ [東京芸術劇場] |
| 23日(月・祝) | | 後期授業科目・演奏法特別研究開始日 | |
| | | 秋分の日 振替休日(月曜日の授業科目・演奏法特別研究実施日) | |
| 25日(水) | 研究活動計画報告書提出日 | 8時30分～16時00分 | |
| 10月 | 1日(火) | (2019年度学位審査) 演奏審査申請日 | 12時30分～16時50分 |
| | 14日(月・祝) | 体育の日(月曜日の授業科目・演奏法特別研究実施日) | |
| | 22日(火) | 即位礼正殿の儀のため休校 | |
| | 25日(金) | ミューズフェスティバル前日祭 | 授業科目・演奏法特別研究取り止め |
| | 26日(土) ∩ 27日(日) | ミューズフェスティバル本祭 | |
| | 28日(月) | ミューズフェスティバル後片付け | |
| 11月 | 4日(月・振) | 振替休日(月曜日の授業科目・演奏法特別研究実施日) | |
| | 5日(水) | 第2回研究指導記録簿提出日(教員) | 6月1日～10月31日実施分 |
| 12月 | 2日(月) | (2019年度学位審査) 作曲作品審査申請日 | 12時30分～16時50分 |
| | 4日(水) | 管弦楽団合唱団演奏会 | 19時00分～ [東京芸術劇場] |
| | 12日(木) | ウインドアンサンブル演奏会 | 18時30分～ [東京芸術劇場] |
| | 21日(土) | 授業科目・演奏法特別研究終了日(月曜日の授業科目・演奏法特別研究実施日) | |
| | 22日(日) ∩ 1月5日(日) | 冬期休暇期間 | |
| | 1月 | 6日(月) | 後期授業科目・演奏法特別研究再開日 |
| 10日(金) | | (2019年度学位審査) 博士論文予備審査依頼日 | 12時30分～16時50分 |
| 20日(月) | | 後期授業科目・演奏法特別研究終了日 | |
| 27日(月) ∩ 2月5日(水) | | 演奏法特別研究Ⅱ試験期間 | (日曜日を除く) |
| 2月 | | 5日(水) | 第3回研究指導記録簿提出日(教員) |
| 3月 | 30日(月) | 年度末論文提出 | 8時30分～14時00分 |

注1. 予定は追加・変更される場合があるので、掲示で確認してください。

注2. []内は場所を示しています。

注3. 時間・場所等が空欄の学事は、掲示で確認してください。

注4. 研究領域研究指導・博士論文指導は、上記学事予定表に示された授業実施日に学生が担当教員と調整して指導日を決めてください。

注5. 研究演奏会の詳細は掲示で通知します。

| 作品研究 | 担当教員 | 時間数 | 単位数 |
|------|-------------------|--------|--------|
| | のさき ゆきお 野崎 勇喜夫 | 1 時限/週 | 2 単位/年 |

授業の到達目標及びテーマ

音楽作品における音組織の根源的探求の行き着くところは、ヘミオラ/hemiora とトリトース/tritonus の音韻的關係を解明することである。特に 19 世紀から 20 世紀中期の音楽史上で活躍する作曲家の作品をこの視点で分析することで、音楽の表現手法の可能性について探り、認識を高めることを目標とする。

授業の概要

20 世紀中期以降の作曲家の諸作品を時代に沿って取り上げていく。現代音楽作品を通してその歴史的、地域的価値観がどのように反映されているか、を自作品の表現方法などにも視点を広げながら進めていく。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

20 世紀の音楽を聴き、楽譜を観察する。それぞれの作曲家の記譜法、作曲技法などをもとに、その表現や方向性を考える。必要時間は定めない。

学生に対する成績評価の方法・基準

年間 4 回のレポート提出 (50%) と授業時の分析研究状況 (50%) によって総合的に評価する。

テキスト

授業毎に資料や楽譜を配布する。

参考書・参考資料等

取り上げる作曲家の楽譜、音源、著述など。

授業内容

(前期)

| | |
|----|--------------------------|
| 1 | 20 世紀後半の作曲作品研究 (1) 50 年代 |
| 2 | メシアン |
| 3 | ブーレーズ |
| 4 | シュトックハウゼン |
| 5 | ノーノ |
| 6 | ケージ |
| 7 | フェルドマン |
| 8 | 20 世紀後半の作曲作品研究 (2) 60 年代 |
| 9 | リゲティ |
| 10 | ペンデレツキ |
| 11 | クセナキス |
| 12 | ツィマーマン |
| 13 | ヘンツェ |
| 14 | ライヒ |

(後期)

| | |
|----|----------------------------|
| 1 | 20 世紀後半の作曲作品研究 (3) 70 年代 |
| 2 | ラッペンマン |
| 3 | ファニホウ (1) |
| 4 | ファニホウ (2) |
| 5 | ミュライユ |
| 6 | シュニトケ |
| 7 | リーム |
| 8 | 20 世紀後半の作曲作品研究 (4) 80 年代 |
| 9 | マーンコフ |
| 10 | サーリアホ |
| 11 | ベンジャミン |
| 12 | アダムス |
| 13 | 20 世紀後半の作曲作品研究 (5) 90 年代以降 |
| 14 | さらなる多様性の時代 |
| 15 | 総括 |

| 音楽学総合研究 | 担当教員 | 時間数 | 単位数 |
|---------|-------------------|--------|--------|
| | いなだ たかゆき 稲田 隆之 | 1 時限/週 | 2 単位/年 |

授業の到達目標及びテーマ

受講者の研究テーマを専門的にはより深く、研究者としてはより幅広く捉えることを目的とする。研究対象をミクロの視点とマクロな視点から見つめる視点、また研究分野をテキストとコンテキストの關係から見つめる視点を養うことを目的とする。

授業の概要

受講者による研究発表、調査、講義など、実践的に行う。内容としては、作曲家/作品研究、音楽美学、音楽社会学、ニューミュージコロジーについて、音楽学研究者としての基礎的な素養を学ぶ。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

授業の事前事後に 1 時間程度ずつ、文献講読とレジュメの作成を行っておくこと。

学生に対する成績評価の方法・基準

授業までの発表準備 (50%)、授業への取り組み (50%) を総合的に評価する。

テキスト

プリントを随時配布する。

参考書・参考資料等

特になし

授業内容

(前期)

| | |
|----|---------------|
| 1 | イントロダクション |
| 2 | 作曲家研究文献の批判的講読 |
| 3 | 作曲家研究文献の批判的講読 |
| 4 | 作曲家研究文献の批判的講読 |
| 5 | 作曲家研究文献の批判的講読 |
| 6 | 楽曲分析文献の批判的講読 |
| 7 | 楽曲分析文献の批判的講読 |
| 8 | 楽曲分析文献の批判的講読 |
| 9 | 楽曲分析文献の批判的講読 |
| 10 | 楽曲分析文献の批判的講読 |
| 11 | 音楽社会学文献の批判的講読 |
| 12 | 音楽社会学文献の批判的講読 |
| 13 | 音楽社会学文献の批判的講読 |
| 14 | 音楽社会学文献の批判的講読 |

(後期)

| | |
|----|---------------------|
| 1 | イントロダクション |
| 2 | 音楽美学文献の批判的講読 |
| 3 | 音楽美学文献の批判的講読 |
| 4 | 音楽美学文献の批判的講読 |
| 5 | 音楽美学文献の批判的講読 |
| 6 | ニューミュージコロジー文献の批判的講読 |
| 7 | ニューミュージコロジー文献の批判的講読 |
| 8 | ニューミュージコロジー文献の批判的講読 |
| 9 | ニューミュージコロジー文献の批判的講読 |
| 10 | 音楽学研究の諸分野に関する先行研究批判 |
| 11 | 音楽学研究の諸分野に関する先行研究批判 |
| 12 | 音楽学研究の諸分野に関する先行研究批判 |
| 13 | 音楽学研究の諸分野に関する先行研究批判 |
| 14 | 音楽学研究の諸分野に関する先行研究批判 |
| 15 | 音楽学研究の諸分野に関する先行研究批判 |

| | | | |
|-----------------|-------------------|--------|--------|
| 音楽教育総合研究 | 担当教員 | 時間数 | 単位数 |
| | もりた きょうこ 森田 恭子 | 1 時限/週 | 2 単位/年 |

| |
|---|
| 授業の到達目標及びテーマ |
| 音楽教育の分野に関する博士論文の作成を目指す。 その際、必要とされる自立した研究者としての基礎を養う。 |
| 授業の概要 |
| 博士論文の作成の遂行に伴う課題を自ら発見し、その解決に向けて教員、あるいは学生同士で議論を行う。 |
| 予習・復習等の内容・それに必要な時間 |
| 自らの研究課題や研究計画に基づき、自主的に研究に取り組む。特に、入手した論文を精読し、批判的観点をもって博士論文の参考としていく。 |
| 学生に対する成績評価の方法・基準 |
| 授業日ごとの研究の進捗状況の報告 (50%) 研究に対する姿勢 (50%) |
| テキスト |
| 必要に応じて提示する。 |
| 参考書・参考資料等 |
| 必要に応じて提示する。 |

| | |
|-------------|---|
| 授業内容 | |
| 〔前期〕 | |
| 1-14 | 自ら設定した課題に関連する先行研究の精読を行いながら、最新の知見を加味して、独自の発想による博士論文の骨子を構想する。 |
| 〔後期〕 | |
| 1-15 | 論文構成を更に精査、修正しながら、博士論文として完成させるための課題を明確にしていく。 |

| | | | |
|----------------|-------------------|--------|--------|
| 指揮法実技研究 | 担当教員 | 時限数 | 単位数 |
| | きたはら ゆきお 北原 幸男 | 1 時限/週 | 2 単位/年 |

| |
|--|
| 授業の到達目標及びテーマ |
| 指揮者には固有の意識を持った人間の集団をまとめてゆく指名がある。この授業では、指揮者とは何か、そして演奏者のベストな面を引き出すための指揮法とオルガニゼーションを学ぶ。 |
| 授業の概要 |
| ピアニスト2人を伴奏者として指揮をする。脱力、自然な呼吸を伴ったボディランゲージの習得。 |
| 予習・復習等の内容・それに必要な時間 |
| 自身で楽曲の分析＝アナリーゼを行う。鏡などを活用して指揮の練習を行い、録画等を利用して日々研鑽を積む。(毎日1時間程度) |
| 学生に対する成績評価の方法・基準 |
| 授業における指揮技術 (70%) 指揮芸術に関するレポートの提出 (30%) |
| テキスト |
| 斉藤秀雄著 改定新版『指揮法教程』(音楽之友社) |
| 参考書・参考資料等 |
| 紙谷一衛著 『人を魅了する演奏』(白水社) |

| | |
|-------------|--|
| 授業内容 | |
| 〔前期〕 | |
| 1 | 呼吸法と脱力 (ボディランゲージ) |
| 2 | 呼吸法と脱力 (運動感覚) |
| 3 | 心の持ち方と集中力 (リーダーシップ) |
| 4 | 心の持ち方と集中力 (指揮者に求められるもの) |
| 5 | コミュニケーション能力について |
| 6 | 表現力の研究 |
| 7 | 練習時の良い雰囲気作りについて |
| 8 | 楽曲分析 (アナリーゼ) の方法 |
| 9 | スコアリーディング (総譜をいかに読んでいくか) |
| 10-14 | 指揮法教程に沿った指揮技術の研究後、8曲の練習曲をピアニスト2人相手に指揮を実践する |
| 〔後期〕 | |
| 1-3 | オーケストラ曲を実際に指揮しながら実習する |
| 4 | オペラの指揮の注意点 |
| 5-6 | 5-6コンチェルトの指揮の注意点 |
| 7-9 | 一人のできる楽曲の勉強法 |
| 10-15 | 10-15総まとめ |

| ソルフェージュ特殊講義 | 担当教員 | 時間数 | 単位数 |
|-------------|-----------------|--------|--------|
| | ただ 高田 さちこ 幸子 | 1 時限/週 | 2 単位/年 |

授業の到達目標及びテーマ

音楽作品としての様式とは旋律、リズム、和声、響きなどの音楽的要素によって作品を作り上げている音楽的特徴を意味する。音楽作品における様式の理解は作品の本質的な理解のために必要不可欠である。この授業では総合的な様式分析を通して作品の理解を深め、演奏、又は創作活動に生かすことを到達目標とする。

授業の概要

様式には 1) 個人 2) 時代 3) 国民 4) 地方 5) 世代 6) ジャンル 7) 目的などが挙げられるが、この授業においては主に個人様式を扱う。時代様式を踏まえた上で同時代の作曲家の個人様式を比較、分析することにより、作品の本質に迫る。また、分析結果が演奏へ反映されているかを検証する。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

ソルフェージュは実技を伴う科目であり、日々の学習の積み重ねが非常に重要である。従って、毎日 30 分の予習、ならびに復習が必要である。

学生に対する成績評価の方法・基準

前期、後期の各試験結果（70%）に平常点（30%）を加えて評価する。

テキスト

市販されている楽譜に関しては各自用意する。他はプリントを配布する。

参考書・参考資料等

スタイル・アナリシス ヤン・ラルー・/ 大宮眞琴=共著 音楽之友社

授業内容

〔前期〕

| | |
|----|------------------------------|
| 1 | 授業内容、テキスト、授業に対する心構えの説明 |
| 2 | 総合的な様式分析の方法について |
| 3 | バッハの器楽曲 |
| 4 | ヘンデルの器楽曲 |
| 5 | テレマンの器楽曲 |
| 6 | バッハ、ヘンデル、テレマンの専攻楽器による作品の様式分析 |
| 7 | 分析した作品の視唱、又は視奏 |
| 8 | 古典舞曲 |
| 9 | ハイドンの器楽曲、管弦楽曲 |
| 10 | モーツァルトの器楽曲、管弦楽曲 |
| 11 | ベートーヴェンの器楽曲、管弦楽曲 |
| 12 | ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンの様式の比較研究 |
| 13 | 分析した作品の視唱、又は視奏 |
| 14 | 全授業のまとめ、分析に基づく演奏と確認 |

〔後期〕

| | |
|----|---------------------|
| 1 | シューベルトの歌曲 |
| 2 | シューマンの歌曲 |
| 3 | シューマンの器楽曲、室内楽曲 |
| 4 | ブラームスの歌曲 |
| 5 | ブラームスの器楽曲、室内楽曲 |
| 6 | シューマンとブラームスの様式の比較研究 |
| 7 | ドビュッシーの器楽曲 |
| 8 | ラヴェルの器楽曲 |
| 9 | ドビュッシーとラヴェルの様式の比較研究 |
| 10 | バルトークの器楽曲 |
| 11 | 12 音技法による器楽曲 |
| 12 | 近現代の作品（自由選択） |
| 13 | 受講者各自が選択した曲の分析結果の発表 |
| 14 | 時代様式を生かした演奏法の考察 |
| 15 | 演奏会を前提とした作品分析の発表と演奏 |

| 音楽理論特殊講義 | 担当教員 | 時間数 | 単位数 |
|----------|-------------------|--------|--------|
| | のざき 野崎 ゆきお 勇喜夫 | 1 時限/週 | 2 単位/年 |

授業の到達目標及びテーマ

西洋音楽における記譜や理論はそのまま様々な時代や地域を反映している。

「記譜」という行為による音楽の意識化、顕在化と「記号」としての限界を意識しながら、「創作」と「演奏」、「楽譜」と「音楽」の関わりについて、様式や理論に基づきながら整理し、研究や演奏に役立てることが目標となる。

授業の概要

それぞれの受講生の研究対象、演奏レパートリーに関わる内容となる。分析や調査研究について、助言や指導を行い、さらなる視野の拡充と問題点の整理をしていき、その対象となる楽曲や作品などについて、様々な視点からのアプローチを試みる。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

研究テーマに関しての分析や調査について自発的におこなうこととし、授業時に明らかになった問題点について次授業までに整理する。必要時間は問わない。

学生に対する成績評価の方法・基準

前期、後期それぞれ一回ずつのレポート提出と（50%）と授業時の課題実施（50%）によって総合的に評価する。

テキスト

授業毎に資料や楽譜を配布する。

参考書・参考資料等

『一般言語学講義』ソシュール著、『物語の構造分析』バルト著など。

授業内容

〔前期〕

まずオリエンテーションを実施し、授業の意味するところを確認する。その後、履修者の研究対象に合わせ、分析方法、調査方法などについて討議する。前期においては、西洋音楽の記譜や理論についての読解や解釈について、バロック時代から近現代までの作品を取り上げ、それぞれの様式の変遷、作曲家の特質などを検証する。そこで表出した差異等を整理し、記譜における限界点を明確にしていきながら、現在にいたる音楽の表現方法についても考察する。

〔後期〕

より多様化、多元化する音楽について特に記譜法、楽器奏法、作曲技法などの点からアプローチする。それらの音楽について、ウィットゲンシュタイン、ソシュール、ロランバルト等の言語学や記号論など、実質と差異（つまり創作と演奏）という音楽の本質に関わる視点も交えながら、さらに広い観点から表現や研究の可能性を探る。主に 20 世紀以降の作品を題材に具体的に進める。

| 西洋音楽史特殊講義 | 担当教員 | 時間数 | 単位数 |
|-----------|-----------------|--------|--------|
| | ふくだ わたる 福田 弥 | 1 時限/週 | 2 単位/年 |

授業の到達目標及びテーマ

西洋音楽における諸問題について、音楽学の視点から取り組む力を幅広く学修することを目標とする。とりわけ自らの専門領域以外の西洋音楽史全般、音楽学全般の知識を身に付け、批判的に考察し、それをプレゼンテーションする力を養うことを目標とする。受講者からの積極的な発言を期待する。

授業の概要

西洋音楽史や一般の西洋史の領域における基礎的事項を再確認しつつ、「授業内容」に示したテーマについて受講者に発表してもらおう。受講者の関心の方向性によっては、テーマの変更も可能である。受講者は、各テーマについて調べてきた内容を整理し、ハンド・アウトを作成した上で、プレゼンテーションすること。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

普段からの自発的かつ積極的な態度が必要。発表時には必ずハンド・アウトを作成し、適切な作品例（譜例と音源）を準備して臨むこと。1時間。

学生に対する成績評価の方法・基準

授業態度による。

テキスト

指定しない。

参考書・参考資料等

講義時に指示する。

授業内容

〔前期〕

| | |
|----|------------------|
| 1 | 音楽学概説 |
| 2 | バロックと古典派のコンチェルト |
| 3 | 同 |
| 4 | バロック・オペラ |
| 5 | 同 |
| 6 | ヴァーグナーの楽劇 |
| 7 | 同 |
| 8 | 三部形式 |
| 9 | 二部形式 |
| 10 | ソナタ形式 |
| 11 | 同 |
| 12 | 社会主義リアリズム |
| 13 | 同 |
| 14 | 受講者の研究テーマについての発表 |

〔後期〕

| | |
|----|------------------|
| 1 | ドイツ・ロマン主義の概念 |
| 2 | 同 |
| 3 | ナショナリズムと音楽 |
| 4 | 同 |
| 5 | ハンスリック『音楽美について』 |
| 6 | 同 |
| 7 | 印象主義の音楽 |
| 8 | 同 |
| 9 | セリーの音楽 |
| 10 | 同 |
| 11 | 新古典主義の音楽 |
| 12 | 同 |
| 13 | 同 |
| 14 | 受講者の研究テーマについての発表 |
| 15 | 同 |

| 日本・東洋音楽史特殊講義 | 担当教員 | 時間数 | 単位数 |
|--------------|------------------|--------|--------|
| | こもだ はるこ 薦田 治子 | 1 時限/週 | 2 単位/年 |

授業の到達目標及びテーマ

民族音楽学は、隣接諸科学の様々な考え方を取り入れて新しい方法論を開拓しつつあり、その成果は西洋音楽の研究者たちにも影響を与えている。この授業を通して、こうした新しい研究の方法論と考え方を身に付けることを目標とする。

授業の概要

民族音楽学の基本的な考え方をまなび、西洋を含め、各自が研究対象とする民族の音楽への応用方法を考える。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

予習・復習として与えられた課題に取り組む。2時間。

学生に対する成績評価の方法・基準

試験（80%）、平常点（20%）。

テキスト

特に指定しない。

参考書・参考資料等

徳丸吉彦『音楽学とはなにか—理論と現場の間から』（岩波書店2008）他

授業内容

〔前期〕

| | |
|----|-------------------|
| 1 | 音楽学の歴史と民族音楽学 |
| 2 | 異文化理解と音楽学 |
| 3 | 音楽行動の研究 |
| 4 | 音楽研究のモデル |
| 5 | 音楽における音高のシステム |
| 6 | 音楽における時間のシステム |
| 7 | 音楽におけるテクスチュアのシステム |
| 8 | 楽器と身体 |
| 9 | 楽器とテクノロジー |
| 10 | 楽器と音楽様式 |
| 11 | 音楽における声 |
| 12 | 文化の中の声 |
| 13 | 演奏研究 |
| 14 | 前期のまとめと復習 |

〔後期〕

| | |
|----|--------------------|
| 1 | 音楽伝達における口頭性と書記性 |
| 2 | 唱歌（しょうが） |
| 3 | 音楽様式における変化 |
| 4 | 音楽様式と制度 |
| 5 | パフォーマンスにおける個人と集団 |
| 6 | 音楽伝承における個人と集団 |
| 7 | 音楽における表象 |
| 8 | 音楽における間テクスト性 |
| 9 | 音楽のテキストとコンテキスト（脈絡） |
| 10 | 音楽の脈絡変換 |
| 11 | フォークロアとフォークロリズム |
| 12 | ベートーヴェンの民族音楽学 |
| 13 | 音楽学と歴史意識 |
| 14 | 民族音楽学の一分野としての音楽学 |
| 15 | 後期のまとめと復習 |

| 音楽美学特殊講義 | 担当教員 | 時間数 | 単位数 |
|----------|------------------|--------|--------|
| | のほら やすこ 野原 泰子 | 1 時限/週 | 2 単位/年 |

授業の到達目標及びテーマ

各自の研究テーマに即し、美学的な論点の著述を講読する。教員が推奨する文献、および受講生が関心を寄せる文献の中から、受講生と相談して文献を決定する（講読する文献は受講生により異なる可能性が高い）。美学的な見地から考察する術を学び、自らの研究に生かすことを目的とする。

授業の概要

初回の授業で、受講生と講読する著作を検討する。授業では各回の担当を決め、担当者が選ぶ著作の一部（単行本のなかの1章程度）を講読・検討していく。授業の終盤では、これまでに得た知識を自らの研究に関連付け、自ら美学的な考察を試みる。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

自分が担当する回に向け、自ら選択した文献を熟読し、レジュメの作成などの準備を進める。コンスタントに取り組むことが望ましい（週90分程度）。

学生に対する成績評価の方法・基準

担当回に向けた準備（80%）、受講態度（20%）から判断する。

テキスト

授業では主にプリントを用いる。

参考書・参考資料等

授業時に関連文献を紹介する。

授業内容

〔前期〕

| | |
|----|-------------------|
| 1 | オリエンテーション |
| 2 | 音楽美学の基礎知識① |
| 3 | 音楽美学の基礎知識② |
| 4 | 教員によるデモンストレーション① |
| 5 | 教員によるデモンストレーション② |
| 6 | 音楽美学に関連する文献の講読・検討 |
| 7 | 音楽美学に関連する文献の講読・検討 |
| 8 | 音楽美学に関連する文献の講読・検討 |
| 9 | 音楽美学に関連する文献の講読・検討 |
| 10 | 音楽美学に関連する文献の講読・検討 |
| 11 | 音楽美学に関連する文献の講読・検討 |
| 12 | 音楽美学に関連する文献の講読・検討 |
| 13 | 音楽美学に関連する文献の講読・検討 |
| 14 | 音楽美学に関連する文献の講読・検討 |

〔後期〕

| | |
|----|---------------------|
| 1 | 音楽美学に関連する文献の講読・検討 |
| 2 | 音楽美学に関連する文献の講読・検討 |
| 3 | 音楽美学に関連する文献の講読・検討 |
| 4 | 音楽美学に関連する文献の講読・検討 |
| 5 | 音楽美学に関連する文献の講読・検討 |
| 6 | 音楽美学に関連する文献の講読・検討 |
| 7 | 音楽美学に関連する文献の講読・検討 |
| 8 | 美学的考察の試み デモンストレーション |
| 9 | 美学的考察の試み① |
| 10 | 美学的考察の試み② |
| 11 | 美学的考察の試み③ |
| 12 | 美学的考察の試み④ |
| 13 | 美学的考察の試み⑤ |
| 14 | 総括 |

| 文献演習 I | 担当教員 | 時間数 | 単位数 |
|--------|-----------------|--------|--------|
| | さかい かずお 堺 和男 | 1 時限/週 | 2 単位/年 |

授業の到達目標及びテーマ

この授業では、英語で書かれた文献（論文・著書など）について、次項に示すような演習を行い、研究に不可欠な文献読解能力を養い、研究・論文作成に役立てることを目標とする。

授業の概要

- 次のような演習を行う。
- 各履修者の研究・論文作成に必要な英語文献を正確かつ円滑に読む。
 - インターネット、eメール等による英語での情報の収集・発信を行う。
 - その他、各履修者の個別の状況に応じて、必要な演習を行う。

予習・復習等の内容・それに必要な時間

各自の目標に合わせて、十分に準備を整え、授業に臨むこと。単に文献の字面をなぞるのではなく、日頃から、英語運用能力全般の増進に努めること。

学生に対する成績評価の方法・基準

授業への参加状況、文献読解の成果、授業の準備状況により総合的に判定する。

テキスト

教科書は使用しない。授業で使用する文献は履修者と打ち合わせの上で決定する。

参考書・参考資料等

必要に応じ、授業中に随時紹介する。

授業内容

〔前期〕

| | |
|------|---|
| 1-14 | 研究や論文作成のうえで必要な英語文献の読解・講読を中心に授業を進める。初回の授業で、履修者と打ち合わせたうえで扱う文献を決定するので、各自の研究テーマに即して、あらかじめ計画を立てておくこと。2回目以降、計画に沿って読解・講読を進めていく。履修者の状況に応じて、英語による文献調査全般についての指導なども行う。 |
|------|---|

〔後期〕

| | |
|------|---|
| 1-15 | 前期に引き続き、読解・講読の演習を進める。必要に応じて計画を修正しながら、前期同様の演習・指導を行う。 |
|------|---|

| | | | |
|--------------|------------------------|--------|--------|
| 文献演習Ⅱ | 担当教員 | 時間数 | 単位数 |
| | こしかげざわ 越懸澤 まい 麻衣 | 1 時限/週 | 2 単位/年 |

| |
|---|
| 授業の到達目標及びテーマ |
| ドイツ語の文献を丁寧に読み深めることで、博士論文を執筆する際に必要なドイツ語の語学力を高めることを目標とする。 |
| 授業の概要 |
| ドイツ語文献を読み、内容の理解を深めるとともに、日本語の訳文を作成する。 取り上げる文献は履修者の関心によって決定する。 |
| 予習・復習等の内容・それに必要な時間 |
| 辞書で単語を調べ、意味を把握する。また必要に応じ、楽譜等も参照しておく。授業後は訳文を作成する。各1時間。 |
| 学生に対する成績評価の方法・基準 |
| 授業への取り組みから総合的に評価する。 |
| テキスト |
| 教材は授業時にプリントを配布する。 |
| 参考書・参考資料等 |
| 独和辞典、ドイツ語の文法書 |

| | |
|-------------|-----------------------|
| 授業内容 | |
| (前期) | |
| 1 | オリエンテーション |
| 2 | 履修者の研究課題に即したドイツ語文献の講読 |
| 3 | 履修者の研究課題に即したドイツ語文献の講読 |
| 4 | 履修者の研究課題に即したドイツ語文献の講読 |
| 5 | 履修者の研究課題に即したドイツ語文献の講読 |
| 6 | 履修者の研究課題に即したドイツ語文献の講読 |
| 7 | 履修者の研究課題に即したドイツ語文献の講読 |
| 8 | 履修者の研究課題に即したドイツ語文献の講読 |
| 9 | 履修者の研究課題に即したドイツ語文献の講読 |
| 10 | 履修者の研究課題に即したドイツ語文献の講読 |
| 11 | 履修者の研究課題に即したドイツ語文献の講読 |
| 12 | 履修者の研究課題に即したドイツ語文献の講読 |
| 13 | 履修者の研究課題に即したドイツ語文献の講読 |
| 14 | まとめ |
| (後期) | |
| 1 | オリエンテーション |
| 2 | 履修者の研究課題に即したドイツ語文献の講読 |
| 3 | 履修者の研究課題に即したドイツ語文献の講読 |
| 4 | 履修者の研究課題に即したドイツ語文献の講読 |
| 5 | 履修者の研究課題に即したドイツ語文献の講読 |
| 6 | 履修者の研究課題に即したドイツ語文献の講読 |
| 7 | 履修者の研究課題に即したドイツ語文献の講読 |
| 8 | 履修者の研究課題に即したドイツ語文献の講読 |
| 9 | 履修者の研究課題に即したドイツ語文献の講読 |
| 10 | 履修者の研究課題に即したドイツ語文献の講読 |
| 11 | 履修者の研究課題に即したドイツ語文献の講読 |
| 12 | 履修者の研究課題に即したドイツ語文献の講読 |
| 13 | 履修者の研究課題に即したドイツ語文献の講読 |
| 14 | 履修者の研究課題に即したドイツ語文献の講読 |
| 15 | まとめ |

| | | | |
|--------------|------------------|--------|--------|
| 文献演習Ⅲ | 担当教員 | 時限数 | 単位数 |
| | きくち ひでみ 菊池 英美 | 1 時限/週 | 2 単位/年 |

| |
|---|
| 授業の到達目標及びテーマ |
| 履修者の博士論文作成に必要な研究課題に沿った（イタリア語で書かれた）文献、スコア等を解説することにより、今まで蓄積してきた内容を更に深め、各自の論文作成充実の為に役立てることを到達目標とする。 |
| 授業の概要 |
| 楽書購読に必要な不可欠なイタリア語の文法と音楽に関する専門用語の知識をより幅広く学習し、履修者の研究課題に適した文献等を読み進めていく。文献の内容が研究主眼から離隔した場合は適宜、主題に叶った他の文献を探る等、臨機応変に対処してゆく。 |
| 予習・復習等の内容・それに必要な時間 |
| 文献翻訳の復習予習での心構えは単なる直訳にならず、内容を良く理解し論文使用にそのまま使える文章を心掛ける。予習復習は週5時間は費やしてほしい。 |
| 学生に対する成績評価の方法・基準 |
| 履修者の研究に対する意欲、文章力、読解力等から総合的に判断し、評価する。 |
| テキスト |
| 履修者の研究課題に合った文献を履修者と共に相談して、選別する。 |
| 参考書・参考資料等 |
| 授業内にて適宜指示する。 |

| | |
|---|--|
| 授業内容 | |
| (前期) | |
| 学生各自の目標とする研究課題に適した文献、楽譜、スコア等の解説、分析が中心となることは当然であるが、Camerata から Monteverdi そしてナポリ派に至るイタリアの音楽作品、とくにオペラの搖籃期についてのより高度な知識の修得も視野に置く。 | |
| 器楽、音楽学等専攻の履修者については、必要とあらばこの時代のイタリア器楽作品についての文献を解説することも可能である。 | |
| (後期) | |
| 前期に続き各自の研究課題に沿った文献、スコアの解説を進めていくが、イタリア・ロマン派から近代までの代表的な作曲家及び時代背景等の再認識も行う。特に Verdi の作品を研究する上で欠かせないイタリア国家統一運動 (Risorgimento) に関する知識も深めてみたい。 | |



2019